

竹田墳墓群

竹田遺跡発掘調査報告第1集

1984

鏡野町教育委員会

たけ だ ふん ぼ ぐん
竹 田 墳 墓 群

竹田遺跡発掘調査報告第1集

鏡野中学校建設用地造成に伴う

墳墓群等発掘調査報告書

1984

鏡野町教育委員会

序

鏡野中学校新校舎建設に伴い、昭和46年に竹田墳墓群を発掘調査してから、以来各方面から報告書刊行への強い要望を受けつつも、諸般の事情により刊行が遅れ、今日に至ったことをお詫びします。

文化財の保存をどのように図っていくかは、鏡野町においても当面する重要な課題であります。学校建設のためとはいえ、貴重な遺跡を破壊せざるを得なかったことはまことに遺憾なことでした。しかし一面、この調査を契機に町民の埋蔵文化財に対する関心が、急激に高まったことは事実であり、この高まりを今後の文化財保護に生かしていくかねばならないと思っています。

限られた期間と、不満足な体制のもとで、各関係者の献身的努力により、調査を終了しましたが、現在では再びその姿を現地で見ることができないこれら遺跡を、この報告書によって、学術の研究や、本町歴史の解明、また文化財保護活動に活用していただければ幸です。

終りになりましたが、発掘調査及び報告書作成にあたり、ご理解とご指導ご援助をいただきました岡山県教育委員会、鏡野町文化財保護委員会、鏡野町教育研修所、鏡野中学校等各関係機関の方々、全般にわたり終始親身になってご指導いただいた岡山大学近藤義郎教授、又貴重なご教示をいただいた京都大学池田次郎教授その他多数の研究者各位に深く感謝の意を表します。

そして、直接この調査を担当し、且つ、報告書作成にあたられました日本考古学協会会員今井堯氏・土居徹氏及び多数の協力者の方々のご苦労に対して、謹しんで深謝申し上げます。

昭和59年6月

鏡野町教育委員会

教育長 宗 本 治

例 言

1. 本書は、1971年7月から10月にかけて鏡野町教育委員会が実施した統合中学校（現鏡野中学校）建設にともなう校地造成にさきだつ、弥生時代後期の弥生墳丘墓・前期小形古墳の事前発掘調査の報告書である。
発掘対象地の地番は、岡山県苫田郡鏡野町竹田字斎藤丸586番地である。
2. 発掘調査および報告書作成に要した経費はすべて鏡野町の負担にかかるものである。
3. 発掘主体者は鏡野町教育委員会であり、鏡野町文化財保護委員会・同町教育委員会社会教育係が事務局を構成し、今井堯・土居徹を発掘担当者として発掘を実施した。
4. 発掘遺物の整理・復元は岡山大学近藤義郎教授の指導の下に今井堯・土居徹・中島健爾・安藤武夫・定久正義・角南勝弘・河本清・安川豊史が当った。
5. 遺構の実測には発掘担当者のほか、河本清・定久正義・溝口洋子・牧本純代が参加した。
遺構のトレースは神原英朗・太田耕一・国安敏樹が当り、遺物の実測・製図は安川豊史が行なった。遺跡・遺構の写真は今井堯・土居徹、見学会写真は片山太郎、遺物写真は安川豊史が撮影したものを使用した。
6. 本書の編集には中島健爾・安藤武夫・土居徹・定久正義・角南勝弘が当り、執筆には今井堯（第1章～第5章、第6章1～3・5、第7章1～3・5、第8章3、第9章）、安川豊史（第6章4・第7章4）、竹内幸夫（第8章2）が当った。
7. 別に、出土人骨については京都大学池田次郎教授の鑑定書（第8章1）を掲載させていた
だいた。また付として岡山大学近藤義郎教授の論考をいただいた。
8. 全体に亘って岡山大学近藤義郎教授の教示・助言を得た。
9. 出土遺物・図面は鏡野町歴史資料館が所蔵し、主要遺物は同館で公開展示している。
10. 発掘した遺構のうち、竹田5号墳の組合式箱形石棺4を、実測図にもとづいて鏡野中学校
中庭に移築・復元を行い展示している。
11. 本書に用いた標高はすべて海拔高であり、方位はすべて磁北である。

鏡野町教育委員会

本 文 目 次

第1章 はじめに	
1. 発掘調査にいたるまで	1
2. 発掘調査の組織	2
3. 発掘調査後の処置	2
第2章 遺跡の立地と歴史的背景	
1. 遺跡の立地	4
2. 歴史的背景	5
3. 竹田丘陵の遺跡	9
第3章 5号墳	
1. 調査前の状況と調査の方法	13
2. 古墳の立地・外形・外部施設	13
3. 墳丘の築成	17
4. 埋葬施設と遺物出土状態	18
5. 人骨と遺物	25
6. 5号墳の特徴と時期	27
第4章 6・7号墳	
1. 6号墳	30
2. 7号墳	33
第5章 9号墳	
1. 調査前の状況と調査経過の大要	36
2. 位置と外形、外部施設	37
3. 埋葬施設と遺物出土状態	39
4. 遺物	41
5. 9号墳の特徴と時期	42
第6章 8号弥生墳丘墓	
1. 調査の方法と認識の変化	44
2. 立地・外形・列石・築成	46
3. 埋葬施設	47
4. 遺物	50
5. 8号弥生墳丘墓の特徴と時期	52

第7章	9号墳下住居址	
1.	調査前の状況と調査経過	53
2.	住居址の形態と遺構	53
3.	遺物出土状態	54
4.	遺 物	55
5.	時期と特徴	56
第8章	竹田墳墓群の人骨及び石棺材	
1.	5号墳の人骨	57
2.	5号墳組合せ石棺の石材	60
3.	竹田墳墓群の石材	60
第9章	若干の考察	
1.	竹田墳墓群の調査によって明らかにされた諸点	63
2.	前期小形古墳における棺配置の問題	64
3.	一棺内、複数埋葬の問題	65
4.	墳丘と葺石	67
5.	棺配置と棺構造	68
6.	石 棺 石 材	69
7.	土器枕と石枕	71
8.	副葬品と人骨	71
9.	前期小型古墳の性格と築造の契機	73
付	四隅突出型弥生墳丘墓二題	77

挿 図 目 次

Fig.	1	竹田墳墓群位置図	4
	2	竹田墳墓群附近の地質図	5
	3	竹田墳墓群附近の古墳分布図	6
4—1		赤峯古墳平面	8
—2		土居妙見山古墳平面	8
5		竹田妙見山古墳出土遺物	9
6		竹田墳墓群附近の遺跡分布図	10
7		5号墳平面	14
8		5号墳北斜面葺石	16
9		5号墳墳丘断面	17
10		5号墳中央北棺	19
11		5号墳中央北棺遺物出土状態	20
12		5号墳中央南棺	22
13		5号墳南棺	23
14		5号墳東棺	24
15		5号墳中央北棺出土鼓形器台	26
16		5号墳出土鉄器	26
17		岡山県内発見の鼓形器台	28
18		6・7号墳平面	30
19		6号墳墳丘断面	31
20		6号墳主体部	32
21		7号墳墳丘断面	34
22		7号墳主体部	35
23		9号墳平面	37
24		9号墳墳丘断面	38
25		9号墳中央棺	39
26—1		9号墳中央棺出土鏡	40
—2		9号墳中央棺出土鉄器・玉	41
27		8号墳丘墓平面	45
28		8号墳丘墓墳丘断面	46
29		8号墳丘墓南西部土器棺出土状態	48

Fig.	30	8号墳丘墓北西部土器棺出土状態	48
	31	8号墳丘墓中央部土器棺出土状態	49
	32	8号墳丘墓出土土器 I (土器棺A・Bその他)	51
	33	8号墳丘墓出土土器 II (土器棺C)	52
	34	9号墳下住居址	54
	35	9号墳下住居址出土土器	55
	36	9号墳下住居址出土鉄器	56
	37	備後発見の四隅突出型弥生墳丘墓	78
	38(上)	阿弥大寺弥生墳丘墓	79
	(下)	順庵原1号弥生墳丘墓	79
	39(上)	播磨周編寺山墳墓	80
	(下)	美作門ノ山1号墳墓	80
	40(上)	仲仙寺9号四隅突出型弥生墳丘墓	84
	(下)	宮山IV号四隅突出型弥生墳丘墓	84
	41	四隅突出型弥生墳丘墓の突出部の変遷	84

図 版 目 次

- PL. 1-1 発掘前の竹田墳墓群（香々美川東岸から）
—2 発掘調査中の竹田墳墓群（8号墳丘墓から竹田丘陵西支脈を望む）
2-1 調査前の5号墳（北東から）
—2 5号墳北斜面葺石（西から）
3-1 5号墳各棺配置（西から）
—2 5号墳土層断面（中央北棺、中央南棺の間を西から）
4-1 5号墳中央北棺蓋石上面（西から）
—2 5号墳中央北棺底部（西から）
—3 5号墳中央北棺遺物出土状況（北から）
5 5号墳中央北棺内部（西から）
6-1 5号墳中央北棺内器台（枕）から落下した頭骨
—2 5号墳中央北棺東半部、人骨鉄器出土状況
7 5号墳中央北棺西半部、人骨鉄器出土状況
8-1 5号墳中央北棺出土鼓形器台
—2 5号墳中央北棺出土鉄鎌・刀子・小刀子
· 9-1 5号墳中央南棺蓋石上面（南から）
—2 5号墳中央南棺内部（西から）
10-1 5号墳東棺蓋石上面（南から、一部は粘土による被覆のまま）
—2 5号墳東棺内部（南から）
11-1 5号墳南棺蓋石上面（東から、粘土端は掘方）
—2 5号墳南棺内発掘直前（東から）
—3 5号墳南棺内人骨出土状況（東から）
12-1 調査前の6号墳（南から）
—2 6号墳石棺（南から）
13-1 調査前の7号墳全景（南から）
—2 7号墳石棺蓋石上面（東から）
—3 7号墳石棺内部（東から）
14-1 9号墳中央粘土櫛遺物出土状況（東から）
—2 9号墳南部葺石（南西から）
15-1 9号墳内行花文鏡出土状況
—2 9号墳出土内行花文鏡・鉄器・管玉及び9号墳下住居址出土鉋

- P.L. 16—1 発掘前の8号墳丘墓（北西から）
— 2 8号墳丘墓西部中央列石（東から）
17 8号墳丘墓全景（西から）
18—1 8号墳丘墓南西隅列石（南西から）
— 2 8号墳丘墓南西部土器棺出土状況（北東から）
19—1 8号墳丘墓崖面北土器棺と土壙墓（南から）
— 2 8号墳丘墓北西部土器棺出土状況（西から）
20 8号墳丘墓崖面土壙墓群（北西から）
21—1 8号墳丘墓北西部土壙墓群（西から）
— 2 8号墳丘墓南西部土壙墓群（西から）
22—1 8号墳丘墓北西部出土土器棺
— 2 8号墳丘墓南西部出土土器棺
23—1 9号墳下住居址全景（東から）
— 2 9号墳下住居址北東部（南から）
24—1 9号墳下住居址つぼ・高坏出土状況
— 2 9号墳下住居址小形丸底土器出土状況
25—1 9号墳下住居址出土高坏
— 2 9号墳下住居址出土つぼ

第1章 はじめに

1. 発掘調査に至るまで

津山盆地とその周辺には、低丘陵と谷・小支流があり、集落・古墳などの遺跡に富んでおり鏡野町竹田地区もその例外ではない。

鏡野町立鏡野中学校の統合校舎が町村合併以前の各旧村からの交通の便の点から町の中心部である、竹田地区に計画された。この竹田地区の建設予定地は、北に寄せれば「大野の整合」と呼ばれる第3紀層の砂岩と泥岩が互層をなす県指定天然記念物があり、南に寄せれば前方後円墳の竹田妙見山古墳と竹田八幡山古墳群があることから、止むを得ずここに決ったものである。統合中学校が必要である以上実施計画の一部変更によって、竹田小円堂古墳を工事対象地から除外したうえで、事前調査を実施することにした。

この工事対象地の丘陵は、東は香々美川の乱流によって、その主脈線近くまで崖となり崩落寸前であり、その最高所には調査前に墳丘の半ば以上を失った方墳と見られていた8号墓があった。そこから西南に伸びる支脈頂に竹田5号墳があり、その支脈の東側は15年戦争末期に開墾された畠地が荒地となっており、5号墳の東に径数mの小墳の埋葬施設の石棺が半ばを失って露出していた。従って保存問題は主として竹田5号墳に集中していた。

そこで①対象地内に極めて重要な遺構が見出された場合は、保存すること。②学校校舎建築対象地の南北の丘陵地などの遺跡の保存に今後一層留意することを条件として、発掘調査団が発足した。

調査団は工事対象地の緊急分布調査を行い、6号墳の北側支脈基部に、より小さな7号墳を発見し、5号墳の地から急激に下降する尾根上にすでに墳丘盛土のほとんどを失っている9号墳の裾部を下降する丘陵南側に見出した。こ

の緊急分布調査と発掘準備は1971年7月20日から8月2日まで行われた。

発掘調査は8月3日から8月27日まで行われ、追加調査と実測が9月28日から9月31日まで実施された。



5号墳見学会

2. 発掘調査の組織

調査主体 鏡野町教育委員会
調査責任者 宗本治（鏡野町教育委員会教育長）
調査顧問 近藤義郎
事務局 鏡野町教育委員会社会教育係
調査担当者 今井堯、土居徹
調査協力者 河本清、定久正義、産賀以都子、角南勝弘、植月壮介、安藤武夫、中島健爾、矢内亀男、溝口洋子、松岡俊子、牧本篤子、溝口法恵、浅山範子、森岡秀次、瀬島守、筆保さつき、安藤由紀子、山本喜美江、牧本純代、矢内艶子、鈴木雪子、中谷朋子、鏡野中学校生徒
協力団体 鏡野町文化財保護委員会、鏡野中学校、鏡野町教育研修所社会科班
整理担当 今井堯、土居徹、河本清、角南勝弘、安川豊史、神原英朗、中島健爾、安藤武夫、定久正義、太田耕一、国安敏樹

報告書の作成に当って、5号墳人骨鑑定については京都大学理学部池田次郎氏、5号墳石棺石材について竹内幸夫氏の手をわざらわせた。また遺跡・遺構・遺物の評価については、西川宏・角田茂・植月壮介の各氏からも協力教示をうけた。

3. 発掘調査後の処置

遺跡群は、1971年の調査の翌年に道路建設及び鏡野中学校校舎建設のためにこわされた。この破壊にさき立って、5号墳の4つの箱式組合石棺について実測図と照合しつつ符号を付して

解体し、1979年に開館した鏡野町歴史資料館に竹田遺跡群の遺物を展示するに際し、そのうち中央北棺を復元した。1981年8月から岡山大学近藤義郎教授と中島健爾、角南勝弘、安藤武夫、定久正義の指導のもとに、鏡野中学校郷土研究クラブ員20名が、5号墳全体の復元にかかり11月に完成した。この復元は実測図・写真をもとに5号墳の墳域・棺配置・各棺構造とともに原状を忠



鏡野中学校内庭 5号墳復元

実に模したものであり、石材は5号墳の石棺石材そのまゝを使用している。5号墳を復元した位置は、5号墳が存在した地点より50m北側にあたり、現鏡野中学校武道館と技術教室の間の中庭225m²を利用したものである。出土遺物のうち、鏡・鉄器類・装身具類・復元土器類は歴史資料館に公開展示し、人骨（写真）及び土器細片は収藏し、研究者の閲覧に供している。また図版の一部も公開展示している。報告書は鏡野町教育委員会の援助によって、ようやく公刊の運びとなったものである。



竹田丘陵現況（PL1-1参照）

第2章 遺跡の立地と歴史的背景

1. 遺跡の立地

鏡野町域は岡山県北東部にあり、北は中国山脈・南は吉備高原にはさまれた盆地列のうち最大である津山盆地の西北部にあたる。中国山脈から南流した小河川が津山盆地周辺で合流して本流の吉井川は、津山盆地で一時東流して吉備高原を解析して南流し瀬戸内海に注ぐ。この津山盆地には主に新生代第3紀および第4紀の堆積物で形成された低い丘陵や大小の沖積地が発達している。

鏡野町域の西北部から南へ吉井川本流が流れそれに西北から合流する郷川周辺に山間部としては大きい沖積地を発達させ、小支流域には谷水田を発達させている。町域の東部を北から南流する香々美川が吉井川に合流する一帯及び、香々美川の支流である山人川など小支流域にも谷水田が形成されている。この状態は水稻栽培が生産の第一義的部門を占めていた原始時代末期から古代前期にかけても同様であったと考えられる。

こうした自然環境のもとにおいて、たとえそれが山間に開けた小盆地であろうとも、現在もそうであるように往古においても水稻栽培が中心的な位置を占めていたことにまちがいない。

本報告の舞台である竹田地区は、香々美川の西縁にある、男山・女山に連なる丘陵の1部を占めるが、その西側には香々美川の支流である山人川の小沖積地が細々と南北に連なっている。

この丘陵は、鏡野中学校北方では香々美川によって侵蝕され高さ30mの崖となっており、その成因を如実に示している。下方から25mまでは砂岩と泥岩が水平に15~50cmの厚さで交互に積み重なっており、その上方にはこぶし大~人頭大の円礫を含む

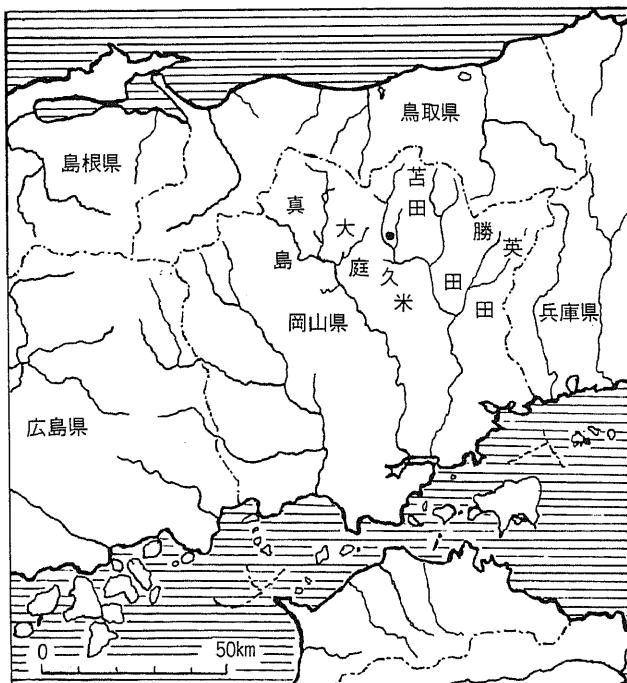


Fig. 1 竹田墳墓群位置図

黄色層が不整合に覆っている。新生代第3紀層が丘陵の基層をなしているのである。この大野の整合と呼ばれて県の天然記念物として指定されている地域のすぐ北に男山・女山と呼ばれる2つの山があり、その岩石は玄武岩であり、これに特有の柱状節理が女山頂上直下でよく見られる（町指定天然記念物）この玄武岩は第三紀層を貫通して

火山活動が行われたことの名残りである。竹田遺跡群は、このように新生代第3紀層を基層とする丘陵の1部に立地するのである。

男山・女山の地から南にのびた竹田丘陵の主脈は解析を受けて高低を持ちながら、またその東側は香々美川の乱流によって崖状を呈しながら、山人川が香々美川に合流する地点近くで消滅する。この主脈から西南にいくつかの支脈が分岐するが、そのうち斎藤丸に伸びる支脈に竹田墳墓群が立地しているのである。

2. 歴史的背景

鏡野町内には555以上の遺跡が知られており、今のところ先土器時代の遺跡は未発見であるが、⁽¹⁾縄文時代早期から近世末までの各時代を含んでいる。このうち、弥生時代集落と古墳がその大半を占めている。これら全てについての記述は省略して、主要なもののみにふれる。やくわしくふれるのは竹田丘陵のものにとどめる。

鏡野町竹田縄文遺跡は縄文時代早期の粗大樋円押型文土器を主体とするもので、小柱穴をもつ樋円形住居址群があり標式的遺跡である。⁽²⁾ 鏡野町沢田隠岐東谷遺跡は低台地上に立地し磨消縄文をもつ縄文後期の遺物散布地であり、このほか山城（公儀屋敷）、下森原、布原台地、古

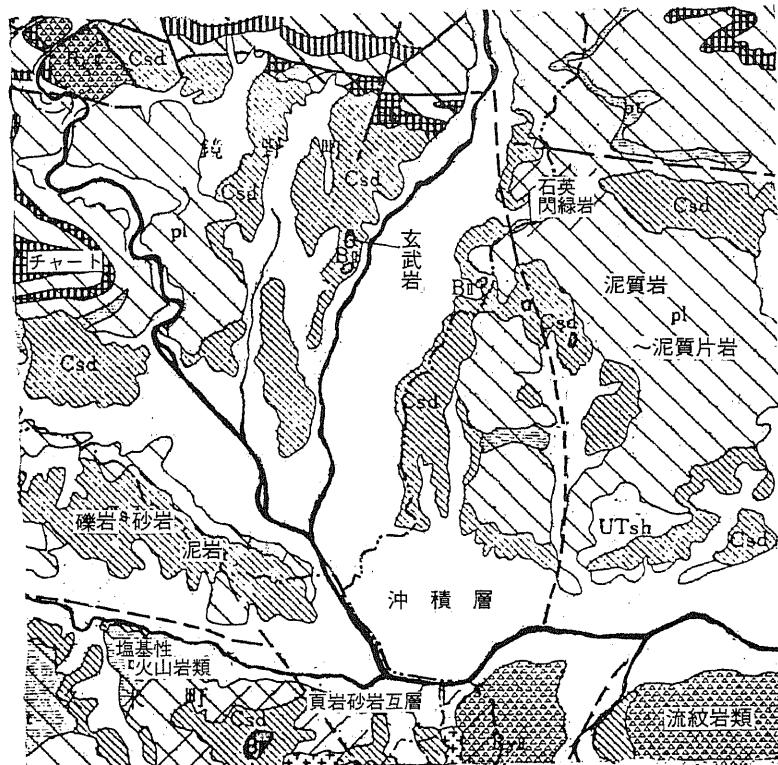


Fig. 2 竹田墳墓群付近の地質図（1/15万）
(内外地図株式会社発行岡山県地質図より)

250M ↑ 法明寺

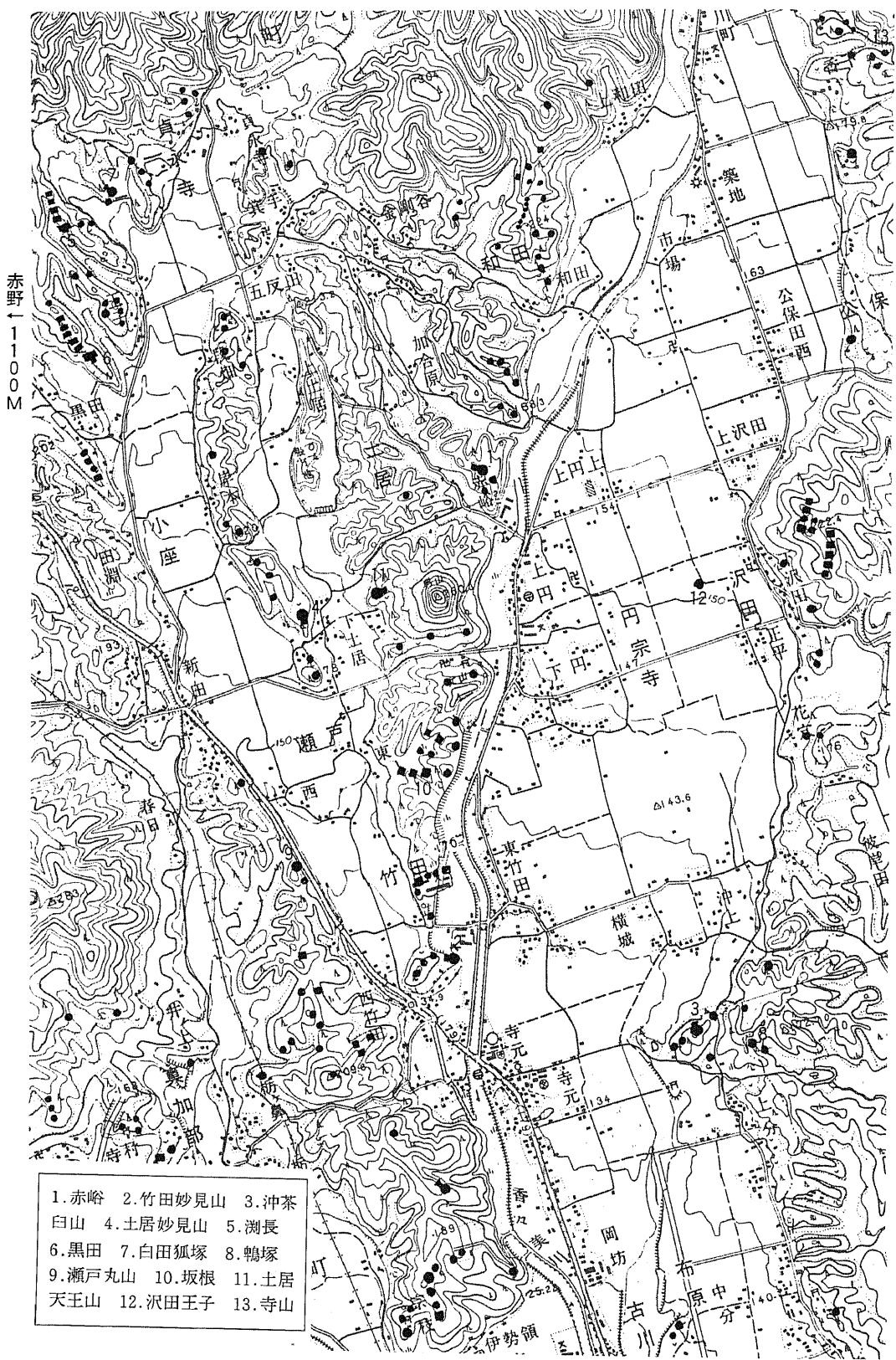


Fig. 3 竹田墳墓群付近の古墳分布図 (1/25,000) (国土地理院発行香々美津山西部)

川地区からも縄文式土器片が発見されているが、今後遺跡数は増加すると予想される。

水稻耕作が開始された弥生時代前期の遺跡は、前期後半のものが津山市一丁田で知られているが、⁽³⁾ 町内では今のところ知られていない。弥生中期前半～中頃の遺跡として新町遺跡、小座西の剣遺跡がある。前者は冲積地の微高地に立地し櫛描波状文・格子目文の発達した土器と夥しい石器類が出土しており、後者は谷水田にはさまれた低丘陵上に立地し、円形浮文・櫛描波状文の発達した土器類・蛤刃石斧・柱状石斧・扁平片刃石斧・環状石斧・石庖丁など多数が出土し径5m弱の円形住居址も存在し弥生後期との複合遺跡である。

弥生後期の遺跡は丘陵上・低台地上・冲積地中の微高地などに30余ヶ所が知られている。

竹田丘陵上には竹田遺跡、同支脈上に大島遺跡が山人川西岸には消滅した瀬戸遺跡がある。香々美川東岸の冲積地の東から南にかけては布原・御船・古川極楽遺跡などが知られている。これらの多くは学術的発掘が行われたものでないことから、集落の規模・構造は明らかにされていない。これらのうち、台地上の布原遺跡は規模の大きいものと推定され、弥生遺跡の分布状況は1～2kmおきに見出されるという密な分布を示す。

このことは津山市沼遺跡の研究で明らかにされたように4～5軒の竪穴住居と倉からなる単位集団が広汎に存在し、⁽⁴⁾ それらは生産と分配の単位となっていたことを想定させる。

弥生後期にはこれら集落のほかに鏡野町竹田中谷台状墓のように同時代の墓地も知られており、集団的埋葬が丘陵上で行われ始めたことも知られている。

鏡野町域では現在420を越える古墳が知られているが、町域での最古の古墳は吉井川本流に属する下原觀音山古墳である。この古墳は1920年代に盗掘され遺物が出土し、梅原末治氏の報告によって古式古墳として著名である。⁽⁵⁾ この報告文では墳形は前方後円墳とされたが、其後の調査によって全長54mの前方後方墳で葺石があり、埋葬施設は竪穴式石室であることが知られた。遺物として鏡3面・劍・柳葉式鉄鏃などあるが、鏡は吾作銘のある舶載平縁画文帶神獸鏡・「天王日月」銘三角縁4神4獸鏡・半三角縁4獸鏡であり内2面は舶載鏡とされており、4世紀後半の首長墳とされている。大鏡などの下賜品は近畿の最高首長からの下賜品と見られ、大和の最高首長を中心とした擬制的同祖同族関係に組み入れられ、なき首長の保持していた首長靈繼承の儀礼の場としての古墳の築造が開始されたのである。⁽⁶⁾

香々美川とその支流である山人川流域には約200の古墳があるが、そのうち首長墳は極めて僅かである。以下香々美川流域の首長墳の大要を略述する。

⁽⁷⁾ 土居赤峪古墳 全長43mの前方後円墳で葺石があり、後円部には礫床敷の長大な割竹型木棺の埋葬があり前方部には組合石棺がある。後円部埋葬から青蓋作盤竜鏡・勾玉・ガラス小玉・鉄斧・刀子・土師器壺が出土している。(岡山大学調査)

竹田妙見山古墳 全長36mの前方後円墳で後円部の礫床(棺の形は盗掘のため不明)から、円孔があけられた破損大形内行花文鏡の外区が出土したほかガラス小玉が知られている。

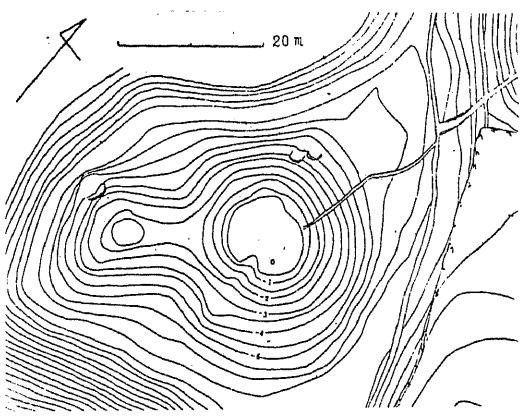
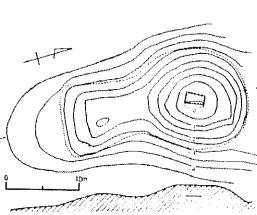


Fig. 4-1 赤峠古墳(1/1000)

沖茶臼山古墳 全長48m の前方後円墳で葺石がある。後円部墳頂平坦部径9.5m で竪穴系の埋葬施設をもつと推定されるが中心部は未掘。



(8)
土居妙見山古墳

全長27m の前方後円墳で葺石があり、後円部に2つの粘土櫛がある。そのうち西櫛から仿製內行花文鏡

2面・鉄劍・鉄斧・土師器が出土。東櫛は未発掘である。

以上は前半期の首長墳と見られ、4世紀後半から5世紀中葉頃までのものと推定されている。

このほか小座地区に渕長5号(25.5m)黒田7号(27m)白田狐塚1号(22m)の小前方後円墳があるが実態は明らかでない。鶴塚1号(23m)・瀬戸丸山(29m)など葺石をもち墳頂平坦部のひろい顯著な円墳や坂根7号(辺21m)の方墳で前半期の可能性の高いものもある。

⁽⁹⁾
土居天王山古墳 全長27m の前方後円墳で後円部に横長石持送積片袖式横穴式石室(玄室幅2.05m 同高2.46m)があり、馬具・直刀・平根式鉄鎌・須恵器・土師器多数が出土しており、6世紀中葉頃と推定されている。

新町法明寺古墳 墳丘の一部を失うが横穴式石室現長8.2m(推定長10m以上)玄室高2.5m、巾1.8mで、陶棺2以上があり、かつて胄・馬具・直刀・須恵器の出土が伝えられ、復元径約20mの円墳で石室・須恵器片の特徴は6世紀後半代のもの。

上記2墳は後半期の首長墳としてよい。

以上ふれた以外の古墳は径または辺20m以下の小墳であり、中でも径13m以下のものが7割を占めている。この小墳のうち若干の前期小形古墳が含まれる可能性はあるが確証はない。

初期群集墳 木棺直葬又は組合式箱形石棺をもち初期須恵器(第I形式又は第IIa形式)をもつ初期群集墳若干が知られている。沢田王子塚からは埴輪人物の腕・須恵器の穀・提瓶が出土し、香々美岡峪寺山1号墳からも埴輪円筒・須恵器片が出土し好例となっている。径13~14m級のこの時期の古墳には円筒埴輪をもつことが一般的である。山人川流域から小丘陵一つへたてた西には塚谷赤野五輪遺跡があり、人物・馬・円筒埴輪が出土し焼土もあり、学術的調査を経てはいないが埴輪製作跡と推定されている。

後期群集墳 横穴式石室をもつ群小墳の段階には、これまで古墳の作られなかった香々美川上流や山人川上流にまで古墳の分布がひろがり、他方では女山の山腹斜面にまで古墳が作られるようになる。香々美川・山人川流域でも横穴式石室内に陶棺が作られるのが一般的であり、沢

田加市1号墳のように横穴式石室内に陶棺4が納められた例もあり、追葬が普遍的になっていることを示している。これらは首長のもとで家父長的大家族が自立したさまを示しているといえよう。この後期群集墳が香々美川・山人川流域においても圧倒的多数を占めている。

3. 竹田丘陵の遺跡

竹田八幡山1号墳 竹田字妙見 竹田丘陵南西端の丘陵頂に立地する円墳 東西径14.8m 南北径13m。高さ1.2mで低平な特徴をもつ。

竹田八幡山2号墳 1号の東方10mの丘陵上に立地する円墳で東西径21m、南北径23m、高さ2.2m。葺石あり、墳頂平坦部径6m、かつて剣を出土したという。

竹田八幡山3号墳 2号から北東への丘陵尾根上にある小円墳、径7~8m、高さ1m弱。

竹田妙見山 竹田字妙見 新田丘陵主脈末端から東に突出した支脈最高所に作られた全長36mの前方後円墳。前方部は尾根利用で西にあり、後円部径28m 同高約5.2m 前方部幅約16m 同高2m、前方部墳端の方が後円部墳端より高い。葺石はあるが埴輪はない。盗掘時の聞書きによると遺物は礫の上から出土したというが石材の記録はない。礫床木棺の可能性もある。現存遺物は内行花文鏡外区（径23cm以上）・コバルト色ガラス小玉22、他に鉄器があったとのことであるが、形・数量とも不明。内行花文鏡の外区は長宜子孫内行花文鏡の外区に酷似する。鏡片には二ヶ所に円孔があり破碎後の使用を思わせる。前2期の首長墳の可能性が高い。

竹田小円堂古墳 竹田字小円堂、丘陵鞍部に作られた円墳。現径東西12m 南北11.3m 高さ東から2.5m、墳裾が道路・墓地のために削られており推定径14m弱。自然地形利用のため東裾は西裾より70~90cm低い。墳頂平坦部なし。葺石あり。

竹田5号墳 方墳 (本報告第3章)

竹田6号墳 円墳 (〃 第4章1)

竹田7号墳 円墳 (〃 第4章2)

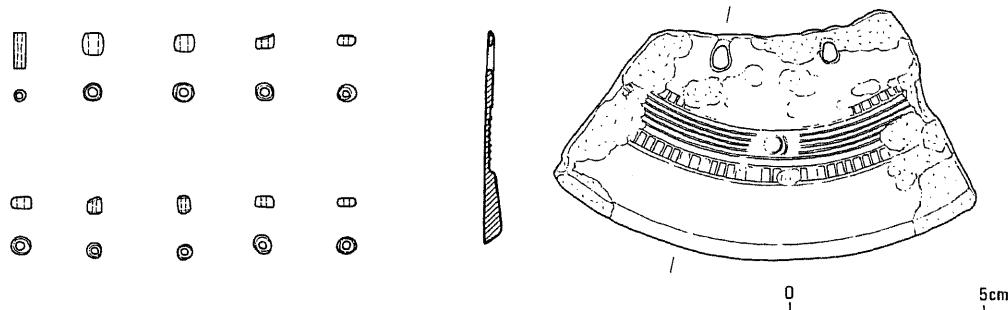


Fig. 5 竹田妙見山古墳出土遺物 (1/2)

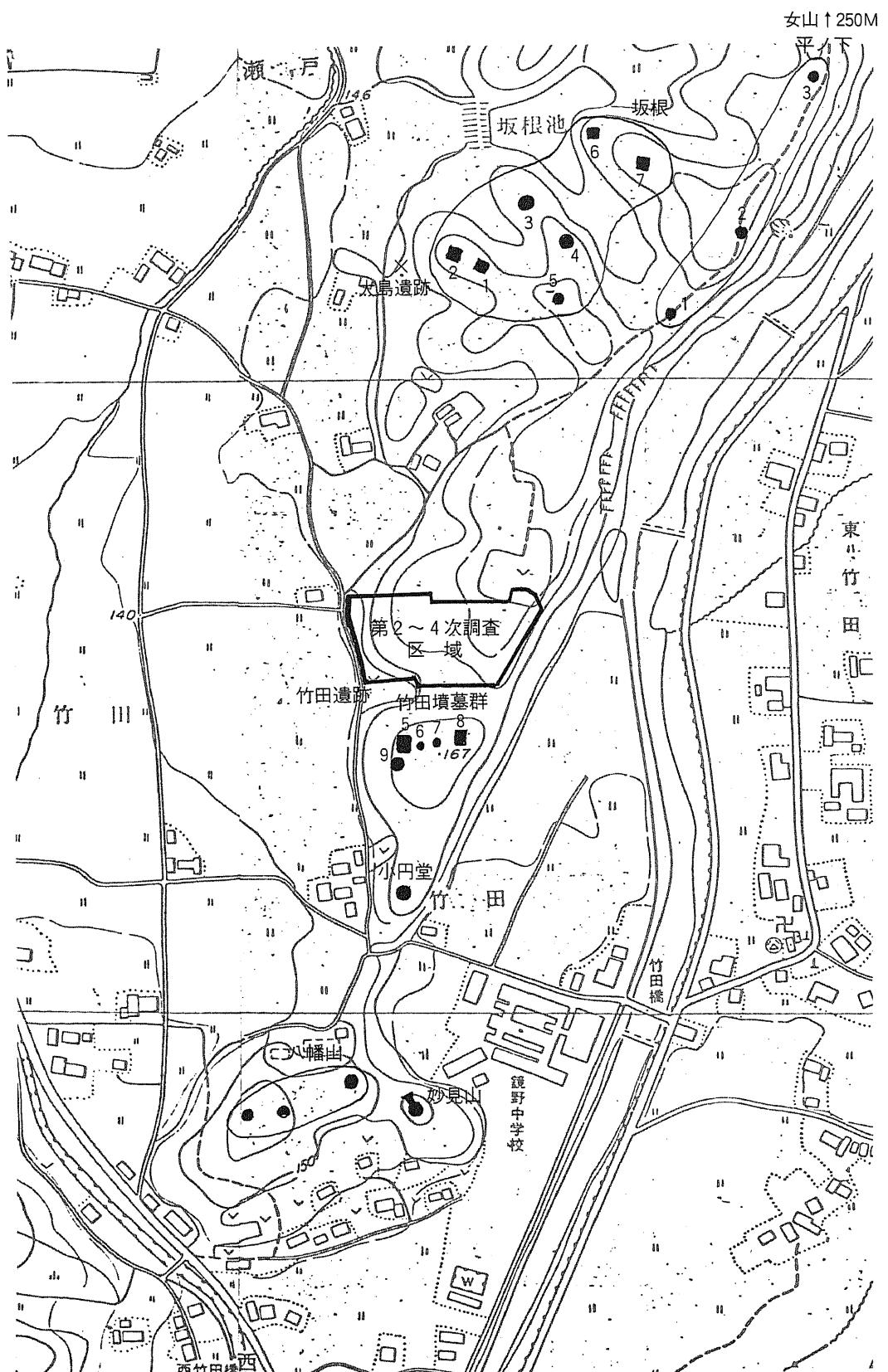


Fig. 6 竹田墳墓群付近の遺跡分布図 岡山県発行鏡野町森林基本図より (1/5000)

竹田 8 号墳丘墓 隅突出方形（本報告第 6 章）

竹田 9 号墳 円墳（△ 第 5 章）

竹田 9 号墳下住居址（△ 第 7 章）

竹田遺跡（第 2 次以降調査分） 縄文早期・弥生（第 2 集に報告）

平の下 1 号墳 竹田字平の下、竹田遺跡の北 100m の丘陵上に立地する円墳、東西径 8.5m 南北径 10.5m 高さ 0.5m。盗掘によって墳丘の損傷甚しい。

平の下 2 号墳 竹田字平の下、丘陵上の円墳で墳丘大きく損傷、東西径 9.0m 推定南北径 9.2m 高さ 1.0m。

平の下 3 号墳 竹田字女山、大きく破壊された円墳、東西径 10.2m 南北現径 7.5m 高さ 0.5m。

平の下支群はいずれも葺石・埴輪を持たない小円墳で横穴式石室はあり得ず盗掘孔の所見では石材が見られず木棺直葬の可能性が高い。

女山 1 号墳 竹田字女山、女山の北斜面にある大破した円墳、規模不明。元横穴式石室、一隅に石仏が立つ。

女山 2 号墳 竹田字女山、女山の北斜面中腹かなり高い位置にある大破円墳、推径 13~14m、高さ下方から 2.5m。横穴式石室は石材とりのため残骸のみ。

坂根 1 号墳 濑戸字坂根、女山から南に伸びる丘陵が坂根に突出した尾根上平坦部にある方墳で東西径 9m 南北径 9.8m 高さ 0.7m、未掘。

坂根 2 号墳 濑戸字坂根、1 号墳の西に突出した丘陵上の方墳。東西 8.8m 南北 8.5m 高さ 1.1m 蔷石なし。

坂根 3 号墳 坂根支脈尾根端頂部に立地する円墳で南北径 12m 東西径 12.5m 高さ 1.9m 蔷石あり。未掘。

坂根 4 号墳 3 号の位置から東南にのびる小尾根上の円墳。東西 9.5m 南北径 9.3m 高さ 0.9m 蔷石あり内部不明。

坂根 5 号墳 4 号の南東にある円墳で東西径 9m 南北径 10m 高さ 1m で葺石はない。

坂根 6 号墳 坂根池東に突出した尾根上の方墳で東西 11m、南北 10m、高さ 1m で葺石認められず。

坂根 7 号墳 坂根池東に突出した尾根先端頂部にある方墳で南北 20.5m 東西 21m 高さ 2m。未掘。坂根支群では突出した支脈の端頂部に立地する 3 号と 7 号墳は別の中支脈にありながら、連続する尾根上の他の諸古墳より規模が大きく、特に高さにおいて異質的で 3 号は葺石を持つなど、低平な 1 群と異った特徴をもつことが注目される。

大島遺跡 濑戸字居屋敷及び字大島 坂根池の南、山人川の東岸丘陵裾の遺跡で弥生式土器・須恵器・石鏃が出土。複合集落としてよい。

坂根支群への被葬者と大島集落遺跡に住んだ人々とは密接な関係又は、同一集団の集落と墓

という関係として捉えうる可能性が高い。

香々美川と山人川の合流点に挟まれた丘陵上の古墳は女山支群を除いて横穴式石室を持たず、時期的にもさかのぼる可能性あるものが多く含む特徴をもっている。

注

- (1) 『岡山県遺跡地図』第五分冊 岡山県教育委員会 1978年
- (2) 『竹田遺跡発掘調査報告』第2集に報告予定
- (3) 植月壮介「津山市山北一丁田遺跡」『津山弥生住居址群の研究』1957年
- (4) 近藤義郎「共同体と単位集団」『考古学研究』21号 1959年
- (5) 梅原末治「美作郷村観音山古墳」『日本古文化研究報告』9 1938年 今井堯・土居徹・河本清が実測を試みた際に、墳形・埋葬施設について確認した。
- (6) 近藤義郎「前方後円墳の成立」『前方後円墳の時代』1983年
- (7) 近藤義郎「赤峰古墳の発掘」『考古学研究』27号 1960年
- (8) 土居徹「美作鏡野町土居妙見山古墳」『古代吉備』6 1969年
- (9) 今井堯・村上幸雄「美作鏡野町土居天王山古墳」『鏡野町総合調査報告書』1958年

第3章 5号墳

1. 調査前の状況と調査の方法

発掘開始以前に、5号墳の墳形は大きく原状を損じており、北斜面はほぼ原状を保つものの斜面には3ヶ所の盗掘痕と近世の墓地があり、南斜面と東斜面南半は墳裾が削りとられ、東西の一部には後世の盛土がかぶさっていた。墳頂平坦部西半にも2ヶ所の盗掘孔があった。これらの状況にもかかわらず、北斜面などの状況から方墳の可能性が高いこと、墳頂平坦部1m以上あることから横穴式石室でなく豊穴系の埋葬法をもつ可能性の高いことが想定し得た。そこで①実測上の墳頂平坦部中央から各斜面の斜面部分に地山レベルまでのトレンチを4箇所設定し、墳端・周堀の確認をめざす。②墳丘斜面のうち遺存状況の良い北斜面において葺石面的露出を行う。③墳頂平坦部に中央において直交する東西・南北それぞれ幅1mの壁を実測検証用に残し、平坦部を4区に分けて平面掘りの方法で埋葬施設掘方の確認を行う。といふ調査方法をとった。後世の盛土のあった北斜面・西・南斜面で墳端を確認したが墳裾部が変形・陥没・東裾で変形が著しかったが原形をどうにかつかみ得た。墳頂西端部及び西斜面の盗掘跡深さ1mをこす大きいものではあるが埋葬施設には当っていないことが確認された。墳頂平坦部中央に2ヶ所、平坦部端から斜面にかかる墳頂平坦部東縁・同南縁の計4ヶ所に埋葬施設があり、いずれもほぼ平行した主軸であり、粘土で被覆された下部に石材による棺の存在が見出された。

そこで、南棺・東棺・中央北棺・中央南棺の順に、それぞれ、粘土被覆と掘方上面の露出・棺蓋石上面の露出・石棺内の排土と遺物の露出・遺物実測ととりあげ・石棺底石の露出と実測を行った。このうち中央北棺と中央南棺の前後関係確認のための両棺を結び地山に達するトレンチを設定した。発掘最後の作業として、墳丘に東西方向と南北方向に各1本ずつのトレンチを入れて、墳丘断面の実測をした。

石棺の移動直後に墳丘は削平され古墳は消滅した。なお、この削平時に既調査以外の埋葬施設は見出されなかった。

2. 古墳の立地・外形・外部施設

地図上 5号墳は北から南南西にのびる竹田丘陵主脈上の8号墳丘墓の地から西に分岐した支脈の最端頂部に立地する。即ち南は主脈と支脈に挟まれた狭い谷になり、西は9号墳に連なるぐれと下降する支脈になり、北は山人川流域の沖積地を望むということになる。その眺望は8号

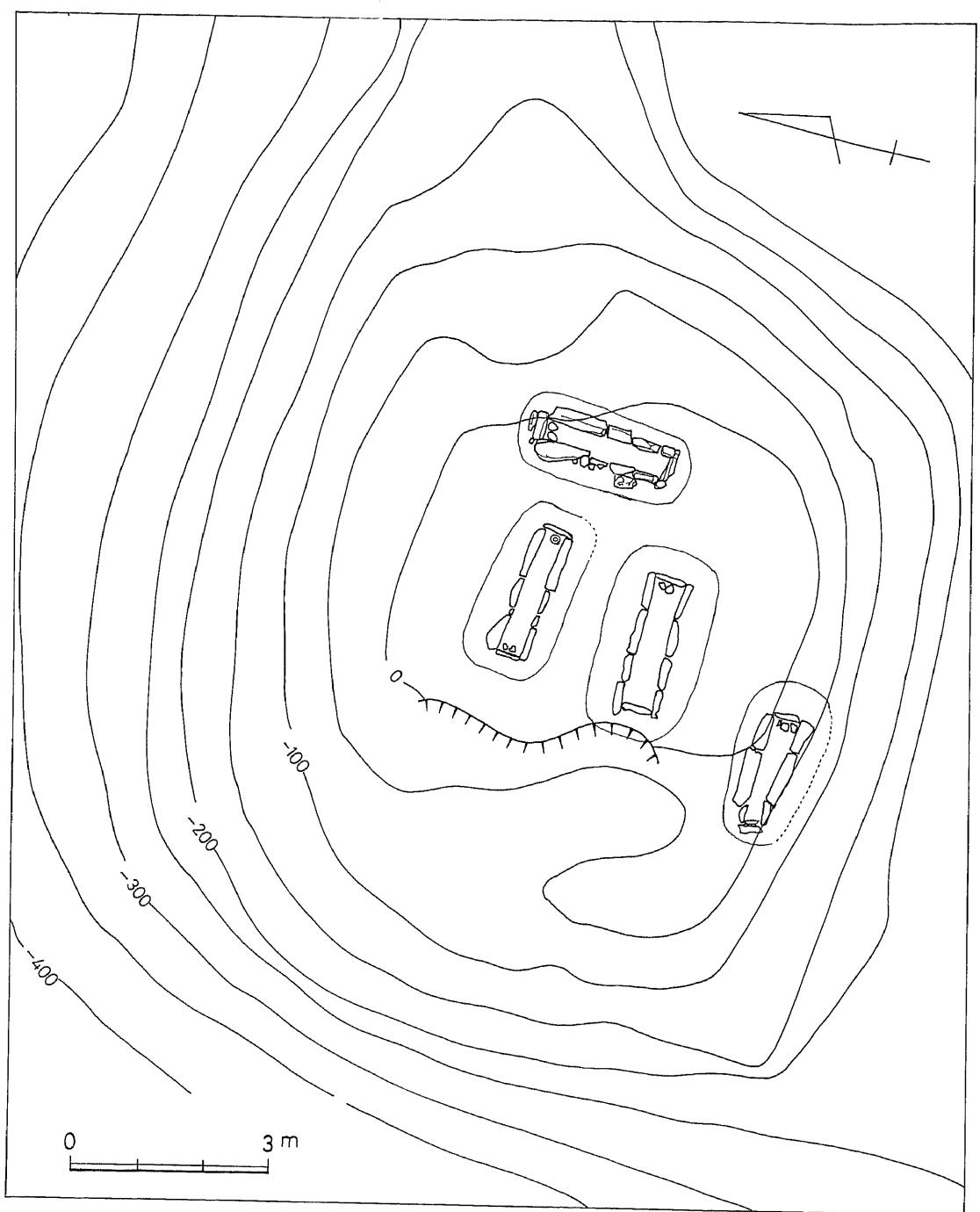


Fig. 7 5号墳平面 (1/100)

墳丘墓につぐひろさをもつが、主要な視界は山人川流域である。

この支脈地盤は新生代第3紀鮮新統の地層であり海拔約160m、水田高からの比高は約40mである。

外形 長方形を示す方墳である。確認された北・西・南の周堀上面内側からを墳丘とし東裾推定線を結ぶ墳丘規模は東西辺16.7m 南北辺14.7m であり、やゝ東西の長い長方形の墳丘である。これは東西にのびる丘陵尾根を利用したためと推定される。墳頂平坦部は東西・南北ともに5.5m であり、この1辺に北斜面葺石下段の線が平行することから方墳としてよい。

墳丘の高さは、北・西の周堀上面から2.0m であり、南周堀からは2.1m である。

周堀 周堀は北・西・南裾で確認した。後世の盛土が墳丘をおおっていたために原形を最も良好に残した東斜面では周堀上面の幅80cm、深さ35cmのV字形に近い断面であり、墳丘外側の地山が1部削平されている。南・西では幅40~50cm深さ15~20cmである。自然地形が急峻であった北部墳裾では、地山が一旦急激に下降し、その後地山は自然地形に沿って下降する状態で、削り出し整形を示している。

自然地形の急な北裾では段状加工によって、他の東・南・西裾にはもと幅80cm前後・深さ35cm前後の浅い周堀をめぐらせて、墳域を画したという状態であった。また周堀内には滯水状態を示すような土層は見出されなかった。

葺石 墳丘斜面の荒れた東斜面南半・南斜面・西斜面では葺石の痕跡を残すのみであったが北斜面及び東斜面北半で確認された。

この葺石は墳丘裾でなく墳丘中腹を鉢巻状にめぐるもので、直線的にほぼ同一レベルに葺かれていた。根石にはやゝ大きな河石（長さ40~50、幅30~40、厚さ10cm前後）を用い、下端は意識して同一レベルに揃えられ、墳端から60cm高い位置にあり、この根石上方に4~6個の小礫（長さ10cm前後）を葺いたものである。北斜面葺石下端は一直線をなし、平面的には西北隅に東斜面北半の葺石と直交する。このことから方墳と確定したのである。葺石の石材は、香々美川・山人川の河床で通有に見られる河石と、地山である第3紀鮮新統の地層に含まれる小礫である。

この古墳の葺石は墳丘斜面全体でなく鉢巻状に墳丘斜面をめぐるもので、この葺石の下端部は、墳丘築成前の旧地表面と同一レベルであり、墳丘盛土部分の下端部に鉢巻状に葺かれたものであるという特徴をもつ。葺石面及び墳丘斜面から若干の土師器片が出土したが、埴輪類は全く見出されず、本来埴輪類は樹立されなかつたと推定される。

出土土師器はすべて細片であるが、墳丘盛土でなく、葺石面および墳丘斜面上に見出される。土師器はいずれも磨耗しており、壺の口縁かと思われる二重口縁の小片を除いて、長さ1cmに満たない極細片であり、器形・整形の特徴をつかみ得ぬものである。これらは墳頂部に置かれたものが破碎落下した状況を示している。

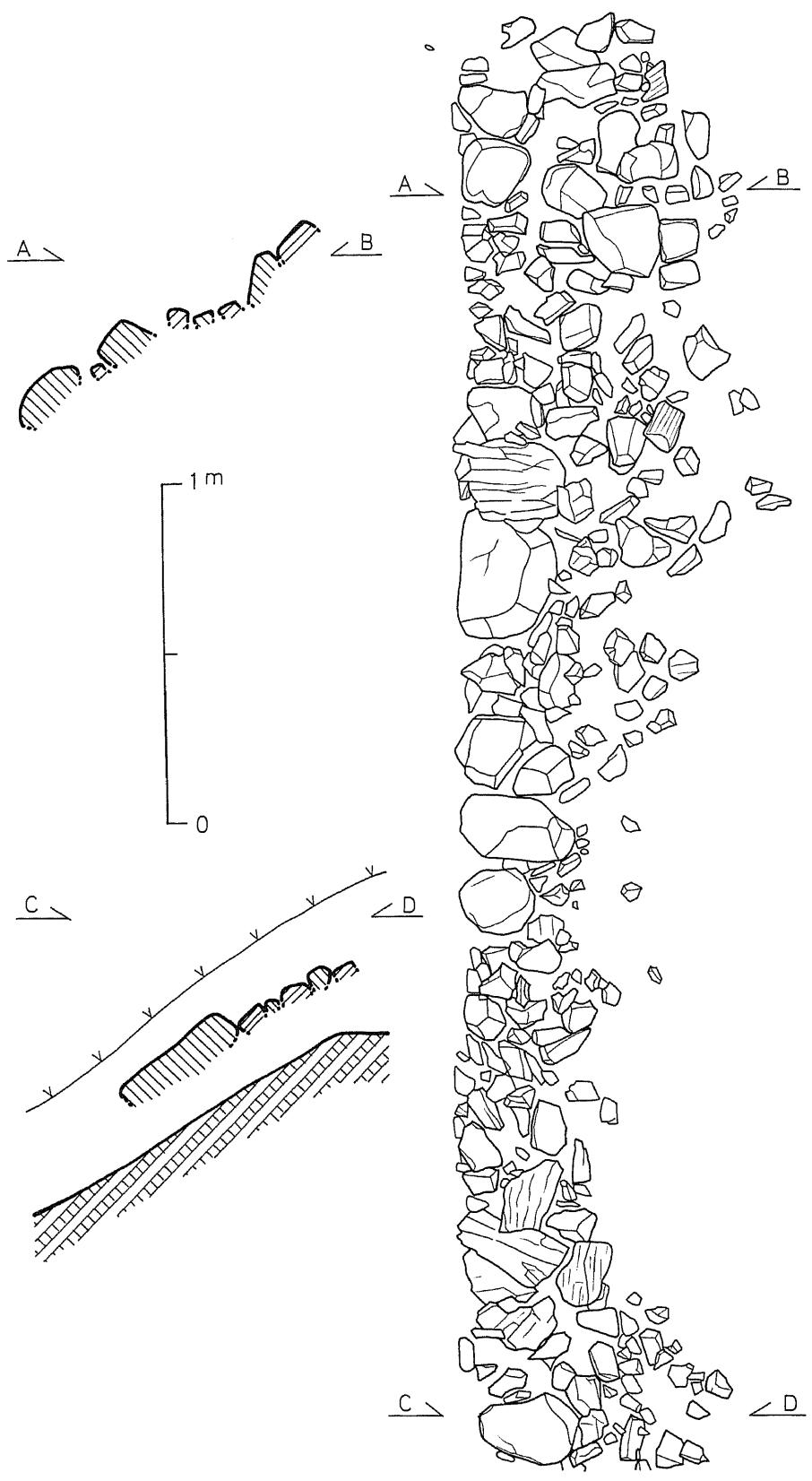


Fig. 8 5号墳北斜面葺石 (1/20)

3. 墳丘の築成

墳丘は地山隆起部を利用した部分と盛土部分からなっている。

墳丘基部は、自然丘陵尾根の隆起部分を利用し、その旧地表面を1辺10.6mに亘って、表土を除去し平坦にした面を上面とし、その外方2~3mの傾斜面を作り、その外側に周堀を掘つて墳域を区画したものである。以上の地山利用部分のうえに盛土が形成されている。

盛土は外方から中央に向って傾斜する土層がまず積まれる。墳丘西部および北部では3~4の分層が見られ、ここでは盛土は黒色有機質土を主体とするが、南部と東部では黄褐色地山土を主体とする。辺によって異った土を盛っているという特徴がある。

中央部はつき固めた地山土を盛り、薄い黒褐色有機質土もまたつき固められている。この第一次盛土をうがって大きい墓壙が墳丘中心部に掘られている。この墓壙は地山平坦面近くまで掘込まれ、墓壙掘方上面の長さ5.4m幅4.6mであり、墓壙底は長さ約4m幅3.2mである。この墓壙内には平行する中央北棺と中央南棺が置かれ、当初から2棺用の墓壙として作られたものであった。中央北棺と中央南棺を結ぶ断面観察では、棺底が20cm深い中央北棺が置かれ、その棺外方の埋土をうがって深い中央南棺が底を地山面に置いて作られたかの状態を示した。しかし、より確実なことは両棺の間の埋土は精選された地山土主体の暗褐色土を含む土層であり、棺体上面までの埋土は特に堅く、つき固められた土層であるということであり、両棺が墓壙掘方の主軸線に平行して南・北対称に置かれていたことである。面棺の蓋石上と棺材間及び外方への粘土のひろがりは、後にふれる南棺・東棺よりはるかに多量かつ良質のものであった。

両棺を含む墓壙の埋土は各種の混合土であった。この墓壙充填ののち、第一次墳丘が完成し

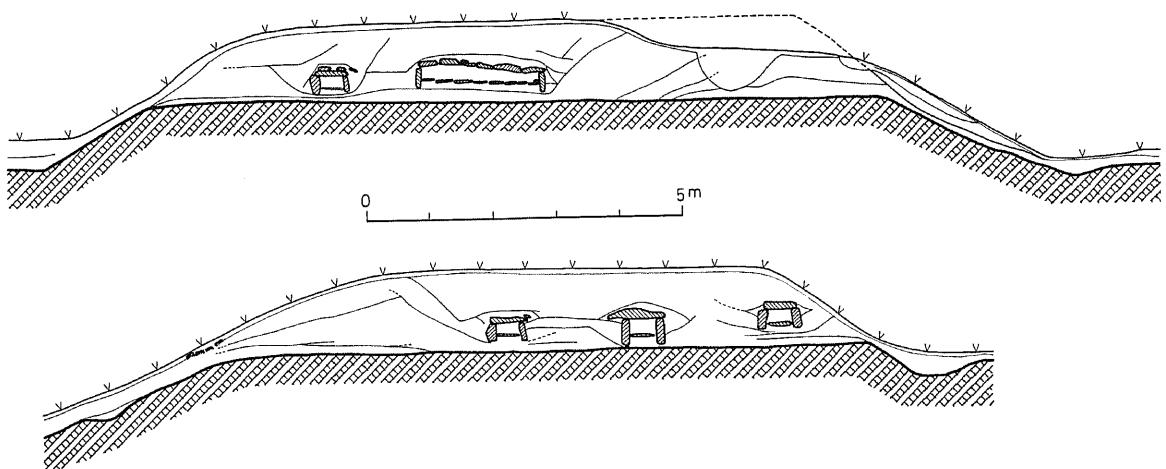


Fig. 9 5号墳墳丘断面 (1/160)

たといえる。南棺は、中央墓壙と重複せず、墳頂平坦部南縁から斜面にかかる部分幅90cm長さ2m強の墓壙の掘られた中央に置かれ、その底は地山平坦面より約35cm上である。この南棺墓壙は中央墓壙と直接の切合関係を持たないが、中央墓壙上面南縁中央部が確認できなかつたことは南棺墓壙によってその一部が切られたと考えられ、中央墓より後に掘られたことを示すといえよう。

東墓壙は明らかに中央墓壙の埋土層を切って掘られており、墳頂平坦部東縁の位置に左右不对称の長さ2.2m幅1.6m深さ60cmの規模である。中央墓壙充填土に掘られた墓壙であり、中央墓壙より新しいことは確かであるが、南墓壙との先後関係は相互の切合関係がなく、不明である。

東・南墓壙とともに中央墓壙より新しいということだけが確かである。

墓壙埋土の分層は一部を除いて確認できなかつたが、礫をほとんど含まない黄褐色土が主体であり、若干の粘土小塊が部分的に混り、そこから暗褐色の有機質土を含む層の区分が存在したことだけはたしかである。東・南墓壙の埋土のうち完成された墳丘盛土部分の高さは1.3~1.4mである。葺石は旧地山の平坦面と盛土部の境界レベルに下底をもつてふかれるが、第一次墳丘完成時に葺かれたか、全埋葬終了時かは層位的に明らかにし得ない。前者の可能性が高いといえる程度に過ぎない。

4. 埋葬施設と遺物出土状態

埋葬施設は4棺が見出され、すべて組合式箱形石棺である。これらは墳頂平坦部中央と墳頂平坦部縁に作られたもので、墳丘斜面・墳裾の埋葬は見出されなかつた。中央墓壙内に中央北棺と中央南棺が、南墓壙に南棺が、東墓壙に東棺があり、中央北・中央南・南の3棺はともに主軸をほぼ東西に置き平行しており、東棺は主軸を南北に置き3棺と直交する配置を示している。
中央北棺

中央北棺は墳丘中央の中央墓壙内北側に作られた組合式箱形石棺であり、主軸をほぼ東西(E 5° S)に置き、棺底石をもつ類である。棺の内法は、長さ193cm、東部端幅43cm、西部端幅40cm、側壁上面から棺底石上面までの深さ東端26cm、西端22cmである。棺の構築順に、棺の実態を記述する。

地山土をつき固めた黄褐色土層の上に、間口石が立てられ、東間口石底は地山平坦面から14cm上にある。東間口石は高さ39cm、西間口石は高さ32cm、厚さ9~10cmであるが、その上面をほぼ水平に保っている。長側壁は北・南とも平状石主体の各4枚からなつてゐる。東端・西端にやや大きめの石を用いており、中央の各2枚は比較的小さめの石材を用いたため土圧によって内傾している。側壁石下面から3~5cmの厚さに埋土し、その上に厚さ3~6cmの8枚の平石を

置いて棺の底石としている。この平石の接合部には小石をつめ、さらに粘土を充填して遺体面の平坦化を意識している。棺の蓋石は6枚の平状石からなり、接合部にはさらに小平状石で補強している。棺体と蓋石の接合部および蓋石接合部、さらに棺体全体を粘土で厚く被覆密封する。蓋石上面での厚さは10～15cmであり、この粘土のひろがりは、最もひろがる蓋石下面レベルでは、268cm×136cmであった。このうち良質粘土は棺材の各接合部と棺材外側3～5cmの範囲であった。

棺体（側壁）上面外側は、側壁上面レベルまではつき固められているが、この部分は三つの分層に分けることができる。この分層は暗褐色土や地山礫風化土の含有からの区分であるが、基本的な層区分ではない。主要棺材は流紋岩質凝灰岩であった。

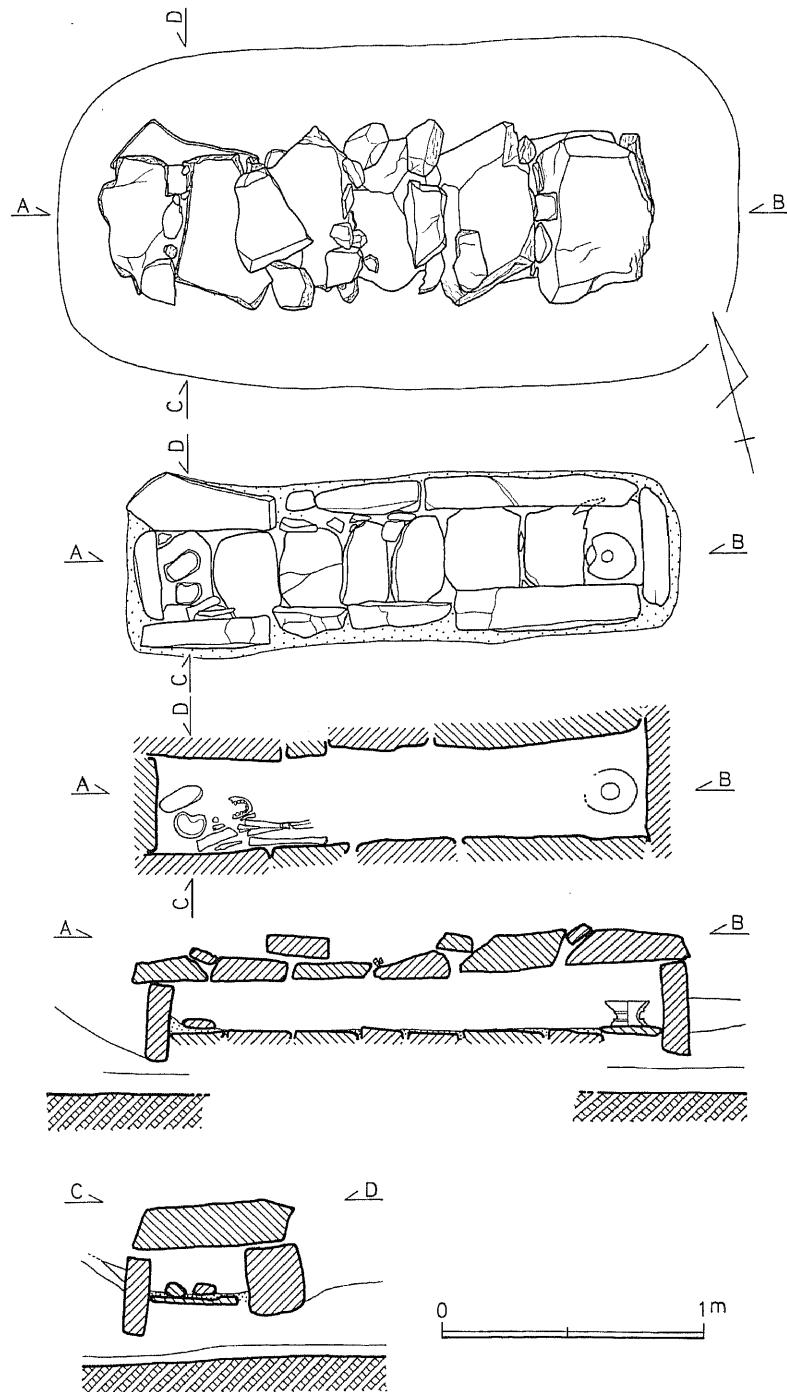


Fig. 10 5号墳中央北館 (1/30)

き固められているが、この部分は三つの分層に分けることができる。この分層は暗褐色土や地山礫風化土の含有からの区分であるが、基本的な層区分ではない。主要棺材は流紋岩質凝灰岩であった。

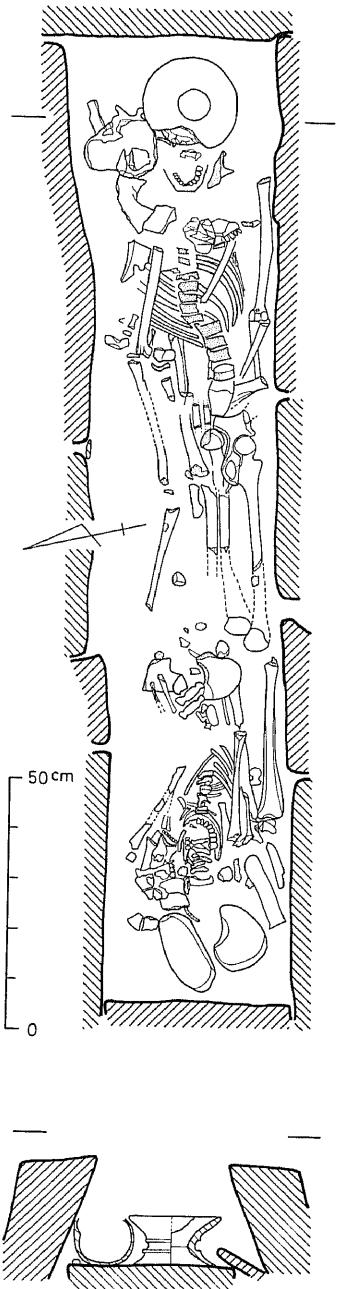


Fig. 11 5号墳中央北棺遺物
出土状態 (1/15)

cm、棺側壁上面から棺底石上面までの深さ30~34cmである。棺の東西間口石は平状石（厚さ8~11cm）を用い、その底は地上を1部掘込んで垂直にたてられている。東間口石は地山層を約10cm掘込んでたてられるが、西間口石は5cmの掘込みである。これは棺体上両を揃えたためと思われる。棺の長側壁は、北・南壁ともに4枚の板石をもって構成され、長側壁の両端は間口

棺内の遺物出土状態 棺内東端にその1部を意図的に打ち欠いたほぼ完形の鼓形器台がありその直下に下顎骨・横に頭骨があり、そこから頸骨・肩甲骨から踵骨まで1体分の人骨が棺北壁寄りに遺存していた。

棺西端に厚さ6cmの丸味をおびた平石2個があり、この枕石周辺に頭骨があり、そこから棺の南壁寄りに伸展葬人骨1体が足を東方に置いた状態で出土した。この西枕人骨の下肢骨の上に東枕人物の胸部（肋骨など）が置かれ、東枕人物の下肢骨のうえに西枕人物の胸部の骨が見出された。このことは両者をほぼ同時に、いずれも足下から置き、頭を西枕人物は両枕石間に、東枕人物は鼓形器台のうえに置いたことを示している。東枕人物・西枕人物ともに伸展状態の人骨がいずれも乱れていないこともこのことを傍証しているようである。

副葬品は棺内東端部と西端部の頭骨横から出土した。東枕人物の頭骨北側—棺北壁寄りに、刃先を西に向けて削り小刀1点が出土し、西枕人物の頭骨南側—棺南壁寄りに、刃先を東に向けて、鉄鎌・鉄刀子各1点が出土した。以上の鉄器3点のほかに副葬品は見出されなかった。

中央北棺は厚く粘土で被覆された比較的大形の石棺であり、頭位を逆にする2体が埋葬されており、両者は同時埋葬であること、鉄器3点の副葬、鼓形器台が枕に転用されていることが主要な特徴である。

中央南棺

墳丘中央の中央墓壙内南側に、主軸を東西（E2°N）において作られた組合式箱形石棺であって、棺底に平石からなる底石を置く類で、棺底レベルが最も深くつくられた棺である。

棺の内法は、長さ193cm、東端（頭位）幅44cm、西端幅40

石より外方に5～10cmのびている。この長側壁は地山上の精選され固められた黄褐色土層上に固定されている。この棺側石材は厚さ8～12cmで高さ40～45cmのものである。

棺の間口石及び長側壁を組み立てた後に、その底部に10cm前後の埋土を行い、その上に厚さ4～6cmの平坦な平状石6枚を敷いて棺底＝遺体面としている。棺体外側は、まず棺底石上面レベルに固められた混合土を置き、棺外面に粘土を置き、さらに棺側壁上面までを黄褐色粘質土を積む。遺体埋葬のうち四枚の板状平石を置き、接合部に小形の石で充填し、棺体と蓋石の間、接合部、さらに蓋石を含む棺体を良質の粘土で完全に被覆密封する。この粘土層は側壁上面より4cm下位を下底とし、棺外外表にまでひろがる。粘土の厚さは蓋石上面で10～16cmであり、粘土での完全密封が本格的に行われている点に特徴がある。この粘土層のひろがりは最も広い蓋石下面レベルで長さ290cm、幅130cmに達する。この密封部側方及び上面は、地山礫を含む混合土であり、部分的には分層が認められたが、全体としては層をなしていない。

棺内底部東端には丸味をおびた10×12×5cm前後の枕石2ヶが置かれていた。この部分から転落した頭骨片と歯牙残欠が出土した。棺内は完全密封にもかゝらず、接合部から侵入した木の根などのために人骨の遺存状況は極めて不良であった。

副葬品は全く存在しなかった。入念に作られた棺であり完全密封されていたものであるが精査にかゝらず、枕石周辺に淡い朱の痕跡を残すのみであった。

この棺の棺材は、間口石・長側壁・底石・蓋石とともにすべて流紋岩質凝灰岩であった。接合部の補充石のその大部分が同様であり、ごく一部に河石が認められたのみである。この流紋岩質凝灰岩は中央北棺のものと同じであり、吉井川南岸に露頭をもつ石材である。

中央南棺は棺体が大きく最も深くに棺底をもつ棺であり、粘土による密封も本格的なものであったが、東枕の人骨が1体埋葬され、副葬品が全くないという特徴と、主要棺材のすべてが流紋岩質凝灰岩であるという特色をもつ。

南棺

墳頂平坦部南縁の墓壙内に作られた底石をもつ組合式箱形石棺であり、4棺中最も浅くかつ小形に作られている。

棺は主軸をほぼ東西（N14°E）に置く。棺内法の規模は長さ163cm、東（頭）部幅40cm、西部幅21cm、側壁上面から底石までの深さ30cmである。墓壙底に深さ30～35cm厚さ16～20cmの板状割石の側壁をたて、側壁下底面に数cmの土を入れ、厚さ8～10cmの底石6枚を敷き棺底を作る。棺材長側壁と墓壙間の埋土は側壁上面近くまで黄褐色土層（地上礫混り）で固定のためかためられていた。北・南長側壁は各3枚・東間口石1枚・西間口石は重ねて2枚の各々扁平な板状割石で構成されている。棺底東端にやゝ丸味をもつ平石3個が置かれ枕石として使用されていた。この枕石の間及び転落位置から頭骨2体分が出土した。中央部から骨盤片・西半部から四肢骨2体分が伸展葬の形で出土した。

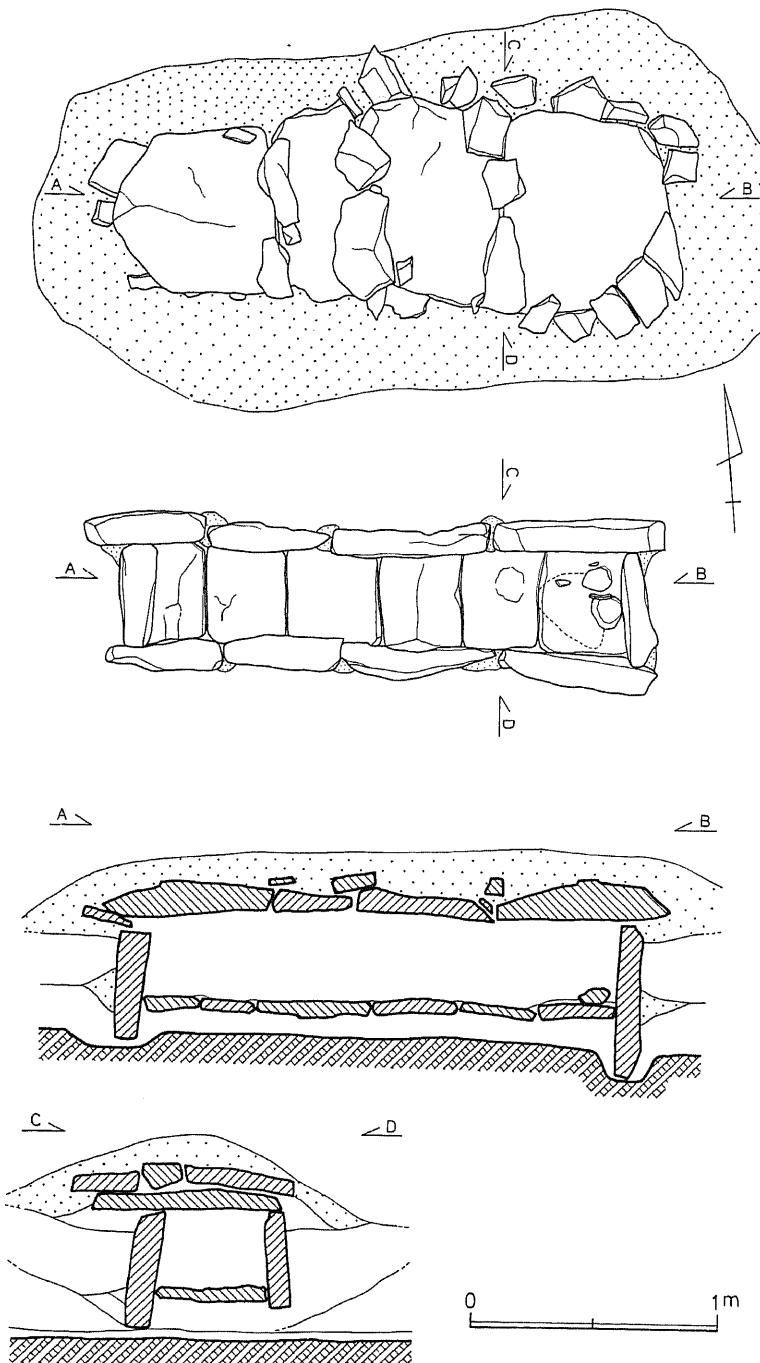


Fig. 12 5号墳中央南棺 (1/30)

竹田遺跡群の北2kmの男山・女山の噴出岩を利用したものと思われる。5号墳の4棺のうち、玄武岩を主要棺材とするのはこの棺だけである。浅い位置に最も簡略に作られた小棺であるが、東枕の2骨人体が埋葬された棺である。

粘土は全面をおさうものでなく、東(頭)部外方にかけて、棺材間の充填のほかに薄いひろがりを確認し得た。

この棺は土圧と木の根によって一部押し潰され、棺材が大きく内傾していたが、上述した原状の確認には影響を与えていない。

蓋石面東部外方の粘土面上で刀子1点が発見された。棺自体が浅く表土除去の段階で蓋石の一部が露出していたため蓋石上面の埋土状態は不明である。棺上面の埋土状態は土層稀薄のために確認できなかった。この棺の棺材はすべて玄武岩であり、本

東棺

墳頂平坦部東縁の東墓壙内に作られた礫敷きの組合式箱形石棺であり、主軸をほぼ南北（N 15°W）におき、他の3棺と主軸が直交する。

棺内法の規模は棺底面で、長さ185cm、北（頭位）幅38cm、西幅37cm、深さ30cmである。墓壙底に高さ30~32cmの内面平坦な河石厚さ22~28cmを立て、間口石・側壁下底面から3~5cm上に小円礫を敷き遺体面を作る。長側壁は東・西共に4枚の長めの河石で、南・北間口は各1枚の内面平滑な河石を用い、接合部に小河石を置き四周を作る。側壁下半と墓壙間は黄褐色粘性土で固めて固定する。

側壁上半部外方から側壁上面までには粘土を充填し、7板の河石による蓋石と接合部詰石の間及びこれら全面を、蓋石上部上まで厚さ8~15cmを完全に粘土で密封する。その形状はカマボコ型で、側壁上面・蓋石下面レベルで側方への最もひろいひろがりを示す。組合石棺を外から完全密封するという作り方である。

棺内北端に丸味のある河石2個を置いて枕石としている。2個の枕石の間に頭骨が原形をよく残して出土した。棺中央部は棺材接合部からの木の根とその腐敗痕から侵入したネズミの巣のために大きく損傷していたが棺西部中央には四肢骨などが

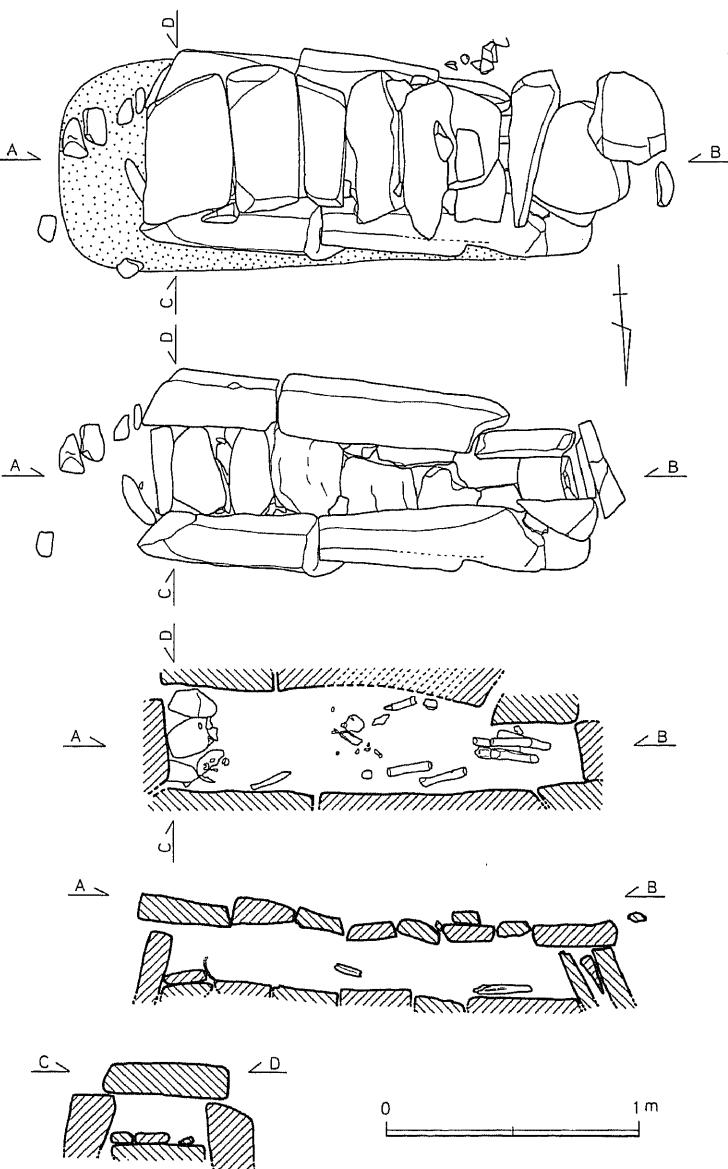


Fig. 13 5号墳南棺 (1/30)

比較的良好に原位置を保って出土した。北枕の人骨1体の埋葬であった。

棺内北端東壁に平行して、即ち頭骨左脇部から鉄鉗1が出土した。これが唯一の棺内副葬品であり、他には頭骨周辺に僅かに朱の痕跡が認められたのみである。

東棺の棺材は、側壁・間口・蓋石のすべてが河石であり、接合部詰石の中に小量の玄武岩を混えるのみである。河石は、香々美・山人川の河床に通有に見られるもので輝緑岩を主体としたものである。5号墳4棺の中で東棺のみが河石主体の棺材で、礫敷きであること、主軸を南北に向けることで特異性を持つが棺規模・棺の密封度において、中央北・中央南両棺につき、それに近い特徴をもつ。

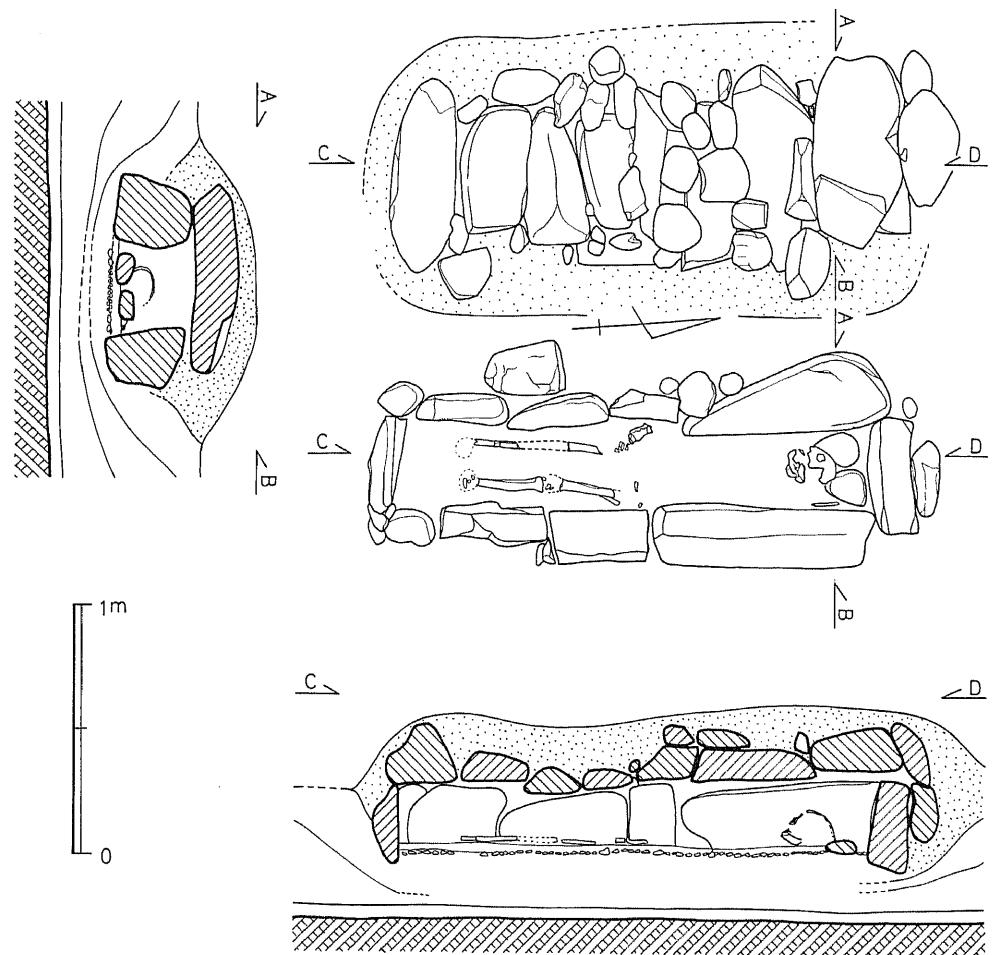


Fig. 14 5号墳東棺 (1/30)

5. 人骨と遺物

5号墳の各石棺出土遺物として、人骨と枕に使われた鼓形器台と副葬品の鉄器がある。

人骨 人骨は4棺から計6体分が出土した。中央北棺から東枕・西枕人骨各1、中央南棺から東枕人骨1、南棺から東枕人骨2、東棺から北枕人骨1がその内訳である。

これら人骨は、池田次郎教授によって別稿のように鑑定された。それを要約すると次のようになる。中央北棺には、壯年女性（東枕）と12~13才の小児（西枕）、中央南棺には、年令・性別共に不明であるが成人、南棺には、性別・年令ともに不明であるが2体の成人、東棺には熟年男性がそれぞれ埋葬されていた。

鼓形器台 (PL-8-1) 土師器であり鼓形を呈する器台の完形品を、焼成後に人為的に打ち欠いて枕に転用したものである。口径17.0cm、底径16.2cm、高さ9.5~9.8cmであり、中央くびれ筒部の幅が狭く7.6cmで、その上下には鋭角的に稜を作り出している。上下台ともに高環状に滑らかに外反した形態である。胎土には細砂粒を混入しているがちみつな粘土を使用しているくびれ部内面は指なせによる調整が施され、脚部内面は横方向のヘラ削りが施され、器台外面のすべておよび上部環内面はヘラ磨きが行われ、表面は滑らかである。焼成は良好であり、淡赤褐色の色調を呈する。器体外面と上面内部は丹塗りされている。そのうえに、埋葬時に付着した朱がみられる。

鉄鎌 (PL 8-2) 中央北棺出土のもので尖端部の1部などを欠失するが直刃式の鎌であり、長さ140mm、刃幅33mm、峰部厚3mmの品で、刃部中央の使用による磨耗が著しい。

鉄削小刀 (PL 8-2) 中央北棺出土のほぼ完形品で全長129mm、刃部長96mm、刃部幅19mm、峰部厚4mm、柄部長33mm同厚4mmで、柄部中央刃寄りに1mmの円孔1がある。

鉄刀子 中央北棺出土のもの (PL 8-2) は刃部の1部を欠くほぼ完形品で全長102mm、刃部長7.2mm、同幅14mm、柄部長30mm同厚2mmの小品である。木質などは遺存しない。南棺外出土のものは、刃部尖端部のみで他を欠失するが、現長34mm、刃部幅12mm、峰部厚5mmで、形態は中央北棺出土のものに似るが峰部の厚いことが特徴点である。

鉄鉈 東棺出土のもので、柄部端と刃先端部を欠く品であり、刃部現長20mm、復元長25mm、刃部最大幅10mm、V字形断面を示し、柄部現長56mmである。

以上の鉄鎌1・削り小刀1・鉄刀子2・鉄鉈1が副葬品のすべてである。

土器片 中央北棺掘方上面端部から土師器の極く細片が数片出土した。高環脚部、壺形土器口縁の小片のほかは器形を知ることも困難な小片であり、上部2片も極細片で器形の特徴を知ることはできなかった。須恵器片は1片も見出されなかった。

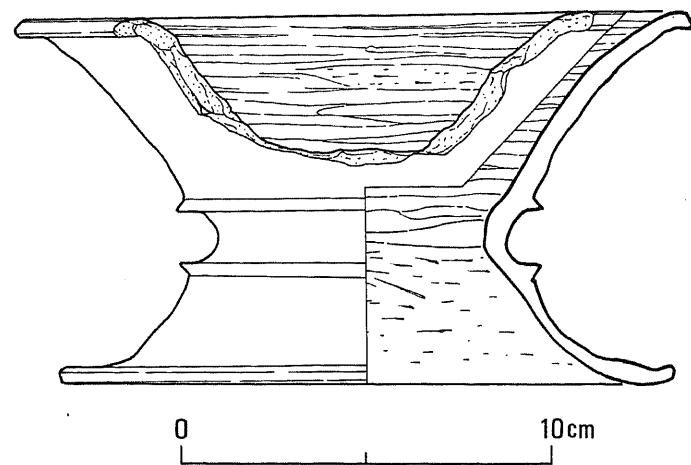


Fig. 15 5号墳中央北棺出土鼓形器台 (1/2)

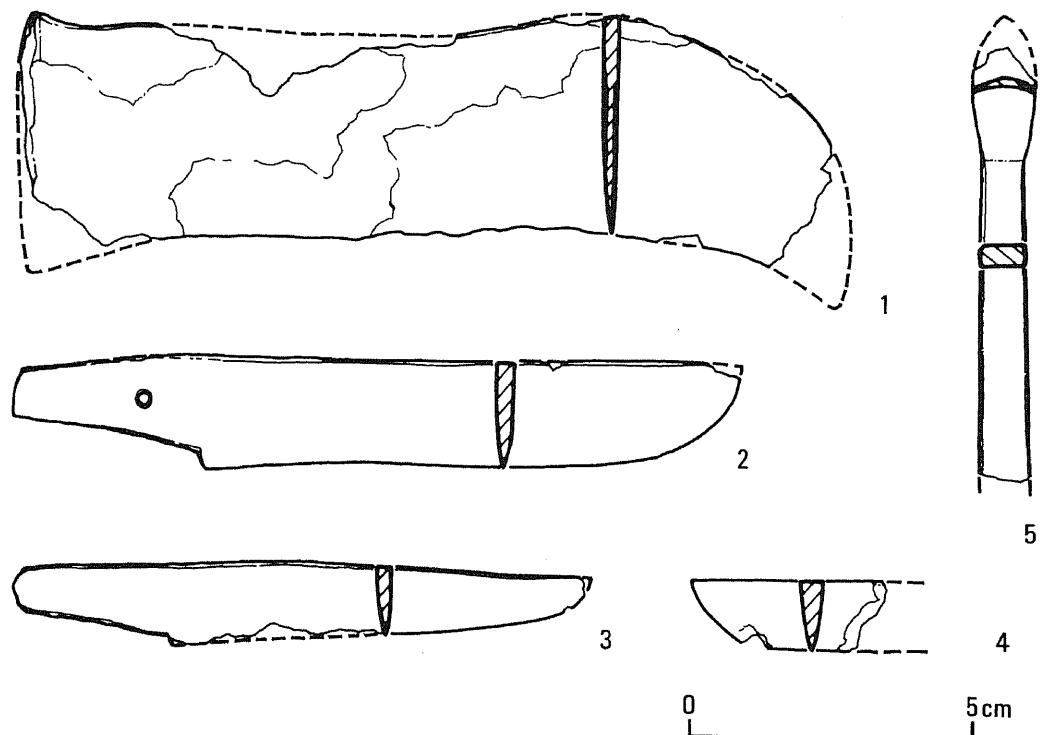


Fig. 16 5号墳出土鉄器 (3/4)

6. 5号墳の特徴と時期

5号墳の特徴

竹田5号墳は1辺約17mの方墳であり、地山と盛土面境界部に鉢巻状の葺石をもち、埴輪を持たない古墳である。埋葬施設が4あり、いずれも組合式箱形石棺であり、中央2棺は墳主軸に対称的に併置され、他の2棺は墳頂平坦部端に中央2棺とほぼ平行と直交で配置されていた。

中央2棺は他の2棺より規模が大きく、竹田丘陵周辺で見出されない流紋岩質凝灰岩を使用していたことも注目される。

副葬品は極めて貧弱であり、中央北棺に鎌・削り小刀・刀子各1、東棺に鉈1、南棺に刀子1のみであった。

被葬者は4棺計6体であり、人骨のよく遺存していた中央北棺では小児12~13才と成人女性の合葬が知られた。

棺の配置・規模・構造・副葬品の示すところは、他から卓越した被葬者の存在を否定しており、首長的埋葬の存在しないことを示す。1辺17mの小墳である竹田5号墳では、中央北棺の成人女性にや、優位が認められるものの他の被葬者から卓越した存在とはいがたい。棺内埋葬法の一般形態として枕石を使用するが中央北棺においては鼓形器台を打ち欠いて枕に転用した好例を示した。

こうした土器が枕に転用された例として、邑久町八木山の一方墳例と津山市兼田丸山古墳例⁽¹⁾が知られており、前者は前半期古墳とされ、後者は4世紀代の古墳とされている。こうした例は丹波を含む山陰でも類例が増加しているが、前半期小形古墳での埋葬に際しての一つの特徴的なあり方を示している。

5号墳の築造時期

この古墳築造時期の決定的資料は鼓形器台であるが、そのまえに他の要素についてふれる。

美作地方における方墳の検討から、それらが5世紀末を下らないことがすでに論証されているから⁽²⁾5世紀代後半に下らないことの確実な例として、津山市沼6号墳と津山市総社下道山南古墳を例示するにとどめよう。⁽³⁾古墳時代前半期に首長墳と併行して中・小の方墳もまた作られていたことだけはたしかである。このほとんどが葺石をもつことが一つの特徴である。

鉢巻状の葺石をもつ例は、美作において首長墳には知られていない。本古墳例に近いあり方を示すのは沼6号墳と下道山南古墳であり、後者は埴輪の特徴から5世紀前半とされている。こうした例は今後も増加するであろうし、小形墳での一つの特徴であってもこれのみで時期の限定にはなり得ない。

一古墳における多棺埋葬は、古墳時代前期での一般的傾向であり、美作地方の方墳例では⁽⁵⁾津山市門ノ山1号3棺、津山市総社上妙谷古墳3石室⁽⁶⁾沼6号墳2棺、津山市河面丸山古墳

⁽⁷⁾
3棺以上、津山市下道山南古墳2棺例があり、棺配置不明の河面丸山古墳を除くすべてが中央主体というべき卓越した埋葬施設を持たないという特徴をもち、いずれも前半期古墳のうちに含まれるが、前半期小墳の一般的な方を示す可能性はもつが時期細分の資料とはなり得ない。

箱形組合式石棺は弥生時代から古墳時代の全期間を通じて存するが、その上を粘土で厚く被覆した美作の例として、久米町三成4号墳、鏡野町伊勢領大塚⁽⁸⁾、沼6号墳南棺、下道山南古墳南棺例があるが、これらは4世紀末ないし5世紀中葉の間に各々位置づけられているが、前半期に存在した葬法とはいっても時期限定の資料とはなり得ない。

副葬品として鉄器が知られるのみであり、直刃鎌や鉈は前半期古墳にひらく見られるものであっても時期限定の資料ではない。以上のすべては、後半期古墳でなく前半期古墳のうちにあることを証明するにすぎない。

鼓形器台は、ほぼ完形品であり本古墳で最も早い埋葬の枕に転用されていることから、時期細分ないし限定の資料となりうる遺物である。

伴う他の器形の土器がないから鼓形器台自体の変遷の中で位置づけよう。鼓形器台の変遷を端的に示すのは口径・底径と器高の比較であり、時期と共に器高が縮小する傾向にあることが指摘され、さらに目安として筒（くびれ）部最小径と器高との比が等率の変化を示すとも指摘⁽¹⁰⁾され⁽¹¹⁾ている。

本例はくびれ部最小径を1とした場合に高さは1.26であるから、美作出土例のうち近いものと比較してみよう。津山市二宮遺跡1・7 pit⁽¹²⁾・久米町法事坊遺跡A群・落合町中山遺跡出土鼓

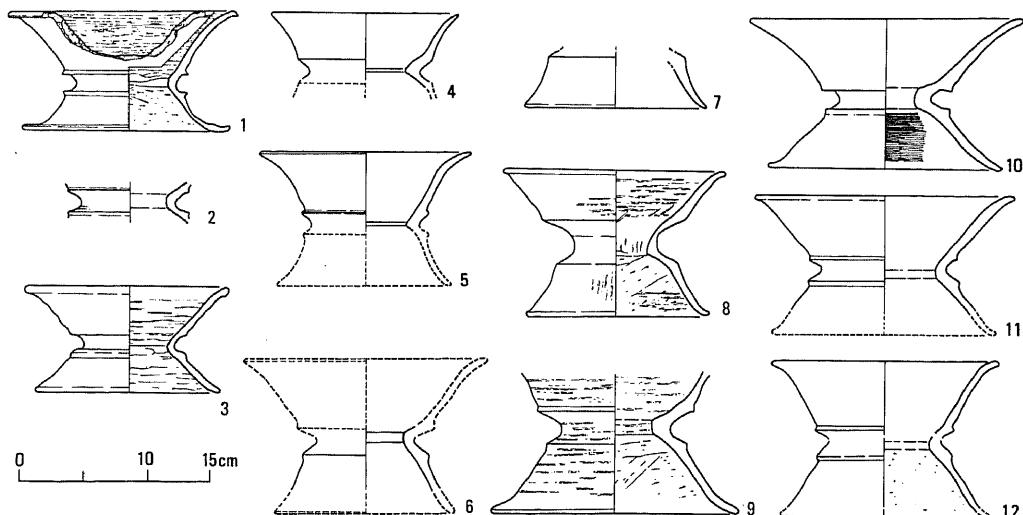


Fig. 17 岡山県内発見の鼓形器台

- 1. 鏡野町竹田5号墳
- 2. 総社市殿山9号墳
- 3. 新見市横見2号墓
- 4～7. 津山市田邑丸山9号墳
- 8, 9. 津山市太田十二社遺跡
- 10. 山陽町便木山遺跡
- 11. 山陽町用木3号墳
- 12. 同用木4号墳

形器台は、同比は1.4を示し、山陽町用木4号墳出土例もこれに近い。⁽¹¹⁾ 落合町宮前遺跡周溝墓出土例は同比1.0~1.1であり、⁽¹⁴⁾ 山陽町用木3号墳や新見市横見2号墳出土例もこれに近い。⁽¹⁵⁾ 筒部最狭径を1とした場合の器高比1.4のグループは岡山県南の才ノ町Ⅱ・下田所式（汎酒津式）に併行するとされ、器高比1.0~1.1のグループは亀川上層式に併行するとされている。本例は後者に近く宮ノ前例よりやや器高比が高く、筒部両縁の稜も明瞭である。このことは亀川上層式（布留式）併行期のうちに含まれ、その内で古相を呈するといえる。山陰地方の造山3号墳・小谷土壙墓出土のものに近いといえよう。鼓形土器の製作上の特徴もまた亀川上層式併行期のものの一般的特徴をもつから、本古墳の時期を亀川上層式・小谷式の段階のもので、その内の古式としてよいであろう。

5号墳の築造時期は、鼓形器台の特徴の示す亀川上層式の段階としてよく、本墳は4世紀代の前期小形古墳といえる。この段階の美作に方墳や鉢巻状葺石の手法が存在し、厳重に密封された組合式箱形石棺の埋葬法が存在したということができる。

注

- (1) 近藤義郎氏の教示による。
　　本村豪章「美作津山市兼田丸山古墳出土遺物の研究」『MUSEUM』285号 1974年
- (2) 土居徹・河本清「美作の方墳」『古代吉備』7号 1971年
- (3) 今井・渡辺・神原・河本「美作津山市沼6号墳調査報告」『古代吉備』6号 1969年
- (4) 栗野克己・岡本寛久「下道山遺跡・下道山南古墳」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』17 1977年
- (5) 近藤義郎・中島寿雄「門ノ山1号墳発掘調査報告」『佐良山古墳群の研究』1952年
- (6) 植月壮介・今井堯「津山市総社上妙谷古墳」『津山市文化財調査概報』1 1960年
- (7) 今井堯・渡辺健治・土居徹調査。現在一棺のみ。鏡出土の伝えがある。
- (8) 河本清・柳瀬昭彦「久米三成4号墳」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』30 1979年
- (9) 今井堯・近藤義郎・村上幸雄「美作国鏡野町伊勢領大塚小塚について」『鏡野町綜合調査報告書』1958年
- (10) 置田正昭『鳥取県倉吉市服部遺跡発掘調査報告』1974年
- (11) 藤田憲治「山陰鍵尾式の再検討と併行関係」『考古学雑誌』64~4 1979年
- (12) 高畠知功・二宮治夫・葛原克入「二宮遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』28 1978年
- (13) 神原英朗「用木古墳群第4号墳」『用木古墳群』1976年
- (14) 橋本惣司・二宮治夫・浅倉秀昭・高畠知功「宮前遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』12 1976年
- (15) 神原英朗「用木古墳群第3号墳」『用木古墳群』1976年
- (16) 本節で使用した山陽地方の土器形式名は、柳瀬昭彦「川入上東遺跡の弥生式土器及び古式土師器について」一川入・上東『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』16 1977年による。

第4章 6・7号墳

1. 6号墳

位置と調査前の状況 6号墳は南北に伸びる大野丘陵の主脈中の隆起部（8号墓がある）から

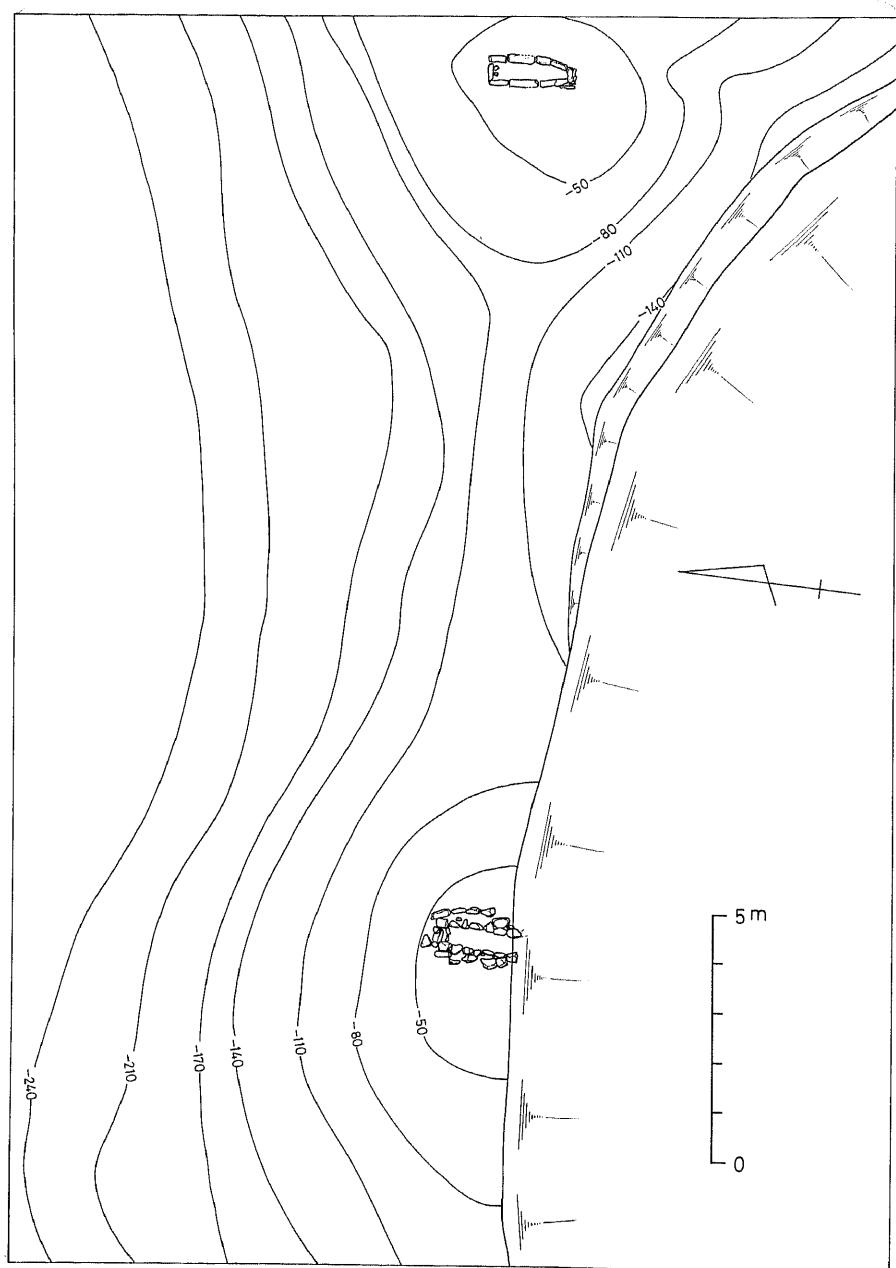


Fig. 18 6・7号墳平面 (1/150)

西方に派生する支脈尾根上の鞍部に立地する。この支脈端隆起部に5号墳が立地するから、5号墳と6号墳の墳丘裾は5mをへだてることになる。

この古墳は、墳丘の南側約4割がかつての耕作によって削平され、その中央に組合式箱形石棺が南端を失った状態で露出しており、調査前からその存在が知られていたものである。遺物の出土については注意されていない。

外形 連続する尾根及び自然地形の残る墳丘北側において、地山をわずかに掘込んだU字形に近い周堀を検出した。この上縁での堀の幅は80cm内で深さ30~40cmのものであった。周堀というよりも墳丘域を区画した程度のものであった。この周堀内が墳丘で、墳形は円墳であり、東西径8.8m。南北径は南半を失っているために不明であるが、残存部からの推定約9mである。墳丘の高さは、墳裾のレベル差があつて一定しないが北方（最大値）からの高さ1.5m。東・西からの高さ1.0mである。埋葬施設の位置（中央）では地山面から墳頂推定面までの高さ94cmである。

外部施設 精査にもかくわらず葺石・埴輪の類は全く見出されず、本来外部施設で墳丘を飾ることは行われなかつたといえる。また土師器細片すら見出せなかつた。

墳丘の構造 第三紀層である地山（通称とっこう）を深さ20cm、掘方幅1.2m、底幅64cmを掘りくぼめ、底に小礫を敷き、組合箱形石棺材をたて、墓壙内に円礫と埋土をつけ、その上方をや、精選された地山土で被覆し、その上に地山土と表土との混合土を盛つたものである。その中にわずかに東側で分層が認められるほかは、層区分が不可能である。即ち埋葬施設を被覆したあと、一気に盛土して墳丘を形成したという状態を示している。

古式の首長墳ないし、や、大形の古墳に見られる整然と墳丘を盛土し、その後で墓壙を掘るという方法とは全く異った簡略な方法が墳丘の築成法である。

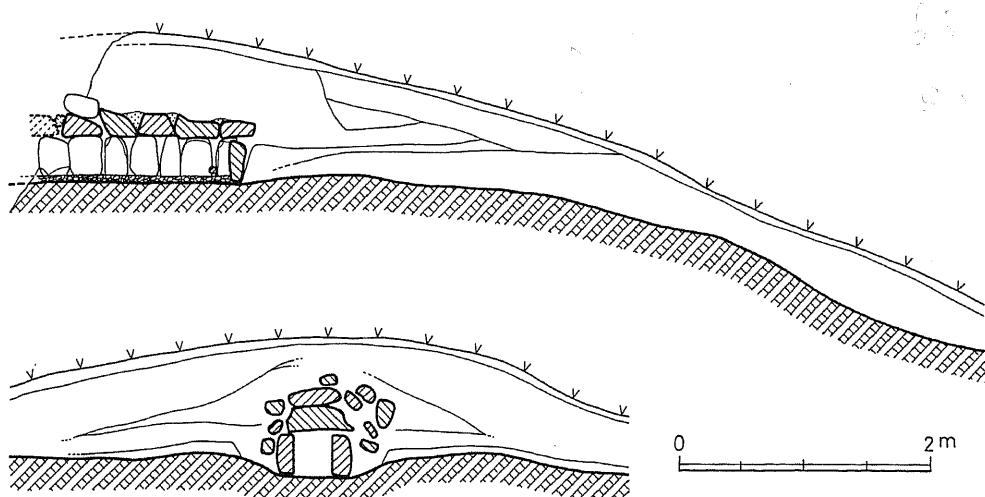


Fig. 19 6号墳墳丘断面 (1/60)

埋葬施設 埋葬施設は墳丘中央に組合式箱形石棺1が見出されたのみで、他には見出せなかつた。1墳1棺の例である。

地山を掘りくぼめ厚さ15~25cm、長さ32~33cmの扁平な河石をたて、両長側壁内に小礫を厚さ5~8cm敷き、その上面を遺体安置の場とする。長側壁は現存部で東壁・西壁とも7枚を使用しており、北短壁は1枚である。この棺体を被覆する蓋石は現存部で5枚であった。蓋石の下面是平坦面であるがその上面は不揃いであり蓋石の厚さは15~25cmである。蓋石間は粘土で

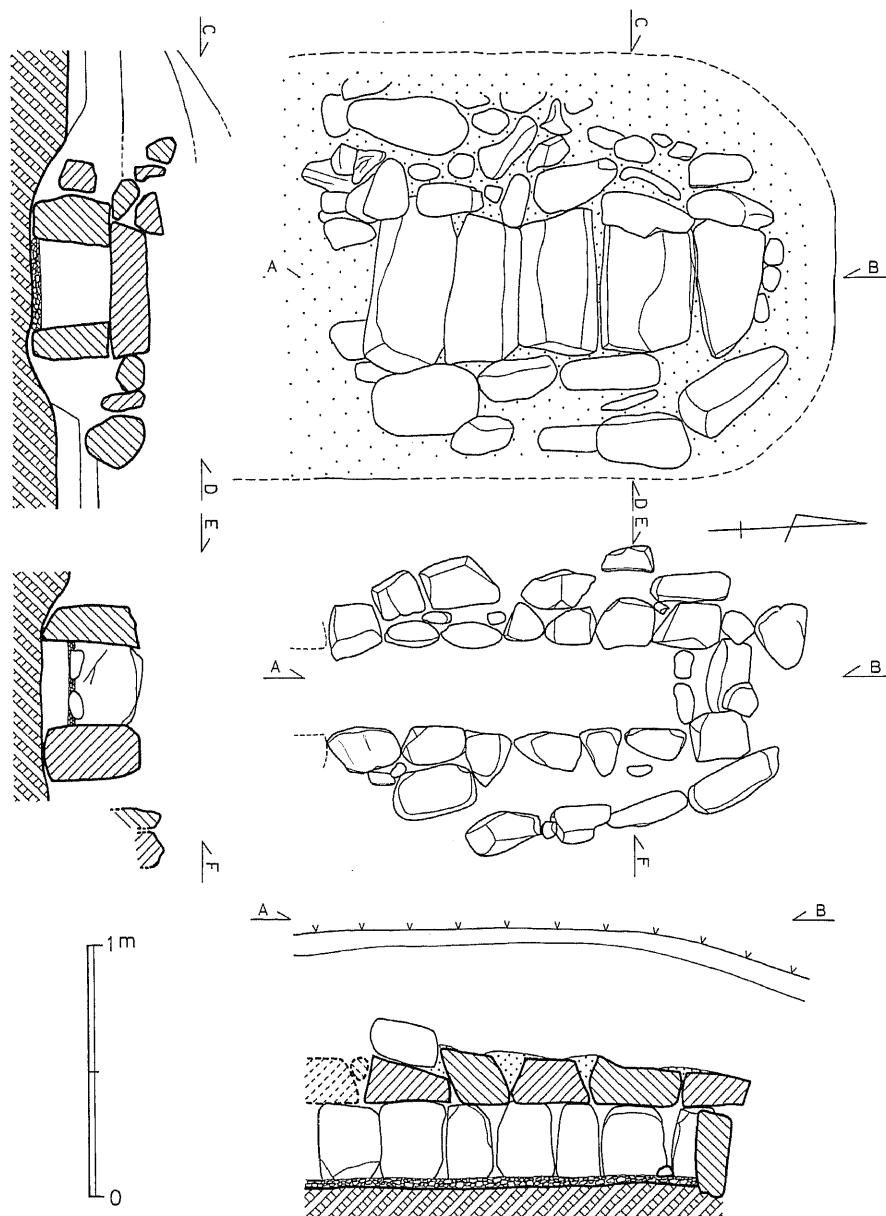


Fig. 20 6号墳主体部 (1/30)

はなく、や、精選された粘質の地山土でお、い、その外側（墓壙掘方端位）に補助石を置いている。石棺内法現長1.5m 北幅40cm 南現存端部幅35cm 深さ30cmであり、石棺内法推定長は1.7~1.8mである。

棺内側には僅かに朱の痕跡が認められた。棺床北端に丸い河石2個を置いており、枕石として頭部固定の役割りを果したものといえる。組合式箱形石棺とはいえ、通常長側壁を2~3枚の平石で構成する手法とは異っている。竹田5号墳東棺に共通した棺構造の手法である。

棺材のうち側壁の大部分は丸味をもつ河石であり、香々美川河床などで通有に見られるものである。蓋石石材は、男山・女山周辺で見られる玄武岩を主体とし、一部に河石を用いる。

遺物 埋葬施設内からは、遺物を全く検出しなかった。石棺上埋土より上面から須恵器壺小片が1片出土したのみである。古墳築成時にかかる遺物と認定することは困難な出土状態であり表土に混入したもののが強い。

特徴と時期 小墳であり、墳丘築成も極めて簡略であり、石棺も通常の組合式箱形石棺とは異なることが特徴である。棺数は1、埋葬数は南端を失っていたため不明であるが1体の可能性が強く北枕である。古墳の築造時期を示す積極的な根拠は全くなく時期は不明とせねばならない。しかし棺構造が5号墳東棺に近く、また朱の痕跡があり須恵器を全く副葬しないことは、それに先行する可能性が強いことを示すのみである。

2. 7号墳

位置と調査前の状況 7号墳は、立木の伐採後に始めて確認したもので、低平且つ不整形であり、墳丘東部は、林道のために東斜面が陥没しており、西部は6号墳との間に中世の盛土が行われ小土壘として6号墳と連続されていた。西南隅は開墾畑のために裾部を欠失していた。

7号墳は主脈から西に分岐し6・5号墳につづく支脈基部に立地し、6号墳と約10m離れて立地している。

外形と外部施設 円墳であり、東西径7m、南北径7.9m、高さ東から0.7m、西から0.8mである。周堀はなく、その代りに地山を削ることによって段をつけており（図参照）、地表と共に傾斜する地山を約30cm斜めに深く削ったもので、これは墳域を画したものとすることができ、このことから墳丘の規模を算定したのである。

葺石および埴輪は6本のトレンチ及び2つのグリッド調査にもか、わらず全く見出されず、本来存在しなかったといえる。

墳丘の築成 約4mにわたる地山と地表を生かして、その周辺を削り、中央部に僅かに盛土が見られるに過ぎず、旧地表と旧地上を掘込んで作られた石棺をお、うという程度のもので分層も認められず、一気に盛土したものであろう。墳丘盛土は、とっこうを若干含んでいるが、腐

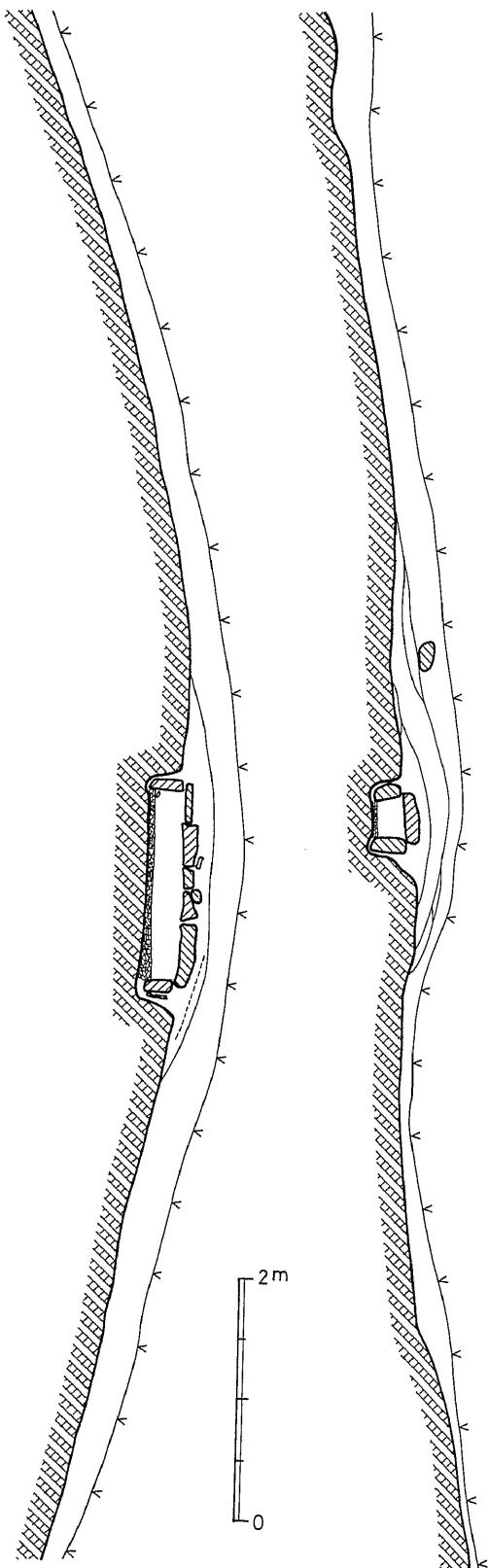


Fig. 21 7号墳墳丘断面 (1/60)

植土を含まない黄褐色土層の上に薄い腐植土を盛って墳丘を完成させたものである。

埋葬施設 旧地表と旧地山を長さ 2m、巾 60cm の範囲を急角度に掘込んで墓壙とその中央に棺を作っている。その深さは約 50 cm である。埋葬施設は古墳中央の石棺 1 つのみである。石棺は組合式箱形の棺であり、棺内法は長さ（棺床面）151cm、東幅（頭位）35cm、西幅 21cm、蓋石下面から棺床面までの深さ 25cm で、主軸ほぼ東西、僅かに北寄りにおく。

長側壁は、北・南壁ともに 3 枚で構成され、各短壁は一枚である。石棺構築は、まず掘方に側壁石材をおき、側壁外方を埋め、両側壁内に小礫を厚さ 5 ~ 6 cm 敷きその上面を遺体面とし角礫 2 個を東端に置き、頭部を置く台とする。蓋石 5 枚を置き、そのすき間に小角礫を置いている。この棺の石材はすべて玄武岩である。棺構造・棺材とともに 5 号墳南棺に似ている。

各棺材接合部と蓋石上の小角礫充填部に粘土をつめている。

遺物 人骨は全く遺存していなかったが枕石の存在から東枕伸展葬の 1 体の埋葬と推定しうる。棺内法の規模からして成人に達しない若年の性別不明の人物を想定するともできる。石棺内および石棺周辺から遺物は全く見出されなかつた。封土から土師器の極細片 2 が検出されたのみであった。

特徴と時期 7 号墳は 6 号墳よりさらに小さく作られ、地山を削って墳域を作る程度で、石棺も小形であり、何一つ副葬されることのなかつたという特徴をもち若年の 1

体埋葬と想定しうる。従つて古墳の時期を示す積極的根拠は何一つない。ただ棺構造と石材が5号墳南棺に酷似することからそれに近い時期を考えることも、可能性としてはあり得るといふにすぎない。

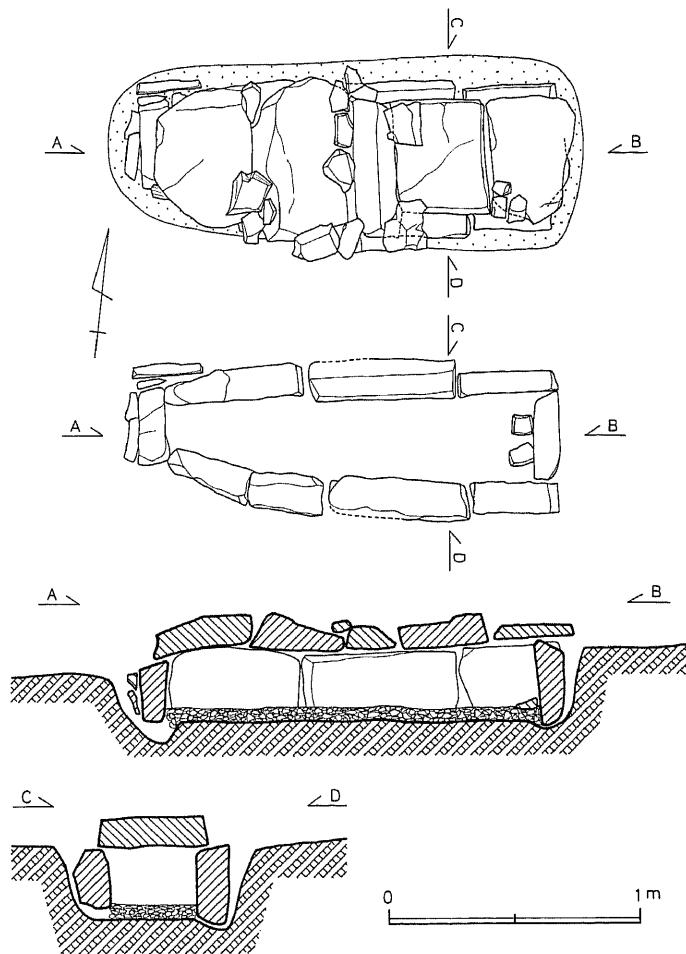


Fig. 22 7号墳主体部 (1/30)

第5章 9号墳

1. 調査前の状況と調査経過の大要

中世の砦がこの地付近に築かれていたために墳丘の大部分は削平されており、その頂部は平坦地となっており、北および北東裾は埋没して古墳と認定することは容易ではなかった。僅かに原形を残す南裾部において葺石の痕跡が認められ、それに続く西南面が弧状をなしており、外面観察から円墳であったことが推定された。

墳東面のほとんどは、中世から近代までの削平によって原状を留めていないことが知られた。

従って、外形実測に続く調査は、南～西面での葺石の検出と、推定古墳中心部から原形遺存部裾に向う6本のトレンチ調査による墳域の確定から始めた。葺石は列石状に1～2個ずつで墳域を画すものであることが認定された。

墳丘推定中心部と5号墳を結ぶ北トレンチにおいてかろうじて周堀の痕跡を見出し、そこから南（墳中央部）にむかって地山を追跡中に、地山が急に落ち込みその中に炭化物を含むことから、その部分の全容を知ることにつとめた。地山の掘込み幅は約4mであり、土器片と炭化物を含むことから竪穴住居址の存在を予測するに至った。幅50cmのこのトレンチ内での面的観察から、竪穴住居址の中心が、東にあると推定し、平行して東側に一本のトレンチを設定し、そこから面的に住居址掘方上面の確認を試みたのである。一方、中央トレンチのニヶ所において粘土塊が確認されたため、その追及のため、粘土上面レベルでの面的拡大発掘区を設定し、西方に調査区を平面的に拡大した。その結果、トレンチに現われた2ヶ所の粘土塊は、二つの粘土櫛の各々東端に近い部分であることを知り得た。この平行する二つの粘土櫛の上面は発掘前の地表面から僅か20cm足らずであり、かろうじて削平からまぬかれたものであった。従って両埋葬施設の掘方上面は全く失われていたために掘方およびその周辺の充分な調査は不可能であった。そこで、二つの粘土櫛の平面掘りを行い、北主体（小）内の全掘・実測ののち、南（中央）主体内の全掘・実測・遺物とりあげを行った。両埋葬施設とともに、竪穴住居址廃棄後埋土中に作られていたために、これを破壊する形で下方に掘りさげ、その下部の竪穴住居址の平面発掘を行った。床面実測・遺物とりあげの際に、炭化木材も採取した。この住居址に關係する他の竪穴住居址および遺構は見出せなかった。このうち5号墳方向へ面した部分は、地山表面も削平されており、それに直接表土がかぶさる状態であった。9号墳および埋葬施設直下の竪穴住居址調査の排土中から、縄文早期楕円押型文土器が遊離片として採集された。この土器については竹田遺跡調査報告第2集に記述する。

墳丘調査により、9号墳の東～北～北西部では、本来の墳丘裾部まで、後世の変形が及んで

おり、原状をとどめていないことを確認した。墳丘頂と墳丘の大部分は調査前に失われており調査の対象外である。

2. 位置と外形・外部施設

位置 5号墳の位置から南々西にのびる支脈尾根上にあり、ぐっと下降する境に位置し西は急な斜面となっている。5号墳の南裾と本墳の北裾間の距離は10m弱である。

外形 円墳ないし五角形を呈することが葺石下端面からいえる。東西径13.7m、南北径14.8mで高さは墳丘上部を欠くために不明であるが、南裾からの現高2.5m、北裾からの現高55cmであり、南と北の墳裾差は1.95mである。

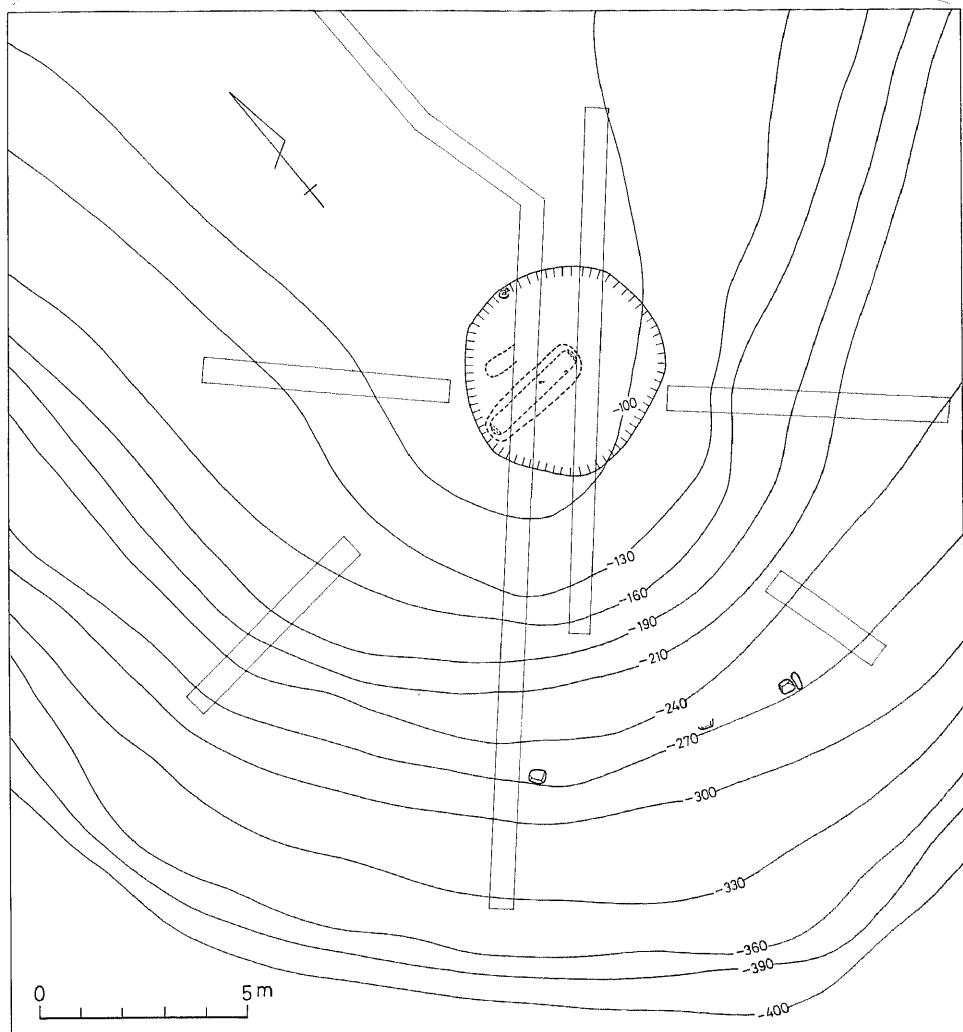


Fig. 23 9号墳平面 (1/180)

外部施設 莖石は認められるが埴輪はない。葺石は、墳裾が原状を残す南及南西に認められ、墳裾部に児頭大の河石が、稍小形の石の間に一石また一石というふうに置かれている。石材は輝緑岩を主体に河原に通常見られるものである。墳裾部の石は平面的に見れば、弧状を示さず、一辺3～4mの五角形に近い形で置かれている。従ってベース型列石と呼ぶのがより適切なようあり方である。蓋し方形または長方形とは程遠いものである。

南側では葺石面直下で地山が切込まれ、そこでや、平坦になり再び自然面に移行する。下降する南側では周掘りでなく、地山を切込むことで墳域を自然面と区別しているといえる。このことは急斜面となる西側でも同様である。北裾では、周堀の上縁が失われており、現堀幅80cmで深さ20cmを残すのみで元来の規模は不明である。但し、幅2mに達しないことだけはたしかである。墳裾東側はすでに失われており確認できないが西側に近い状況であることが推定できる。

墳丘は大半を失っており、墳丘築成については不明であるが、現存部のほとんどは地山であり、地山加工を主体として墳丘下部を作ったものといえよう。墳丘盛土部は失われており、その状況は一切不明である。

列石状葺石を墳裾にのみ持ち埴輪を樹立しない不正円形墳ということができる。鉢巻状葺石の一一種といえるあり方を示している。

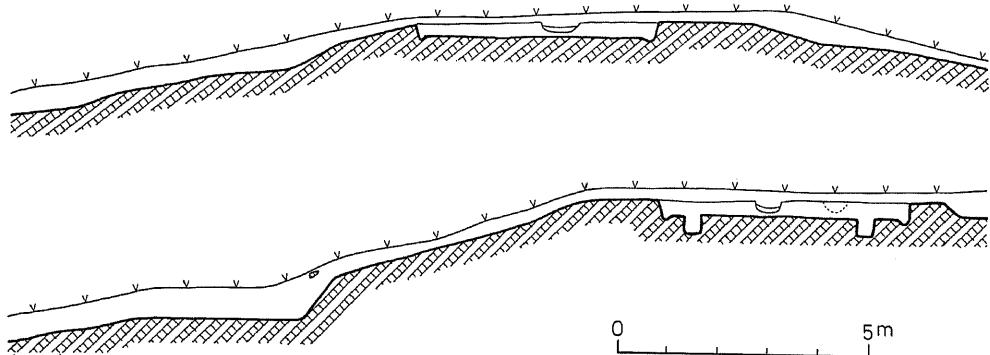


Fig. 24 9号墳墳丘断面 (1/150)

3. 埋葬施設と遺物出土状態

埋葬施設として、粘土槨構造のもの2つが検出された。地山面下の豊穴住居址の堆積土中に設けられた2つの粘土槨は、ともに主軸を東西に置き平行するものであった。両槨の間は85cmであるが、両槨の掘方は明らかでなく、墓擴についてはすでにふれたように確認不可能であつた。南側の槨が墳域ほぼ中央に位置し大形であることから、これを中央槨と呼び、北側の小形の槨を北槨と呼ぶこととする。

中央槨 割竹形木棺を粘土で被覆した粘土槨である。

粘土槨外面上縁の長さ 309cm、外面底部長332cm、東（頭位）部最大幅139cm、西端部幅77cmであり、粘土槨内法長268cm、東端部幅46cm、西端部幅38cmである。

豊穴住居址の床面である地山上の堆積土（幅3～5cm）をや、固めて、その上に粘土床を置き厚さ4～7cmの粘土床の上に木棺を置いたと推定される。この粘土床の東西端部近くに立石を置き、これに粘土を被覆させ棺座を設定したことが確かめられた。東部石材は長さ40cm高さ19cm厚さ5～6cmであり、西のそれは長さ29cm高さ9cm厚さ4～5cmであった。この立石を粘土で被覆し棺床をしつらえたものである。槨の両短側の粘土の高さは各々28cmと

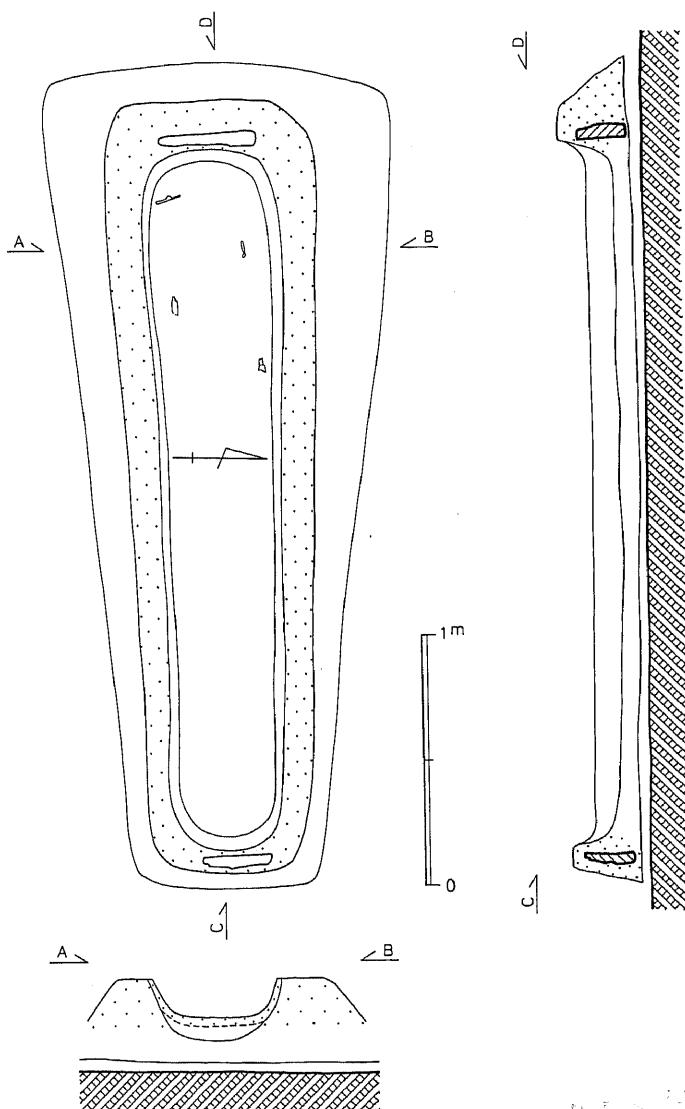


Fig. 25 9号墳中央槨 (1/30)

26cmであり、棺の両長側の粘土の高さは18~19cmであった。棺の両端を高く長側部はより低く粘土櫛が作られたのである。粘土床の断面はU字形を示し、割竹形木棺が置かれたことを示す。粘土の土壤学的研究は割愛したがかなり粘質のものである。中央棺の粘土櫛構造は両端に石材を用いることや、長側壁が短側壁よりも低いなど、首長墳に見られる粘土櫛をかなり簡略にしたものであり、割竹形木棺とはいえ、長さ270cmに満たない短いものであることが構造上の特色である。

北棺 北棺の粘土櫛東端をトレンチのため一部破壊したが、粘土櫛自体が薄く小形であった。粘土は棺の両短側及び両長側に見られるのみで、棺床部は竪穴住居址内の堆積土を稍固めただけのものであった。従って木棺の四周に粘土を用いて固定させたに過ぎず、粘土櫛と呼び難いものであった。粘土もまた粘質を欠く良質のものでなく、その量も多くない（長側両面では厚さ10cm未満）という特徴をもっている。

粘土櫛内法は長さ180cm、東端部幅40cm西端部幅36cm、深さ19cmであった。底部は平坦であり、棺材は残っていなかったが有機質黒色土が見られ、箱形木棺が置かれたものと推定できる。北棺は小形箱形木棺を固定するために周囲に粘土を用いたという構造である。

両棺の粘土上面はほぼ同一レベルにあり棺底は、中央棺がより深く、北棺棺底は中央棺棺床より5~6cm高い位置にあった。両棺間の土が堆積土であることも含めて先後関係を層位的に確認することはできなかったが、棺底・粘土床底がより下位にある中央棺がさきに作られたと推定して大過はあるまい。

遺物出土状況 遺物はすべて中央棺から出土し、北棺には遺物は認められなかった。

中央棺内東端寄り北壁寄りに小形内行花文鏡が斜めになった状態で出土した。同じくや、中央より南壁寄りから管玉が出土した。太形管玉の孔に半ば一端を突込んだ形で極細管玉が出土、棺東部北側壁寄りに鉄短剣、南壁寄りに鎌、棺西端から刀子が出土した。粘土櫛上面レベル中央から鉄斧、棺外東壁外方から鉄鎌が

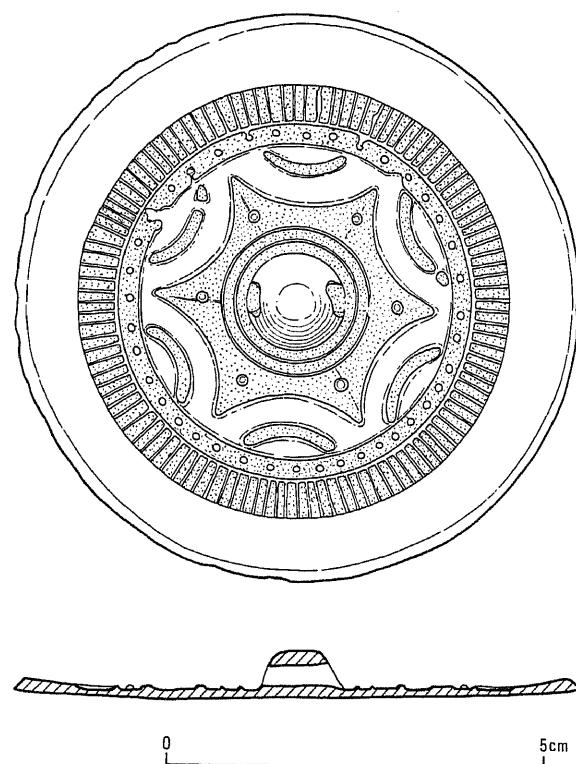


Fig. 26- 1 9号墳中央北棺出土鏡 (1/1)

出土した。棺内遺物として鏡・管玉2・剣・鎌・刀子と棺外遺物として斧・鎌が出土した。副葬品か否かの不明のものとして土師器高坏片が棺外から出土している。以上が遺物のすべてである。

4. 遺物

変形内行六花文鏡 面径72mm、鏡径74mm、鏡厚2mm弱の内行花文小鏡であるが、内区外側にさらに連弧をもつ特異な鏡である。完形品で暗褐色を呈する青銅製品で、織物などの付着は認められない。縁は平縁で、幅7mm、縁厚2mmで端部がやや厚くなっている。外区は直行櫛歯文帯の内側に珠文帯がある。珠文には1部に鋸流れが見られる。内区の主文は内行六花文であるが、内区外側にさらに連弧を鋸出しており本鏡の特徴となっている。主文内側の六小突起から鏡中心部へむかって、地にかすかな隆線が認められ、鏡范作成時の割付線の名残りと思われる。二重突帯の中の鉢径12mm、鉢厚4.5mmである。重量は46.5gである。類鏡の極めて少ない仿製鏡である。

管玉 2ヶあり、内1つは酸性凝灰岩(いわゆる碧玉)製太形管玉であり径10mm、長さ30mmの品で孔は一方穿孔であり穴の細い側は一方に偏っている。他の一つは径3.5mm長さ8mmの小管玉で材質不明の軽い品である。

鉄短剣 尖部を欠失するが剣身幅19mm、中央部厚さ2mm両刃で現存身部長85mm、柄部現長18mm厚さ2mmである。

鉄鎌 刃部の側に先端がわずかに内湾する式の品で柄装着部幅34mm、刃部幅28mm、厚さ2mm、長さ108mmである。三片に破碎されて出土したが完形に復元した。

鉄刀子 尖端を欠失するが、現長52mm、身部幅15mm柄部幅9mm、峰厚2mmのもので、柄部に鹿角や木質は遺存していない。

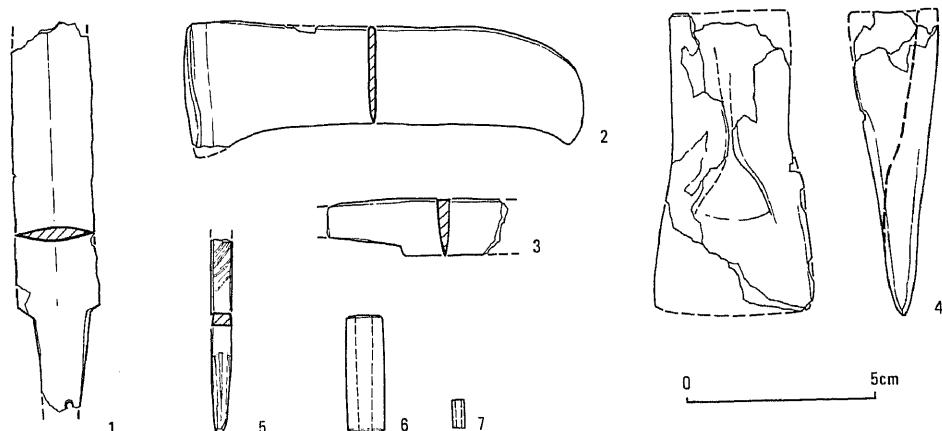


Fig. 26-2 9号墳中央棺出土鉄器・玉 (1/2)

鉄斧 柄部は鉄板を折り曲げる式の鍛造小鉄斧で刃先の一部を欠失する。全長79mm、刃部推定幅45mm、刃部長40mm、柄内径は22mmと14mmである。

鉄鎌 2 共に鎌身を欠き形式は不明である。内1本は現長20mm径3mm、他の1本は現長52mmである。

高壙 土師器で口縁が外反する焼成良好の品であるが細片のため口径不明である。

5. 9号墳の特徴と時期

9号墳の遺構の特徴は、調査時すでに墳丘の大半を失っていたため①裾部のみに葺石を持ち埴輪を持たない径15mに満たない円墳である。②埋葬施設は簡略な粘土槨2であり、中央棺は長大ではないが割竹形木棺、北棺は箱形木棺と推定されることである。

副葬品には小形内行花文鏡、太形を含む管玉2、鉄短剣・内湾式鉄鎌・鉄刀子・鉄斧各1、鉄鎌2が知られるのみで中央棺出土である。

副葬品に鏡を含むとはいえ遺物の種類・量ともに貧弱であり、北棺は副葬品を持たない。

以上の本墳の特徴について検討して築造時期を推定しよう。

美作において葺石の下限は、埴輪の下限より古く、首長墳では須恵器5区分の第1形式までであり、津山市井口車塚(第3段階)⁽¹⁾が下限例であり、津山市寺山A群⁽²⁾・八束村四塚13号⁽³⁾、津山市中宮1号墳⁽⁴⁾のように、須恵器第1形式末・第2形式1期のものは葺石を持たないことが知られている。裾部のみとはいえ小形墳に葺石をもつことは須恵器第2形式以前であることを示すといえる。

粘土槨構造としては、長大な割竹形木棺を被覆した月の輪古墳例⁽⁵⁾、のほかに首長墳例として鏡野町土居妙見山古墳⁽⁶⁾、小形墳として津山市沼6号墳北棺が知られている。前者は5世紀初頭頃に、後二者は5世紀代に位置づけられている。発掘例ではないが鏡野町下入笠松古墳も粘土槨であるが第1形式第3段階の須恵器を出土しており、美作での下限となっている。本例は槨内法が短く、簡略な手法であるから下限に近いと推定して大過あるまい。

鏡は類例のとぼしい二重弧をもつ小鏡であり、小形仿製鏡であること自体から時期の限定は困難としても、変形著しい図文の示す所は古墳の時期をあげる要素とはならない。太形管玉をもつ点もまた同様である。

曲刃鎌を副葬品としてもつことは、5世紀中葉にさかのぼらないことを示している。

一方で、本古墳から須恵器が副葬されず墳丘祭祀にも用いられていないことは注目してよいと思われる。津山市河辺長畠山1~2号墳⁽⁸⁾、津山市日上12号墳⁽⁹⁾、勝央町明穂1号墳⁽⁷⁾のように首長墳以外の小墳にも須恵器第1形式第3~4段階のものが、美作では副葬されているのが一般的傾向であるから、この期以前の可能性が高いといえよう。本古墳の遺物のうちに時期限定資

料はなく、曲刃鎌・太形管玉の示す下降的要素と須恵器を持たず、葺石をもち、粘土槧構造であるという、やゝさかのぼる時期要素から、本古墳の築造時期を5世紀後半代において大過なかろうと推定する。

竹田9号墳は5世紀後半代の小形古墳として捉えることができる。

注

- (1) 西川宏・今井堯「吉備地方須恵器編年資料集成1」『古代吉備』2号 1958年
- (2) 河本清「美作津山市皿寺山A群出土須恵器」『古代吉備』6号 1969年
- (3) 近藤義郎・神原英朗・岡本明郎「四つ塚13号発掘報告」『蒜山原』1954年
- (4) 近藤義郎「中宮1号墳発掘調査報告」『佐良山古墳群の研究』1952年
- (5) 近藤義郎編『月の輪古墳』1960年
- (6) 土居徹「美作鏡野町土居妙見山古墳」『古代吉備』6号 1969年
- (7) 註(1)に同じ。
- (8) 渡辺健治・今井堯調査
- (9) 今井堯「美作高祖神社裏古墳出土古式須恵器について」『貝塚』71号 1955年

第6章 8号弥生墳丘墓

1. 調査の方法と認識の変化

竹田9号遺跡は、調査前に香々美川の氾濫に伴う崖崩れによって、遺跡の立地する自然丘陵と共にその東半を失っていた。その部分は高さ40mの崖であった。樹木伐採と外面測量を終了した時点において調査団は、墳丘の6割を失った方墳として捉えており、土壙墓または箱式棺の多埋葬を想定していた。

そこで、墳域確認のためのトレントを、南・西・北各2本墳丘裾部に入れた。南と西部南半に顕著に、他部では粗に葺石を見出し、その下面の露出を平面掘りで行い、墳丘裾部のみに石をたてかけた列石であることをつきとめた。この列石が南西端では張り出し、列石裾線が内湾することを知り、葺石と想定したものは列石であり、形状は方または長方形でなく隅が突出したものであることを知った。

一方、崩落崖面を直線状にし断面観察を行う中で、崖面に数基の土壙または木棺直葬の埋葬施設の東半を失ったものを見出した。そのうち2ヶ所で土器（弥生後期）を発見し、それらを副葬品又は祭祀土器と認めた。そののち、崖面に平行した実測用壁・それに直交する同様壁60cm分を残して平面掘りを墳丘平坦部に実施した。そこに地表下30cmで埋葬施設上面を検出し、それが斜面にも及ぶことから、斜面も地山面まで全面排土を行った。その後墳丘平坦面南西隅・北西隅の土器棺の全掘、14の土壙墓の全面露出を行った。全体平面図・断面図作成の後、個々の遺構16の実測を行った。その過程で崖面付近に見出された土器は、祭祀用でなく土器棺と推定されるに至った。墳丘部調査のうち列石外側の調査を行い、北斜面は自然崩壊が著しいこと、西斜面に3ヶ所の後世の破壊孔があること。西斜面中央や、北寄りにも小突出があることを確認し、その両側に破碎された各種土器片が数多く出土した。この実測・遺物とりあげと平行して、列石外側の調査を実施したが列石基部に数十cmの平坦面があり、そこから自然地形に移行することが知られた。西側列石外（西）方の地山がやや低いことが知られたが周堀としての外縁は明確でなく自然地形に移行することが知られた。以上で発掘を終了した。

本調査は、墳丘の35~40%の調査であり、その範囲内で土壙墓14と土器棺4を検出したが、東半の60~65%はすでに崩落によって失われていたため全容は明らかにし得なかった。このことと、列石内平坦面に30~40cmの盛土が存したことから8号墳丘墓とした。

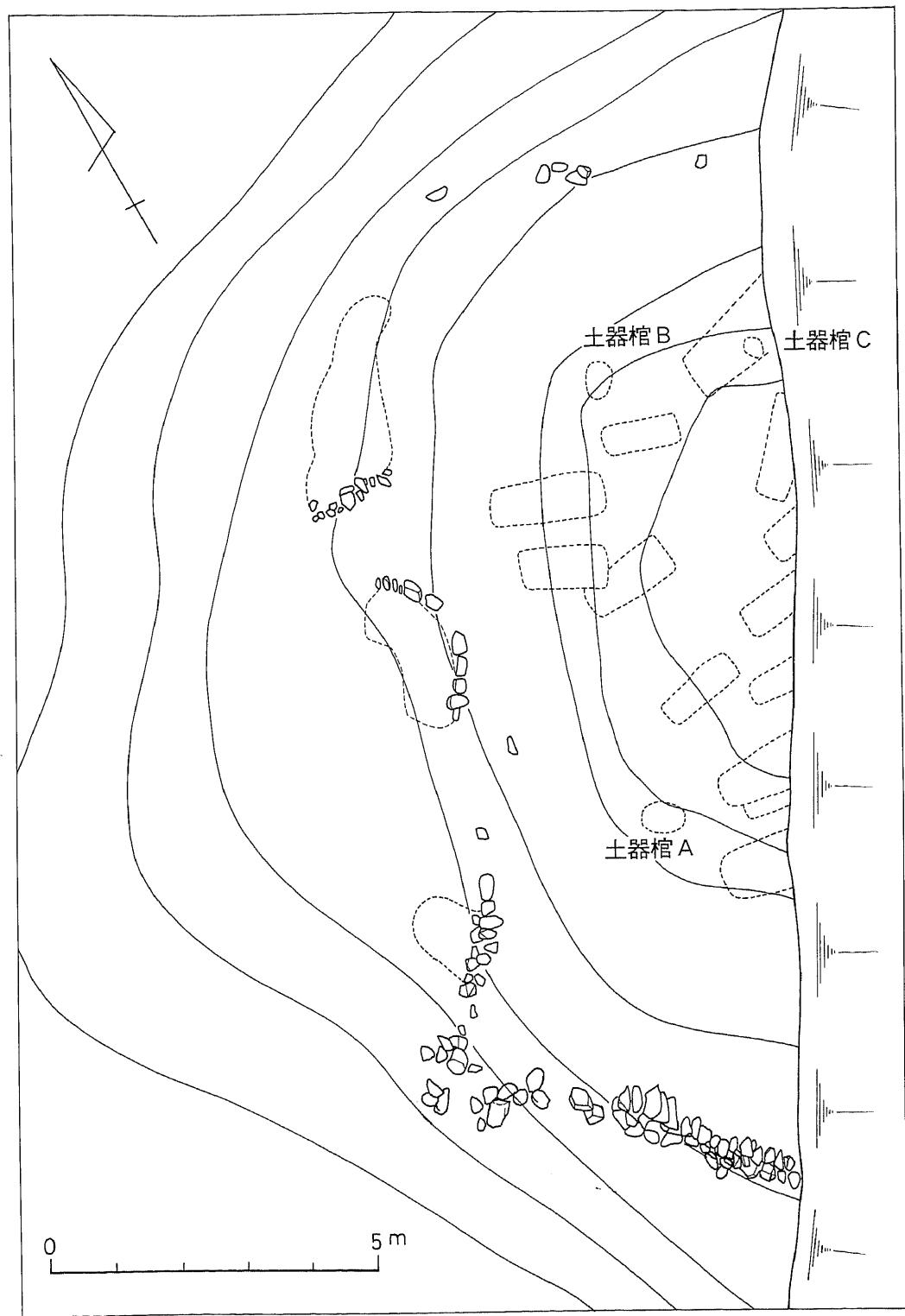


Fig. 27 8号墳丘墓平面 (1/100)

2. 立地・外形・列石・築成

立地 8号墳丘墓は、竹田丘陵主脈（その東半は崩落）から西にのびる斎藤丸支脈が分岐する接点にあたる最高所に立地する。海拔約180m、崖面直下の水田面からの比高約45mである。

外形 東半部を欠くために、平面形は方形か長方形か明らかでない。西辺（南北N10°E）の長さ14m、現存北辺長5.2m、同南辺5.5m。南辺列石基部から墳丘平坦面までの高さ1.5mである。南に下降する尾根を利用したためか、墳丘基部は北辺にくらべて南辺が90cm低い。この主丘部の西南隅では明瞭に、西北隅では僅かな突出がある。西南隅の場合は、隅に近い辺部が僅かに内湾していることが列石基部で確かめられ、隅では列石が弧を描いて突出して配置されている。以上から外形は南北14mの方または長方形の隅突出形といえる。西辺中央にも列石を両側において幅1.4mで長さ1.1mブリッジ状に突出させている。

列石 墳裾に幅20~30cm、高30~40cm平坦面をもつ河石を直立させ、その内側（墳丘側）にこれに直交（ほぼ水平）した平石を埋方の上において石列を作っている。現象的には立石は上面が外方に押出され、直立というより外反した状態を示すものも多い。この直立させた縦長の石と隣りの同様な石の間に10×20cm程度の円礫をつめて、石間のすき間を充填している。上記のことは南裾及び西辺裾南半部で明瞭に見られる。北辺及び西辺北半ではこの列石が抜かれたあとや、墳外斜面下方に転落した状態が見出された。このことは、基本的には墳裾各辺全面に亘って列石がめぐっていたと考えてよい。

南西隅では、この列石が、石列の示す方形から3~4個分突出していた。その多くは立石が倒れた状態で見出された。はじめ、この倒れた突出部列石を崩落石と見誤ったためにその一部をとりはずした。突出部の長さについて確認できたのは1.2mにすぎないが、山陰にみるような大形のものではない。この突出部の両脇—南辺西端・西辺南端の列石基部が直線をなさずゆ

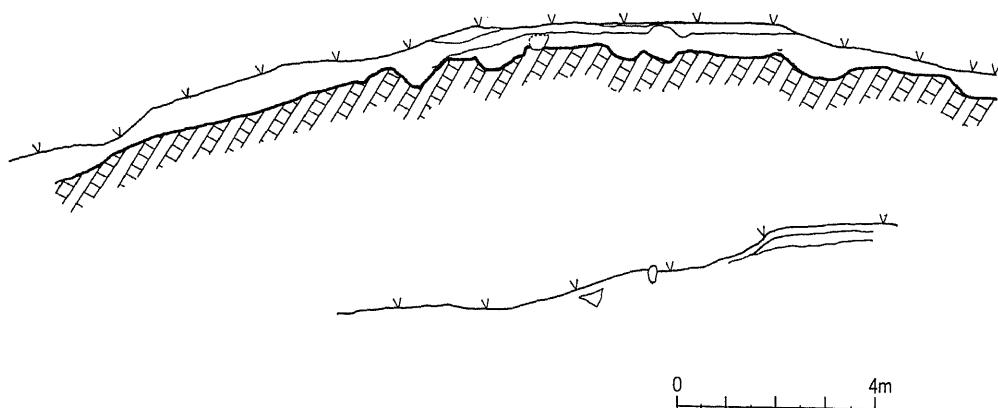


Fig. 28 8号墳丘墓墳丘断面 (1/150)

るく弧状になっていることはさきにふれたとおりである。墳斜面に葺く葺石でなく、直立を基本とする列石列と、それが隅で突出する墳外装飾ないし墳域区画のあり方を示すことは確かである。

墳丘の築成 自然丘陵の頂部を利用し、南北14~14.2mの両端の地山を削り、河石を直立させ、立石の掘方を旧表土などの有機質黒褐色土で埋め、立石上面レベルにはほぼ水平に平たい河石を置いて、墳墓域をまず完成させる。ここから内側の墳墓域斜面の下半はほとんど盛土を持たない。表土層から自然層に移る。墳域中央部は地山細礫を含む黄褐色有機質土層が厚さ30~50cm地山の上に積まれる。このことは盛土を持つ墳丘墓であることを示している。埋葬施設の掘方は、この盛土内では検出できず、地山上面において初めて検出されたので、さきに盛土し、その後盛土を掘込んで埋葬を行ったというより、埋葬（複数）後の盛土を考える方が妥当である。

墳丘の築成は、列石を置いたこと、盛土は平均40cm程度であること、この盛土は自然面に平行することで、古式の首長墳や竹田5号墳とも異った築成という状態を示す。なお付け加えておきたいことは、西辺中央の橋状突出部であり、ここだけは、表土層直下から若干の有機質土も含めて固い状態であり、ひんぱんな通路の役割りを果したかも知れることである。

列石外側の施設として、西辺中央の橋状突出の両側がや、凹みを持つほかに周堀は認められなかった。遺存状況の良い南辺では列石基部面外側は、約50cmが平坦にされ自然地形の傾斜に移行し、北辺では平坦面はほとんど見られず、急な自然地形の傾斜に移行する。

3. 埋葬施設

埋葬施設はすべて列石に囲まれた墳丘域で見出され、墳頂平坦部を中心に斜面上半部に限定されている。これら埋葬施設は土壙14と土器棺3~4であり、埋葬施設のうち土壙9は崖崩れのために調査以前にその東半を失っており、8号墳丘墓の総埋葬数もまた不明であるが20を超えることだけはほぼ確実であろう。いずれも地山に掘込まれたもので石材・粘土の使用は全く認められない。

土器棺A 墳頂南西部隅のもので、主軸を東南一西北に置く長楕円形掘り方をもちその上面は長さ65cm幅53~54cmで深さ32.5cmの掘り方内に、完形の甕形土器を水平に対して約20°傾斜させて置き、その口を別の縦に半割りした小形かめ形土器の胴部で蓋をした土器（甕）棺である。死産児ならそのまゝ入れ得る容量である。

土器棺B 墳頂平坦部北西隅に位置するもので主軸を東北一西南に置き掘り方上面72cm、下面是土器形で長さ58cm深さ35cmの墓壙内に甕形土器を置き、その口を別の壺形土器胴部片で蓋をしたものである。かめ形土器内面の長さ36.5cmである。

土器棺C 墳頂平坦部端から北斜面にかかる崖面に土壙掘方上面と同じレベルから掘り込まれ

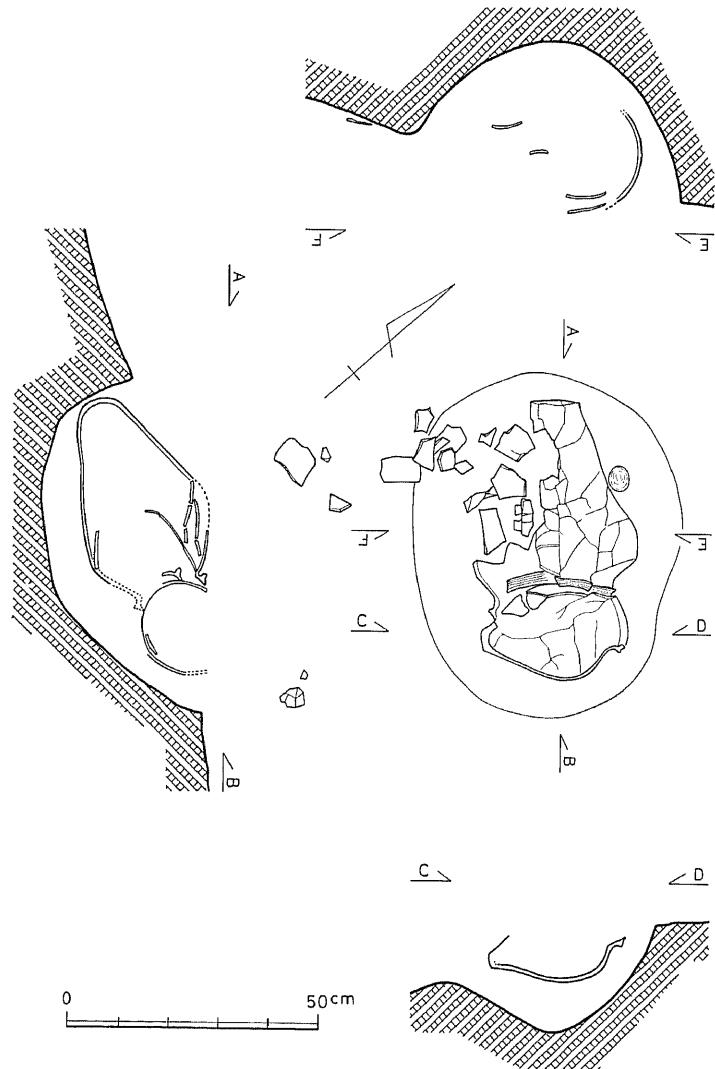


Fig. 29 8号墳丘墓南西部土器棺出土状態 (1/15)

土壙掘り方と同レベルにあるが掘り方や墓壙を充分に確かめ得なかった。しかし、土器棺Cに近いあり方が想定され土器棺の可能性が大である。

土壙は合計14が知られ、墳丘中軸線に近い崖面によって東半を失ったもの9(1~7号、13号、14号)と墳頂平坦部西寄りに完形のもの3(8~10号)および、西斜面に2(11~12号)がある。いずれも主軸は東南東から東北の間の東西位であり、これらに直交する主軸をもつものは見出されない。これらの土壙のうち2号と

た長さ88cm、幅48cm、深さ28cmの墓壙にはほぼ水平に置かれた大形の甕形土器(長42.5cm)を本体とし別の土器胴部片で蓋をしたもので、胴部の上半は地山掘り方面より上にでており、そのレベルに円礫一個が置かれている。土器棺A・Bと異って棺体となる器体が地山への掘り方より突出していることが特徴で、墓壙掘り方が盛土面から掘られた可能性をもつものである。

土器棺D 墳丘中央部に位置し崖面で東半を欠失している4号土壙に接した位置から甕形土器が出士した。調査時すでに土器の1部は崖面に落下しており、掘方上面は4号

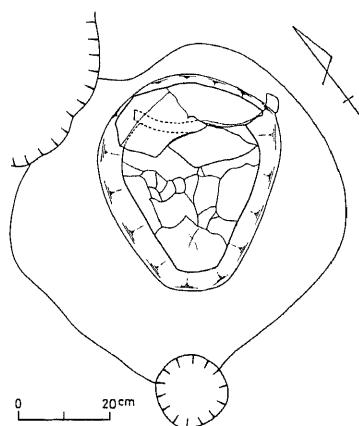


Fig. 30 8号墳丘墓北西部土器棺出土状態 (1/15)

13号、7号と14号、9号と
11号が複合し、少なくとも
2次の埋葬があったものと
いえる。

西斜面の土壙 11号土壙は
西斜面中央にある長方形土
壙で平底である。掘り方北
面の長さ130cm、幅65cmで
あり、墳頂平坦部西辺の9
号土壙の一部を切って斜面
深くに掘られており深さは
東で65cm西で30cm底部は水
平である。墳平坦面の土壙
より斜面土壙が新しいこと
をこの場合は明瞭にしてい
る。12号土壙は11号の北側
西斜面に11号と平行して作
られたもので大形の類であ
る。掘り方上面の長さ180
cm、東幅68cm西幅55cmで平底であり、東枕の可能性が高い。掘り方下面に棺の痕跡は見出され
なかつた。

墳頂平坦部西辺寄りの土壙 8号土壙は南寄りのもので掘り方の長さ130cm東幅45cm西幅35cm
深さ21cmで平底の小形土壙である。9号土壙は西辺中央のもので長さ145cm東幅65cm西幅45～
50cm深さ20～30cmの小形で平底である。10号土壙は長さ120cm幅48cmの浅い小形土壙である。
8～10号いずれも長さ145cmに満たず成人の伸展葬は不可能な長さである共通点をもつ。

崖面で切断されている土壙 いずれも東半を欠くために掘り方の長さは不明であるが1・2・7
のように幅広いもの3～6のように掘り方の深いもの、また底面が一形を示し割竹形木棺の
可能性をもつもの5がある。このほとんどは墳頂平坦部のものである。但しいずれも素掘りで
あり、特別に構造上すぐれて入念なものは存在しない。2号によって北辺を切られた13号、7
号によって南辺を切られた14号土壙の幅は不明である。1号西幅75cm、現存長辺(北側)長105
cm。以下同様に13号現長45cm、2号現長140cm西幅55cm、3号現長75cm西幅36cm、4号現長110
cm西幅55cm、5号現長75cm西幅55cm、6号現長160cm西幅50cm、7号170cm西幅50cm、14号現
長75cmを測る。確認しうるすべての土壙が東幅が西幅より大で東北東周辺に頭位をもつといえ

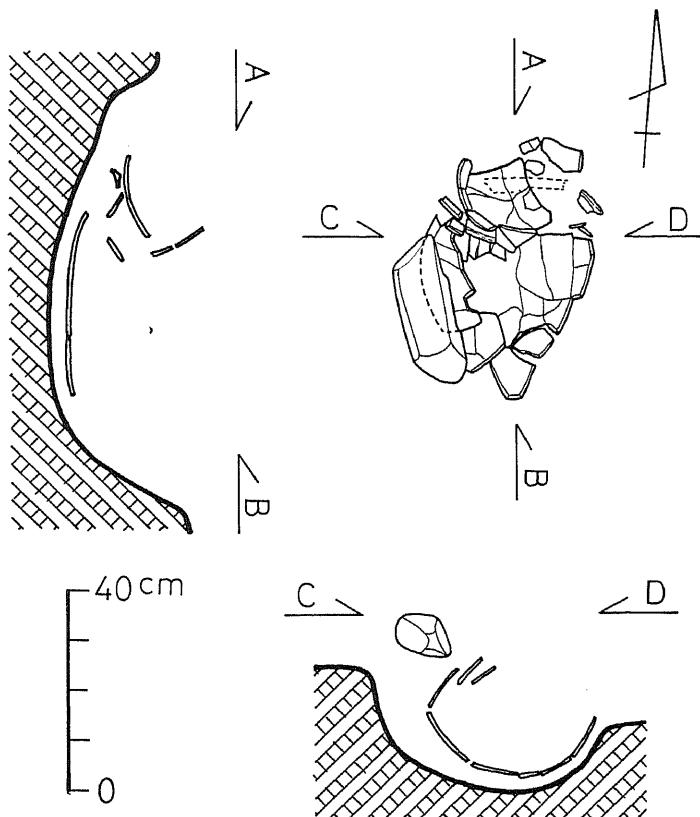


Fig. 31 8号墳丘墓中央部土器棺出土状態 (1/15)

る。なお墳丘東半を欠失するとはいへ、墳丘中央に巨大な掘り方をもつ埋葬の存在は、主軸が東西でその端部も現れないことから否定することができる。

土器棺・土壙墓のいずれからも副葬品は何一つ見出されなかつた。祭祀に用いたと思われる土器細片が西斜面南端近くの1ヶ所及び橋状突出の西辺縫南・北から出土した。

4. 遺 物

壺形土器（1） 土器棺Dに用いられたもので、下半部を欠失する短頸壺である。上下に拡張した口縁端部は、やや内傾し、外面には浅い四線文を巡らせている。胴部外面の最大径近くには櫛状工具による列点文を施した後に、横方向にヘラ磨きしている。内面は最大径以下をヘラ削りする。口径14.0cm、胴部最大径24.6cmをはかる。9は1と同形のものと思われるが、胴部の列点文を欠く。土器棺Cの蓋として用いられた大破片で、やはり胴部内面の下半のみをヘラ削りしている。他に土器棺Bの蓋として用いられた壺胴部と思われる大破片が1点出土している。

甕形土器（2～4・10） すべて土器棺として用いられたもので、大形と小形の2者に分けられる。いずれもしっかりした平底をもち胴部最大径は中心よりやや上方に位置する共通した器形を呈する。口縁部の形態もほぼ共通し、拡張された端面は内傾するが、一部にはやや上方につまみ上げ傾向をもつ。口縁部外面には浅目の四線文を施す。胴部外面はほとんどのものが縦ハケのあと下半部を縦方向にヘラ磨きし、小形品(3)では、さらに肩部にもヘラ磨きを加えている。内面の調整もほとんどのものが頸部以下をヘラ削りする。10はこうした調整技法において他と異なるほか、突出した底部形態や口縁部が水平に近く内傾する点においても特徴的な存在である。2は土器棺Bの身、3は縦に半截してAの蓋、4はAの身、10はCの身としてそれぞれ用いられたものである。

鉢形土器（5・6） 同形同巧の小形品で、墳丘西北縫の土器溜りから出土した。いずれも明瞭な平底をもち、拡張した口縁部は直立する。口縁端面には浅い四線文を施し、全体を丁寧にヘラ磨きしている。

高杯（7・8） いずれも脚台部のみの破片である。7は短脚で、杯部との接合箇所の充填部分が剥落している。外面には、櫛状工具による浅い平行直線文を2段に施し、その下位には5～6条を単位とするヘラ描沈線文を縦位に4単位巡らせている。脚端は上方に拡張し、脚内面はヨコナデ調整をおこなっている。8は長脚のもので外面には櫛状工具による繊細な平行直線文を6段以上施している。内面はヘラ削りしている。いずれも墳丘上で単独に検出された。

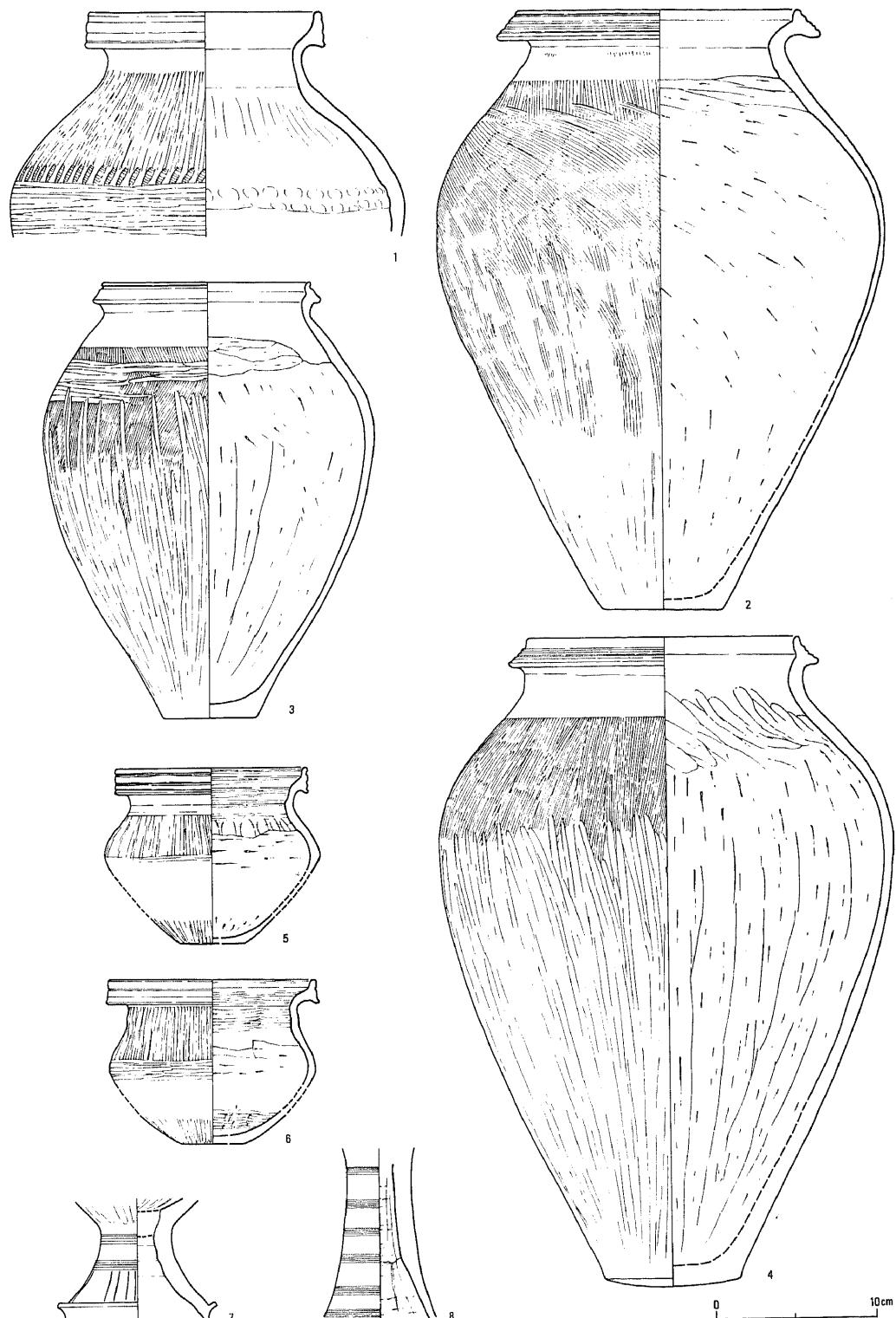


Fig. 32 8号墳丘墓土器 I (1—土器棺D・2—々B・3—々A蓋・4—々A) (1/4)

5. 8号弥生墳丘墓の特徴と時期

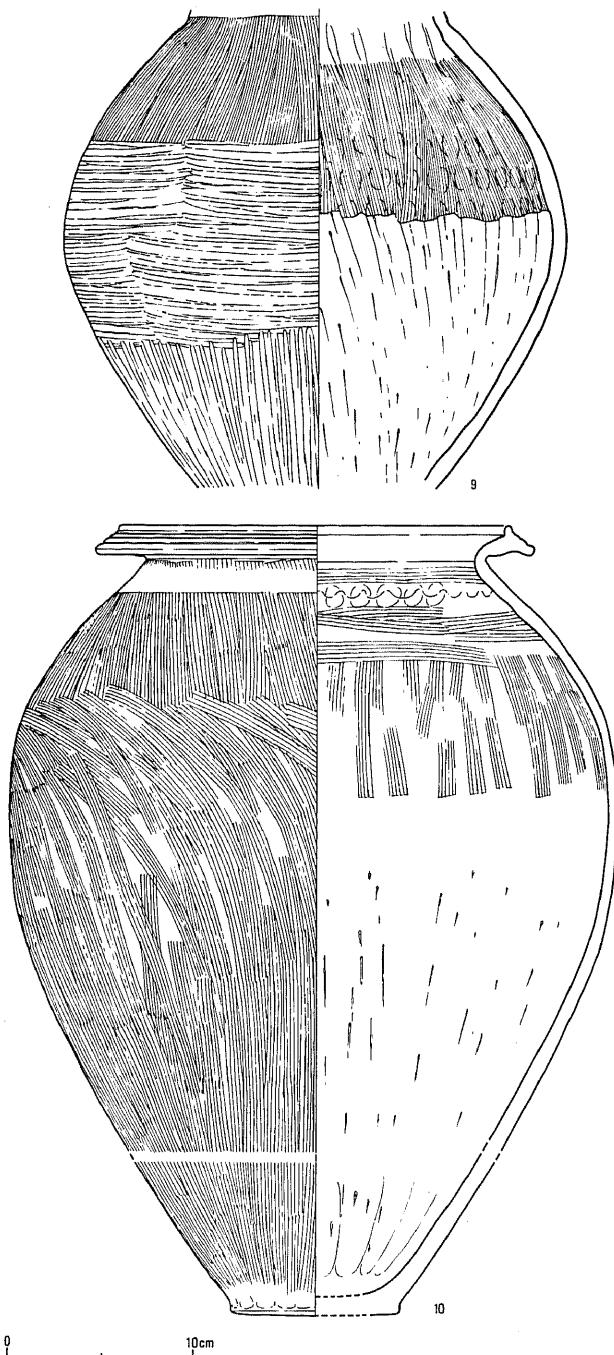


Fig. 33 8号墳丘墓出土土器 II
(9—土器箱Cフタ・10—々C) (1/4)

りについて具体的に追究することが当面の課題となつて来たことを示す。

第1は、列石をもつ四隅突出形方形墳丘墓ないし隅突出方形(または長方形)墳丘墓が確認されたこと。これは山陰を中心におこなわれた墳墓形態が、備後の三次・庄原地方のほかに岡山県北部にも見られるという初例を提供したことになる。

第2は、列石に囲まれた墳丘墓に、少なくとも土壙14、土器棺4がありながら、卓越した埋葬がなく、副葬品も見られないことは集団墓の性格を保持しており、いまだ長權が発達していない段階のものであることを示している。

第3に、この墳丘墓の時期は土器棺に使われた土器等についての4節での検討から弥生後期初頭の所産であり、岡山県南部の編年では鬼川市I式ないしII式にあたると考えられる。

四隅突出型墳丘墓自体の変化の中で、比較的古い時期に竹田8号墳丘墓がつくられたことは、美作地方において、特殊器台形土器をもつ弥生墳丘墓との関わりについて具体的に追究することが当面の課題となつて来たことを示す。

第7章 9号墳下住居址

1. 調査前の状況と調査経過

9号墳の墳丘直下に見出されたこの住居址の存在は、発掘前には全く知られていなかったものである。盛土の大半を失っていた9号墳の築成状況調査の過程で、地山を掘り込んで作られた住居址の存在を知ったのである。9号墳の墳丘への東西トレンチによって、東壁・西壁をつかんだ時点で、その掘方上面レベルで、平面的に掘り抜け、住居址の規模をつかみ、後にこの部分に作られた9号墳の2つの埋葬施設調査のち粘土槧遺構を除去したのちに自然流入埋積土を除去して床面の露呈に努力した。その過程で、北壁に接して、高壙で蓋をした壺形土器が直立していることを知り、最後まで残す遺物として取扱った。また地山掘方より-18~20cmで炭化木材が広汎に現れたので焼失した住居址として炭化物に注意を払い一つ調査を進めた。9号墳の主体調査のちに、床面調査に移り、炭化物・土器・鉄器などの遺物の全面露出のち、平面・断面の実測・レベリングの後に遺物とりあげを行い、周溝・柱穴の全掘を行い、補充実測を行い、調査を終了した。なお、この地は南にのびる尾根上であり、狭い尾根の稜線上に当る。このことは、東側は中世に削平を受けており、他の住居址がかつて存在し得た可能性をわずかに残すが、確認できなかった。急激に下降する尾根の南支脈方向及び、急斜面を呈する西斜面には住居址らしき痕跡は全く見出されなかった。

2. 住居址の形態と遺構

円形や、長方形の平面を呈し、長軸（東北東～西南西）の長さは、掘方上面で5.05m、床面で4.6mであり、短径は掘方上面で4.54m床面で4.0mである。壁に接して幅18~20cm深さ4~8cmの周溝がめぐっている。床面ほぼ中央に長円形の凹み穴があり、掘方長径76cm・短径65cmで深さ49.5cmである。

柱穴は計6本が認められたが、その配置は、主軸（N75°E）の南北にほぼ対称的であり、柱穴6のうち4が主柱であり、主柱間距離は東西238cm・南北220cmである。主柱掘方径29~40cmで、本柱径は20~22cm、深さは32~43cmである。補助柱は、主柱を結ぶ線上から外側50~60cmに中心をおき掘方径26~27cm深さ22~23cmで柱が浅く埋められたことが推定できる。4本柱を主体とした竪穴住居であり、残存壁高は北側で22cm、南側で32cmである。

炉址は、中央の凹み穴の東寄り（主軸線より東）にあり、四面を持たず46×40cmの範囲に床面の焼面によって確認された。床面での複合関係は全く見られなかった。

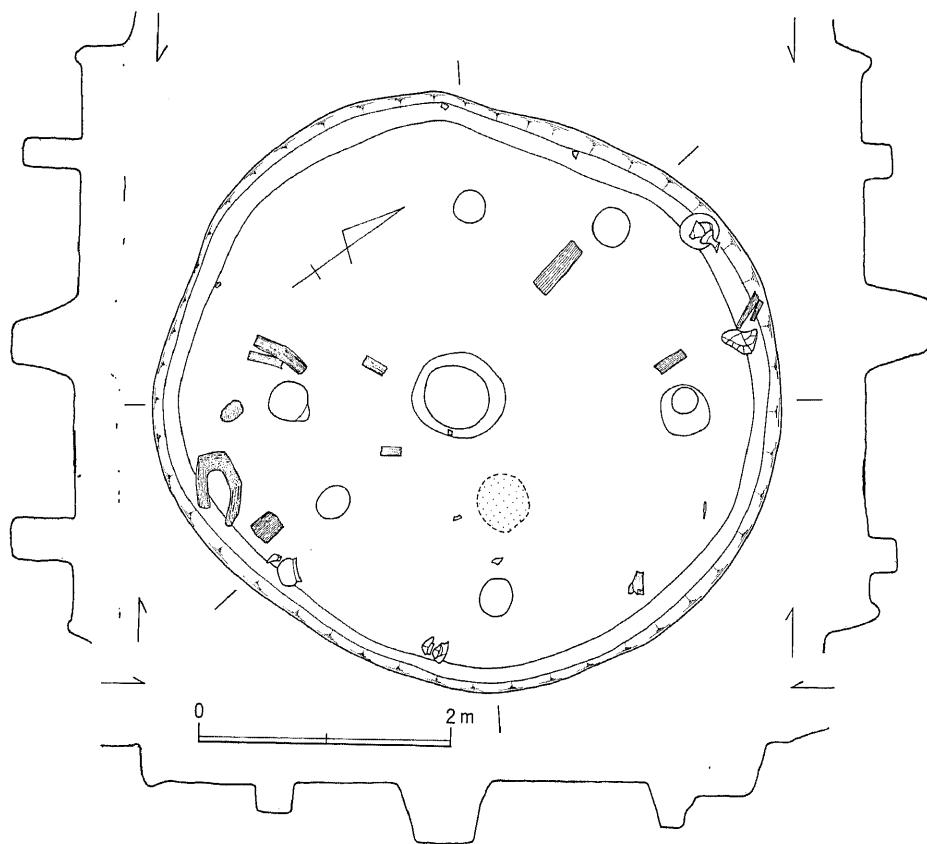


Fig. 34 9号墳下住居址 (1/60)

炭化木材は、床面上および、床面より上層の焼土上から出土した。南壁にかけて遺存したものは組合部であるが遺存部が少なく構造の解明には至らなかった。

北側柱穴（補助穴）に接して径12cmの炭化丸太材が見出された。本来この北補助柱穴に建てられていたものと思われる。この他図示した主要な炭化物のほかにも粉末化した炭化物が数多く出土したが、構造又は規模をつかみうるものはなかった。炭化物の材質の検討は今後にゆだねられるが、アベマキ又は栗の類の木材のほかに、カヤの炭化物が認められた。

3. 遺物出土状態

竪穴住居址床面に密着または、僅かうえから出土した遺物は、鉄器と弥生土器であり、玉類・石器は全く出土しなかった。北壁面に接して壺形土器と高坏が出土した。壺形土器の完形品が床面に底を置き直立して置かれ、高坏がふたをした形であるが、北壁面との間の土は固めら

れていた。固定直立させたものと思われる。中央南壁寄りに鉢形土器の大形品が、また南東壁近くの床面上から大形片からなる鉢形土器が出土した。このほか遊離形ながら同一個体と思われる大形高坏が住居址南半部から出土した。このほか、かめ形土器及び低脚高坏脚部細片（4個体以上）壺形土器の胴部細片多数が各所から遊離して出土した。

鉈の完形に近いものが、東北壁に近い床面から出土し、炉址に近い南側床面直上から鉄鎌片が、西壁に近い床面から不明鉄器片が出土したが鉄鎌は現在不明である。

これらの遺物は、竪穴住居址床面及び直上の出土であり、この住居址に固有のものである。

4. 遺 物

壺形土器（1） 直立する口縁部と短い頸部を持ち、胴部は球形に近く、丸味を持つ平底という器形の特徴を示す。やや外方に開く口縁部は二重口縁を呈し、外面には2段にわたり強いヨコナデが施されている。頸部以下の内面はヘラ削りされ、外面は刷毛目調整の上をヘラ磨きされている。底部は直径6.2cmの平底だが、わずかに突出し、胴部との境界もやや明瞭さを欠いている。口径16.6cm、頸径12.5cm、胴部最大径28.5cm、器高32.5cm。

高坏形土器（2） 楠形を呈する坏部に、直立して外方に開く脚台をもつもので、口縁部はヨコナデにより端部が直立する特徴をもつ。脚端近くは水平に近く開き、丸味をおびるが明瞭な

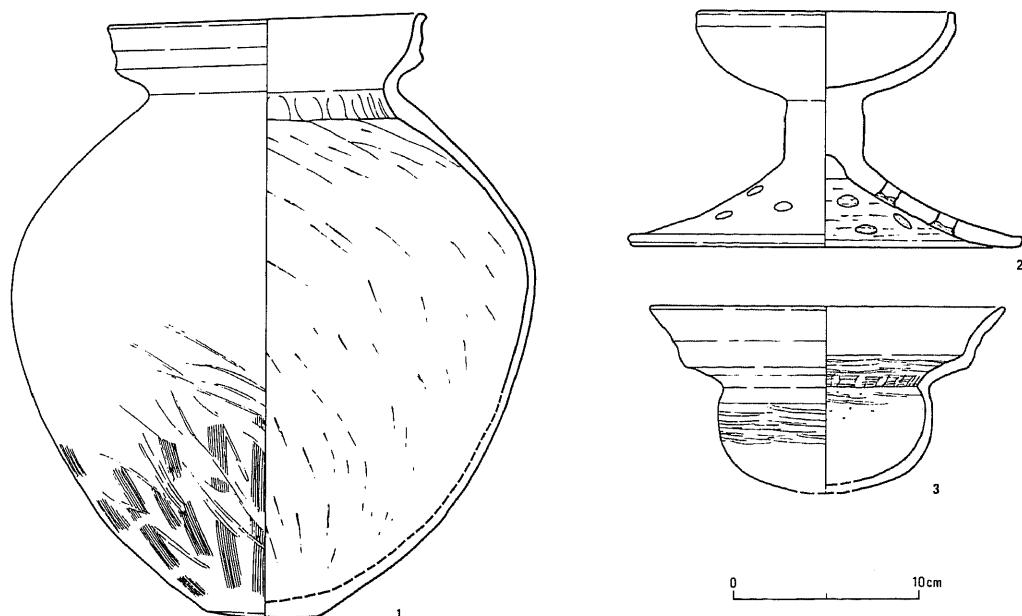


Fig. 35 9号墳下住居址出土土器（1/4）

端面を形成する。脚裾部には上下2段に5個と7個の透穴をやや不規則に配している。脚裾内面をヘラ削りするが、器肌荒れのため他の調整は不明である。坏部口径13.8cm、脚端径21.2cm、器高12.8cmをはかる。

鉢形土器（3） 半球形の胴部に大きく外方に開く2重口縁を付した特徴的な形態をもつ。底部近くを欠失するが、わずかに平底の痕跡を残した丸底に近いものであったと推定される。胴部内面は丁寧にヘラ削りされたあと頸部近くをヘラ磨きしている。外面には横方向のヘラ磨きを施し、口縁部は内外面ともヨコナデする。口径19.0cm、胴部径11.6cm、器高10.2cmをはかる。

鉄鎔（1） 全長10.5cmをはかる完形品である。板状の柄部の先端に長さ2.3cm、幅1.2cmの刃部をつくったもので、刃部と柄部の移行は明瞭である。刃部は片側に反っていて断面は中央部にやや高まりをみせる。

不明鉄器（2） 長さ3.5cm、幅1.0cmの柄状のもので両端を欠失している。全形は不明だが、刀子の柄部であった可能性が強いと思われる。

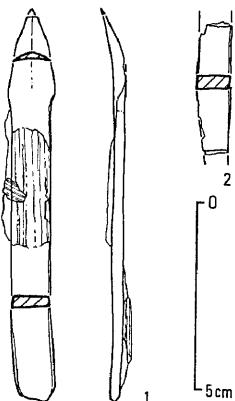


Fig. 36 9号墳下住居址
出土鉄器（1/2）

この竪穴住居址は円（長円）形住居で主柱4本柱構造の竪穴住居で、長軸4.6m床面積18m²弱であった。火災により焼失した住居であるが、火災の過程で土の投入による消火が行われたことを示す。その後再びこの地は住居に利用されることのなかったものであり、のちに9号墳の墳丘域にとりこまれたものである。

住居の時期は、北壁に固定された壺形土器をはじめとする土器の特徴から決定される。

この特徴は、津山市大田十二社遺跡での土器編年（第4式土器）に近いものである。⁽¹⁾

本住居址は大集落を構成する住居址としてのあり方でなく、単独または極めて少ない数の住居址が、高所に作られ、鎔・鎌などの鉄器を保有しているという特徴的な資料でもある。

注

(1) 河本清・中山俊紀・安川豊史・行田裕美「大田十二社遺跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告』第10集
1981年

第8章 竹田墳墓群の人骨及び石棺材

1. 5号墳の人骨

中央、北、東、南の4石棺内から人骨が発見された。いずれも破損がいちじるしく、計測、観察できた項目は少ない。計測値の単位はいずれもmm。

中央南棺

1体分で（第1号人骨）、頭頂骨破片3片、側頭骨破片1片のみ。成人ではあるが、年令、性ともに不明。

中央北棺

頭骨を東にするもの（第2号人骨）と、西にするもの（第3号人骨）の2体が埋葬されている。

第2号人骨（女性、壮年） 脳頭骨は、頭蓋冠後部および頭蓋底後部と、その他5片の断片が残っている。すなわち、完全な後頭骨、右頭頂骨、左右側頭骨と、矢状縫合よりの部分を欠く左頭頂骨を接合することができた。矢状縫合、人字縫合には癒着のあとがない。乳様突起は小さく、外後頭隆起、乳突上稜の発達は弱い。計測できた計測値、それらの示数をあげると、頭骨最大幅(134)、最大後頭幅101、基底幅100、矢状頭頂弧長124、矢状後頭弧長119、矢状後頭上鱗弧長77、矢状頭頂弦長110、矢状後頭弦長99、矢状後頭上鱗弦長66、大後頭孔長34、大後頭孔幅29、矢状頭長示数88.7、矢状後頭示数83.2、矢状上葉示数66.7である。

顔面頭骨では、口蓋突起、前頭突起を欠く左上頸骨と左頬骨だけが残っており、上頸骨の歯槽には第1小臼歯から第2大臼歯までの4本が釘植している。歯の咬耗はほとんどなく、プロカの0度である。頬骨は小さい。

下頸骨は、下頸体の頭孔よりやや下から底部までを欠き、下頸体は、左では下頸枝に続くが、右は第2大臼歯の歯槽で終っている。これとは離れて、右下頸枝の破片がある。下頸切痕は深い。歯は右では第2切歯から第2小臼歯までの4本が、左では犬歯から第3大臼歯までの6本が歯槽に残っている他、左第1、第2切歯、大臼歯の歯冠が存在する。咬耗はほとんどない。

上腕骨は、左は上腕骨頭、大結節、小結節を、右は近位部 $\frac{1}{3}$ を欠く。全体として細く、橈骨神経溝が深いためねじれが強い。左の遠位端には滑車上孔がある。左右とも中央最大径22、最小径15、中央横断示数68.2である。

橈骨は左右とも近位部 $\frac{1}{3}$ ～ $\frac{2}{3}$ ぐらいを残すだけで、尺骨も右は近位部 $\frac{1}{2}$ 、左は近位端の破片である。手骨はない。

大腿骨は、左は中央部よりやや遠位までの近位部が残っているが、大転子と小転子が欠損し

ている。これとは別に、内側頸の破片がある。右は、大腿骨頭から大殿筋粗面までの破片と、骨体の破片とからなる。骨頭はやや小さく、頸部が長く、頸体角が大きい。大殿筋粗面はやや強い。左の上部矢状径23、横径29、横断示数79.3で、扁平型に属す。

脛骨は、左は近位端、近位部の骨体内側面、外側面を欠き、右は遠位部 $\frac{1}{3}$ の破片と、近位部前縁付近の骨体 $\frac{1}{3}$ の破片だけである。ヒラメ筋線はいくぶん強い。腓骨は断片。

下肢骨としては、この他右膝蓋骨破片、左右距骨、左踵骨、右舟状骨がある。

これ以外に、第1、第2頸椎を含む椎骨11個、左右肩甲骨破片、左鎖骨破片、肋骨破片、腸骨翼上部と恥骨結節を欠く左寛骨と、右恥骨上枝がある。大坐骨切痕の角度は大きい。

第3号人骨 (12~13才の小児) 脳頭骨は、蝶形骨、前頭骨眼窓面、左右の錐体以外は、少数のきわめて小さい断片が残っている。顔面頭骨としては、左右の上顎骨がある。下顎骨は、右の骨体から下顎枝までと、左下顎枝の2破片からなる。歯は上左第2切歯、第2大臼歯、下左犬歯を除いてすべて残存しているが、第3大臼歯は歯冠だけで、これは未萌出と考えられ、小臼歯の歯根も完成していない。

四肢骨として残っているのは、骨体の大部分である右上腕骨、骨体遠位部 $\frac{1}{2}$ と近位部 $\frac{1}{4}$ の2部からなる左上腕骨、骨体遠位部 $\frac{1}{2}$ の左桡骨、骨体中央部の大部分の左大腿骨、骨体遠位部 $\frac{1}{3}$ の右大腿骨、近位部破片の左胫骨、近位部 $\frac{1}{2}$ の右胫骨、断片の腓骨、足骨（左右距骨、左右踵骨、右立方骨、左右楔状骨4個、中足骨5本、趾骨5本）があるが、手骨はない。いずれも、近位、遠位端の骨端線で分離している。

これ以外に、椎体と椎弓が癒着した椎骨15個、左右鎖骨、左右肩甲骨、肋骨の破片がある。仙骨は仙椎に分れており、左右の腸骨は、寛骨臼で恥骨、坐骨と癒着していない。

年令の推定は、骨端線の状態と、歯の萌出、歯根の発達から推定した。

東 棺

成人骨格1体(第4号人骨)が埋葬されている。

第4号人骨 (男性、熟年) 脳頭骨としては、前頭骨と、冠状縫合でそれに癒着している頭頂骨の大きな破片（前頭骨は右眼窓縁内側 $\frac{1}{2}$ から眉間、左眼窓縁、左頬骨突起、左側頭線から外側の前頭鱗を欠き、頭頂骨はブレグマの後方約5センチまで、右は鱗縁まであるが、左は側頭線まで）と、乳突部を欠く右側頭骨と蝶形骨の右大翼側頭部が結合した1片と、左側頭骨、蝶形骨の左大翼側頭部、後頭骨底部が結合した1片の3部からなる。矢状縫合、冠状縫合は癒着し、内板ではすべて消失して縫合はみられず、外板でも、矢状縫合、冠状縫合の前頂部がほとんど消失している。前頭骨の弯曲は中程度、側頭線の発達も中等で、乳様突起は小さい。下顎窩は深く、後頭頸は大きい。

顔面頭骨では、左頬骨、左上顎骨、右上顎骨の口蓋突起と歯槽突起が結合したものがある。上顎の歯はなく、歯槽はすべて萎縮閉鎖している。

下顎骨は、左は第3大臼歯歯槽部まで、左は関節突起を欠く下顎枝に続く。下顎体は高い。左右の第1、第2小臼歯、左犬歯が歯槽に釘植しており、歯の咬耗はプロカの2度である。

上肢骨はない。大腿骨は、左は骨体の大部分が、右では骨体の遠位部 $\frac{1}{3}$ が残っている。粗線の柱状性強く、左で中央矢状径30、横径27、中央横断示数111.1である。脛骨は、右骨体破片と、左骨体の大部分で、左脛骨ではヒラメ筋線が発達しており、その中央矢状径31、横径23、横断示数74.2、栄養孔部矢状径33、横径25、横断示数75.8で広型に属す。

これら以外に、左右腸骨、右恥骨、左坐骨、仙骨があるが、いずれも破片である。

南 棺

大腿骨、上腕骨、歯からみて、成人2体が埋葬されている。

第5号人骨 大腿骨の粗線の柱状性が強いもので、左は大転子から骨体中央部付近まで、右は骨体中央 $\frac{1}{3}$ 。左右とも中央矢状径29、横径27、横断示数107.4である。脛骨は右骨体の遠位より $\frac{1}{3}$ 、左は骨体中央 $\frac{1}{3}$ で、中央矢状径右31、左32、横径左22、横断示数左68.8である。上腕骨は、右骨体中央 $\frac{1}{3}$ と左遠位部 $\frac{1}{3}$ で、三角筋粗面が強く、右の中央最大径24、最小径20、横断示数83.3。

第6号人骨 大腿骨の粗線の柱状性弱く、右は骨体遠位より $\frac{1}{3}$ 、左は骨体の破片である。右の中央矢状径21、横径30、横断示数70.0。上腕骨は左の骨体中央 $\frac{1}{3}$ だけであるが、三角筋粗面が弱く、第6号人骨にくらべて細い。

これ以外に、腓骨断片、鎖骨および肩甲骨の破片、脳頭骨の破片があるが、いずれの人骨に属すか判定できない。脳頭骨の破片は、後頭骨鱗部、右頭頂骨破片、前頭鱗破片、その他約10片の小破片からなり、外後頭隆起、側頭線は弱い。

歯は上顎左第2、第3大臼歯、右第1、第2大臼歯が1個体、左右第3大臼歯が別の1個体である。下顎左第2小臼歯、第1、第2、第3大臼歯が1個体、左第3大臼歯が別の1個体で、犬歯はいずれに属すか不明。右では、第1、2大臼歯が1個体、第1小臼歯はこれに属すか否か不明。以上のうち、上左第2、第3大臼歯、右第1、第2大臼歯、下左第2小臼歯、第1、第2、第3大臼歯は同一個体であり、上下左、上右の第3大臼歯が別の1個体に属し、左下犬歯、右下第1小臼歯はいずれに属すか不明。

資料の整理に際しては、京都大学大学院学生毛利俊雄君の協力をえたことを付記し、感謝の意を表したい。（池田 次郎）

2. 5号墳組合せ石棺の石材

中央北棺——流紋岩（蓋石、側壁、底石）

中央南棺——流紋岩（蓋石、側壁、底石）

南 棺——玄武岩を主体としている。蓋石の一部と底石は流紋岩を使用。

東 棺——閃綠岩を主体としている。側壁には玄武岩を使用。

中央北棺、中央南棺に使用している石は流紋岩であるが、竹田5号墳付近には流紋岩を産する所はない。現地から南東に約15kmの津山市大谷を中心に、姫新線より南部、津山線の東部と吉井川流域の西部で囲まれた地域に産出する。この流紋岩は、粘板岩などを角礫の形で含んでいるので、流紋岩質角礫凝灰岩と呼ばれることがある。石質から上記の地域のものを使用していると推定される。

南棺はおもに玄武岩を使用している。苦田郡阿波村や同村からの鳥取県境、久米郡棚原町八神地域に産するが、鏡野町内の竹田5号墳から北東に約1kmの所に、第三紀層を貫いてできた玄武岩の女山・男山という円錐形をした小山があり、五角柱の柱状節理も見られ、この山から崩れ落ちた玄武岩を使用したと推定される。

東棺は閃綠岩を使用している。現地から約0.3km東に香々美川が流れている。この河原に閃綠岩がころがっているので、ここから運んだのではないかと推定される。

参考文献

- 光野千春・大森尚泰「15万分の1地質図幅、岡山県および同説明書」岡山県1963年
- 光野千春・沼野忠之・野瀬重人「岡山県地学のガイド」1980年
- 「岡山県文化財総合調査報告14（天然記念物編）鏡野町」岡山県文化財保護協会 1978年

3. 竹田墳墓群の石材

竹田5・6・7号墳に使用された石棺の石材の特徴は重要な問題を提起している。

5号墳中央北・中央南両棺には、蓋石・側壁・底石とともに、流紋岩質角礫凝灰岩を使用している。5号墳東棺と6号墳の石棺は、閃綠岩を主体としその一部に玄武岩を用いている。5号墳南棺と7号墳の石棺には玄武岩主体と玄武岩のみが棺材に用いられている。

このことは3古墳の6つの棺が極めて密接な関係をもって作られたことを示している。このうち5号墳東石棺と6号墳石棺の主要石棺材は眼下の香々美川河床などで得られるものであり、5号墳南石棺と7号墳石棺の主要石棺材はこの竹田丘陵に北続する男山・女山周辺で得られる

ものである。問題は、鏡野町域で産出しない5号墳中央の2石棺の石材である。

この石材は、加工の容易な石材であり、津山市横山字八伏に江戸期からの石切場があつて、国指定史跡津山城址の石垣石材にも用いられている。竹田5号墳々頂平坦部中央の、規模のや、大きい中央北・中央南棺の石材はこの八伏の石山周辺産出のものとしてよいであろう。

津山盆地の南縁吉備高原側に産出するこの石材を用いた可能性をもつ古墳が、津山盆地北側の中国山地寄りから少なからず知られている。

(1) 鏡野町宗枝・伊勢領大塚古墳、津山市沼6号墳南石棺、津山市沼3号墳石棺、津山市
(2) 総社下道山南古墳南石棺・北石棺、津山市高野押入飯綱神社西古墳中央石棺、津山市兼田
(3) (4) (5)
(6) 丸山古墳の2棺、などを例示しうる。このうち竹田5号墳と兼田丸山古墳は4世紀代に、他の諸古墳は5世紀のうち須恵器出現以前のものと位置づけられる。一方で首長墳が出現している時期のものであり、やや規模の大きい伊勢領大塚を除いて前期小形墳であるが、前期小形墳として顕著なものに、共通した石棺材が用いられている。

このことは、各々の古墳の被葬者の社会的背景又は基盤を越えていることを示す。兼田丸山古墳のように、小鏡ではあっても自らの基盤では作り得ない鏡をもつことも含めた、上記諸古墳被葬者全体を含む政治圏の存在が推定され、その中の棺材を供給させ得た、連合体の存在(7)を暗示するといえよう。

間壁忠彦によって竜山石とされている津山市高野山西字正仙塚竹塚古墳の長持形石棺々材についても、八伏の石山石との関係で再検討が必要であろう。このことは右の産地同定にあたって、八伏石切場周辺の石材のX線回析像による検討を経ていないこと、及びいわゆる竜山石も流紋岩質凝灰岩であって八伏の石山石もまた流紋岩質凝灰岩であるからである。

上記した諸古墳のうち、竹田5号・沼6号・同3号・下道山南各古墳石棺材は移築保存されており、伊勢領大塚・兼田丸山両古墳石棺材は現地に保存されており、専門家による多面的検討に堪え得るので、今は問題の所在の一端にふれるにとどめておきたい。

竹田5号墳中央の2石棺の棺材が、墳頂平坦部端に位置する2石棺の棺材と異って、同じ美作中央部ではあっても、吉井川南岸産のものであることは、今後の石棺調査に当つて十二分に注意すべき問題をなげかけていることだけはまちがいない重要な事実である。

注

(1) 今井堯・近藤義郎・村上幸雄「美作國鏡野町伊勢領大塚小塚について」『鏡野町綜合調査報告書』1958年

(2) 今井堯・渡辺健治・神原英朗・河本清「美作津山市沼6号墳調査報告」『古代吉備』6集 1969年

(3) 今井堯調査、未報告 石棺は津山市立愛山文庫に保管する。

(4) 栗野克己・岡本寛久「下道山遺跡・下道山南古墳」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』17 1977年 1号 棺は津山郷土館に保存

- (5) 橋本惣司・柳瀬昭彦「押入飯綱神社古墳群」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』4集 1974年
- (6) 本村豪章「美作津山市兼田丸山古墳出土遺物の研究」『MUSEUM』285号 1974年
- (7) 別途に論を予定している。
- (8) 間壁忠彦・間壁葭子「長持形石棺」『倉敷考古館研究集報』11号 1975年
- (9) 間壁忠彦・間壁葭子「岡山県丸山古墳ほか長持形・古式家形石棺の石材同定」『倉敷考古』10号 1974年
- (10) 石山石の場合も複数の場所での石材の分析が必要であろう。

第9章 若干の考察

1. 竹田墳墓群の調査によって明らかにされた諸点

A 斎藤丸支脈上に、遺構は消滅していたが粗大な楕円押型文土器が散布しており、尖底深鉢形土器を使用した縄文早期の痕跡が明らかにされた。

このことは、竹田縄文遺跡との関連のほかに、この時期（黄島式に後続する時期）の遺物分布が、瀬戸内沿岸部で稀であることにひきかえ、中国山地で濃密に見られることの解明の資料となり得るであろう。

B 竹田8号墳丘墓は、列石をもち、その隅が突出する方形で、墓域の中に土器棺4・土壙14が見出され、弥生後期初頭（鬼川市Ⅰ式ないしⅡ式併行期）の弥生墳丘墓であり、集団墓の中に卓越した埋葬が出現する前の段階のものであった。このことは、山陰を中心に北陸までの日本海側にひろく見られる四隅突出形墳丘墓が岡山県北部にも存在すること、およびその中でも比較的古い時期のものであることから、四隅突出型墳丘墓の成立とひろがりについて、今後の研究の上で好資料となろう。

C 竹田9号墳下の住居址は、長楕円形の6本柱をもつ酒津式（才ノ町Ⅱ）併行期の竪穴住居であり、火災に逢っていた。水田面からの比高30mの高所の住居址であった。

美作地方で弥生末ないし古式土師器の段階の住居遺構が増加しつつあり、編年が進行する中での好資料となると共に、個々の住居址の性格追究の資料となりうる。

D 竹田5号墳は、地上面と盛土面の境に鉢巻状葺石をもつ、1辺約17mの方墳であり、4つの組合式箱形石棺に6体が埋葬されていたが、副葬品はいずれも貧弱であった。棺の配置・1棺への2体合葬が同時に行われたこと、鼓形器台を打ち欠いて枕に転用したことなどの資料により、4世紀後半を下らない時期の小墳の具体的な内容を明らかにした。

竹田5号墳調査によって、数多くの問題が提起されるが、その内の若干の問題については後に考察しよう。

E 竹田6号・7号墳は、ともに径10mに満たない小墳であり、各々組合式石棺各1で副葬品もないものであった。時期を積極的に示すものはないが、6号墳の棺は5号墳東棺に、7号墳の棺は5号墳南棺に、棺構造・棺材ともに酷似していた。美作地方だけでなく他の地方にも遺物のない組合式箱形石棺例が多く時期不明とされるものが多い中で、6・7号墳は古墳時代前半期である可能性のある一例といえる。首長墳が一方で造営されている時期のこれら小古墳の性格、ひいては政治的地域集団⁽¹⁾を構成する単位集団の実態の解明の資料となりうる。

F 竹田9号墳は、墳丘の大部分を失っていた径14mの小円墳であるが、かろうじて埋葬施設

が残り、大小2つの粘土槨構造をもち、仿製小形鏡など若干の遺物をもつ5世紀後半の古墳であった。斎藤丸支脈という限られた地域に連なるように作られた小墳が時期幅を持つこと、換言すれば前半期の小墳も世代毎に作られた可能性が高い。このことは、岡山県総社市殿山古墳群において前期の小墳が世代毎に作られていることが明らかにされていることから、⁽²⁾ 前期小墳の性格を考えるうえでの好例といえよう。

以上のべたことから、今後の研究への若干の課題を提起してみたい。

竹田遺跡群のうち、時期・埋葬形式及び各棺相互関係の比較的明瞭な竹田5号墳の提起する問題の若干をとりあげて考察したい。

2. 前期小形古墳における棺配置の問題

美作における前期小形古墳（須恵器出現以前）で複数の棺をもつ場合に、墳丘平坦部中央に棺がつくられていないことが知られている。

津山市門ノ山1号墳では、墳頂平坦部中央を空白に3個の石棺がコの字状に配置されている。⁽³⁾ 津山市総社上妙谷古墳でも門ノ山の例同様に3つの小豎穴式石室が配置されていた。⁽⁴⁾ 津山市沼6号墳では墳頂平坦部の中心線に対称に石棺と粘土槨が平行して配置されていた。津山市総社下道山南古墳では平坦部中心線に対称的に2つの石棺が平行していた。⁽⁵⁾ 竹田5号墳の場合、4石棺があるが墳頂平坦部中軸線を中心に対称的に中央北・中央南棺が平行し、これにほぼ平行して平坦部端に南棺が、これら3棺に直交して東棺が平坦部端に配置されている。

このことは、前期の首長墳において主丘（造出付円墳の円丘・前方後円墳の後円部・前方後方墳の後方部）に複数の棺がある場合と配置を異にしている。月の輪古墳では円丘頂平坦部中央に中央棺が置かれ、中央部ではあっても南に寄せて平行する南棺がつくられている。⁽⁶⁾ 馬ノ山4号墳では9棺が知られるが、後円部平坦部にある2埋葬のうち長大な豎穴式石室は後円部中央にあり、3室からなる組合式箱形石棺は北に偏って主軸を平行に配置されている。⁽⁷⁾ 即ち首長墳では中央に首長埋葬が配置されるのであり、月の輪古墳における棺槨の規模と粘土の使用量による格差とか、馬ノ山4号墳のような棺構造の明確な優劣を伴うのが通例である。⁽⁸⁾

初期群集墳（須恵器Ⅰ期及びⅡ期前半）の多くは木棺直葬・箱式棺などの埋葬法をとり、複数の棺をもつことが多い。その場合、棺規模・棺構造・遺物ともに豊富なものが中央に置かれることが多い。津山市長畠山1号墳では墳頂中央部深くに礫槨が、その上方南寄り浅くに木棺直葬が、長畠山2号墳では中央深くに大形の割竹形木棺が置かれ、上方に木棺直葬2と組合箱形石棺が配置されている。⁽⁹⁾ 八束村四つ塚13号墳では墳頂中央部深くに大形棺が上方浅くに配置される。⁽¹⁰⁾ 津山市六ツ塚5号墳では中央に礫槨・西寄りに埴輪棺が配置されている。⁽¹¹⁾ 初期群集墳中の顕著な古墳には中央に長の棺が置かれ、棺構造・規模・副葬品ともに卓越している。

従って前期小形古墳の棺配置は、同時期の首長墳や初期群集墳と異って、中央棺（同一古墳被葬者の中で卓越した埋葬）を持たないことが多いということができる。

このことは、同時期の首長墳に比較して、同一古墳に埋葬される成員（親族）内での卓越が、前期小形墳には見られないことを示す。それは、棺配置だけでなく、棺構造・棺規模・副葬品においてもいえることである。

換言すれば長權は同時期において、地域政治集団の首長においてまず進行し、構成部分である世帯共同体での長權は成員と大差ない状態にありその伸張は遅れていたことを示す。⁽¹²⁾

この政治的地域集団を構成する世帯共同体でも先の初期群集墳にみるように、5世紀後半ないし末葉には長權が強められて成員から卓越するに至るのである。美作での前述の傾向は、日本列島で一様ではないにしても、基本的な流れとして容認されることではなかろうか。

3. 一棺内複数埋葬の問題

前期小形古墳での1棺複数埋葬例は少なくない。竹田5号墳では中央北棺・南棺が2体埋葬であり、津山市沼6号墳南棺・津山市総社下道山南古墳のように人骨の専門家による鑑定を得た例は少なく、津山市隠里1号墳のように未鑑定のものも少なくない。

1棺に2体を合葬する際に、頭位を異にし各々の棺の長辺よりの左右に寄せて棺内での埋葬位置をずらして計画的配置をとる場合が多い。沼6号南棺、下道山南2号（西）棺、竹田5号中央北棺などがそうである。竹田5号墳南棺のように枕石3個を置いて頭位を同じくして平行位埋葬を行うことも計画的な伸展位埋葬法の一つである。

こうした1棺多葬の場合に同時埋葬か異時埋葬かが問題となる。下道山南古墳西棺例では2体の骨が重なり合う部分はないが、1号骨は仰臥伸展位で、2号骨は残された空間に横臥伸展位で置かれたが、どの骨も埋葬時におかれた場所から動いてないから、同時または先葬遺体の軟部が腐蝕して白骨化する以前の埋葬と推定されている。⁽¹³⁾ 竹田5号墳中央北棺・沼6号墳南棺例では、対向位埋葬の双方の下肢骨が、他方の胸骨の下側で出土しており、2体共に骨体の乱れがなく、死亡は別として棺への埋葬格納は同時に終了したことを物語っている。即ち、竹田5号墳中央北棺は同時埋葬の明瞭な一例といえる。

異時埋葬例として岩井山6号、中島1号例も知られているが先葬者の骨を大幅に動かすことではない程度である。

前期小形古墳では、同時埋葬かまたは接近した時期——軟骨部腐乱以前の追葬ということが可能ではあるまい。このことは後期群集墳期の追葬ときわ立ったちがいを示すことになる。

次に一棺内に複数の人物が埋葬される場合の両者の関係について検討しよう。

一棺に2体以上が合葬されていることが確実な場合でも、人骨の鑑定を得ていない場合や、

人骨の遺存状態によって、性別と年令の双方又は一方が、2体のうち一体は不明の場合がある。後者の例に沼6号墳南棺・竹田5号墳南棺例が含まれる。従って考察の対象を前期小形古墳に限定すれば資料は一層少なくなる。そこで対象を吉備全域にひろげて、2体又はそれ以上の人骨の性別・年令区分の明らかなものをとりあげて考察の対象としよう。広島県備後の場合は、⁽¹⁵⁾池田次郎・山内純代両氏の集成を資料として用いることとする。

A. 成人男女の場合

合葬された2体の双方が、年令区分の如何にかかわらず成人に達した男性と女性であることが形質人類学的に確められた類である。次の諸例がA類に属する。

津山市総社下道山南古墳西棺（30～40才男・30前後女）、柵原町飯岡17号墳（老年男女）、⁽¹³⁾
岡山市浦間北山南古墳A号棺（成人男女）、赤坂町西軽部1号墳東棺（成人男女）、⁽¹⁶⁾⁽¹⁷⁾
総社市上林江崎古墳（老年男・老年女）、⁽¹⁸⁾山陽町中島1号墳（壮年男・壮年女）、⁽²⁹⁾
⁽¹⁹⁾広島県神辺町表山（熟年女・若年男）。⁽¹⁵⁾

この類が2体ともに性別・年令の明らかな類の大半を占めている。

B. 成人男女と子の場合

一棺3体埋葬のうち、成人男女と、性別区分出現以前の子又は極めて若年を葬る場合。この類に赤坂町西軽部1号墳東棺（成人男女・子）があるが類例は少ない。⁽¹⁸⁾吉備以外の一例をあげると福岡県古都古墳例がある。

C. 成人女性と子の場合

一棺2体埋葬のうち1体は成人に達した女性で他は子である場合。竹田5号墳中央北棺（壮年女・子）、⁽¹⁴⁾邑久町笠加我城山2号墳（成人女・子）、⁽²⁰⁾例があり、表山古墳例もこの類に入るかも知れない。首長墳例では久米町三成4号墳第二（前方部）主体例がある。⁽²⁹⁾

D. 成人同性2人の場合

1棺2体の両者が成人男性である例で、井原市下出部岩崎山4号墳例（老年男・熟年男）、⁽¹⁹⁾のみが知られている。近県例には広島県才迫・兵庫県突坂2号墳1号棺例がある。

E類 成人女性2体例やF類4体以上で複雑な組成は、岡山県下の前期小形古墳や首長墳では知られていない。

最も多いA類構成の埋葬は、考古学的に配偶関係を立証も否定もし得ないが、死亡時における配偶関係の可能性を年令の接近・類例比率の大から想定して大過あるまい。B類はA類の亜類で早死した子（幼少児女）がA類に加わったものとしてよいであろう。C類は母と子と推定することができる。

重要なことは、幼少児女が成人女性と同棺であっても成人男性と同棺ではないことであり、母系的紐帶の強い状態を示すことである。

前期小形古墳の多棺の場合も单棺の場合にも、单体埋葬は数多く知られる。この单体埋葬の

岡山県下前期小形古墳と人骨

所 在	墳 名	墳 形	棺 数	棺 構 造	埋葬数	人 骨	遺 物	参 考 文 献
鏡野町竹田	竹田 5 号	方	4	箱式棺 4	6	中央北棺、壯年女性・12~13才小兒 中央南棺、成人性別不明 東棺、熟年男性 南棺、成人2体性別不明	鉈・鎌・刀子	本報告
津山市沼	沼 6 号	方	2	箱式棺・粘土櫛	3+	南石棺、熟年男性・成人性別不明	剣・鉈	注 4
〃 総社	下道山南	方	2	箱式棺 2	2+	南棺、30~40男性・30才前後女性	ハニワ・紡錘車	注 5・13
柵原町飯岡下	飯岡 17 号	円	1	箱式棺	2	老年男女	なし	注 16
岡山市浦間	浦間北山南	円	4	箱式棺 4	5+	A石棺、成人男女 B・C・D棺不明	不明	注 17
邑久町笠加	我城山 2 号	円	1	箱式棺	2	成人女性・小兒男性	土師器壺	注 20
山陽町斗有	安ヶ屹	円	1	箱式棺	1	老年女性	土師器	注 22
〃 〃	唐臼山	円	1	箱式棺	2	人骨2体 人骨鑑定中 対向位埋葬	土師器	注 22
赤坂町西軽部	西軽部 1 号	円	3	箱式棺 3	6	西棺、成人男女・小兒 東棺、成人男女 中棺、不明	剣・刀・鎌・玉・土器	注 18
瀬戸町南方	片山 1 号	円	1	箱式棺	1	成人女性		注 23
御津町伊田	岩井山 4 号	円	2	箱式棺 2	2+	A石棺、熟年後半女性 B棺、不明	直刀・鉈・鎌	注 24
〃 〃	岩井山 6 号	方	1	箱式棺	1+	壯年女性	なし	注 24
〃 〃	岩井山 7 号	方	4	箱式棺・石蓋土壙 3	4+	D石蓋土壙、11~14才小兒 A・B・C棺、不明	土師器	注 24
〃 〃	岩井山 8 号	方	2	箱式棺・石蓋土壙	2+	箱式棺、壯年男性	土師器	注 24
総社市上林	江崎	円	1	箱式棺	2	老年男性・老年女性	剣・勾玉 3・鍬先	注 19
鴨方町宇月原	宇月原	円	1	箱式棺	2	熟年男性 性別不明	剣・鉈・鎌	注 19
笠岡市茂平	茂原八幡	円	2	箱式棺	2	A棺、成人男性 B棺、熟年男性		注 19
井原市下出部	岩崎山 4 号	円	1	小豎穴石室	2	老年男性 熟年男性	刀子・鎌	注 19
津山市皿	門ノ山 1 号	方	3	箱式棺 3	4	B棺、枕石 2 対 人骨遺存せず	葺石・土師器	注 3
〃 林田	兼田丸山	円	2	箱式棺 2	3+	人骨行方不明 A棺 2 体	鏡・土師器壺	注 25
〃 総社	上妙谷 1 号	円	3	小豎穴石室 3	3+	人骨破棄後調査	葺石・土師器	注 26
〃 河辺	隠里 1 号	円	1	箱式棺	3	人骨 3 体 未鑑定	滑石勾玉 3・刀子	注 27
岡山市高松	観音山 16 号	円	2	箱式棺 2	3	A棺 2 体盜掘 人骨破棄後調査	鏡・勾玉	注 28
山陽町中島	中島 1 号	円	1	箱式棺	2	壯年男性 壮年女性		注 29
総社市三輪	殿山 9 号	方	2	箱式木棺・石棺	2	2号石棺壮年男性	剣・刀・鎌	注 30

人骨での性別区分では、男・女が相なかばしている（別表参照）。このことは前期小形古墳に埋葬される男と女の比率はさして変らず、すでに記したように副葬品の格差が存在していないことから、前期小形墳を作る階層においては男女の格差が未だ生じていないことを物語るのではなかろうか。古墳時代前期に女性首長が少なからず存在するが⁽²¹⁾、首長階層に於いては男性首長の卓越が広汎に進行していることと好対称をなしている。また後期群集墳において、多くの場合最初の棺に置かれた男性が、他の男性・女性より副葬品・棺構造で卓越することとも異ったあり方であることを示すのではなかろうか。

古墳時代前半期には首長墳が顕著であるが、一方で政治的地域集団を構成する世帯共同体を基盤として前期小形古墳が、広汎に形成されたこと。その前期小形古墳の実態を棺比較などで行うとき、この階層では長權が未発達（世帯共同体の長の成員からの卓越は必ずしも進行していない）であり、男女の性別による社会的地位の格差を持たない傾向を示すといえよう。又それは古墳時代前期の社会では、政治的地域集団（部族）の首長と首長親族の卓越のみが顕著に進行したという特質をもつことを示すといえる。

以上棺配置と合葬の特定の問題をとりあげただけであるが、各地において前期小形古墳の存在とその実態解明が、古墳時代研究全体の中で重要な課題であることを示唆した。

4. 墳丘と葺石

竹田5号墳は長辺17mの方墳で墳斜面中復（墳丘盛土下面）に鉢巻状にめぐる葺石があり、竹田9号は墳端部にのみ葺石をもつものであった。

美作の前期小墳では方墳・葺石例が多く、それらが4—5世紀のものであることはすでに指摘されている。⁽³¹⁾しかし、発掘調査資料は少なく検討資料は限られる。

不定形方墳の津山市門ノ山1号では、墳裾部にのみ葺石をもつ例であり⁽³²⁾、津山市沼6号墳では墳裾部と墳丘盛土下面に鉢巻状葺石がめぐっていた。⁽³³⁾竹田5号例又は門ノ山1号例に類似するものに美作町中山又ヶ池1・2号墳があるが小方墳である。⁽³⁴⁾これらは墳域を画するか、盛土面下面レベルにあって盛土保護の役割りを果し、墳丘斜面全体をおおうものでなくまた厚く葺くものでもない共通点がある。

津山市下道山南古墳・津山市河面丸山1号墳では、墳丘斜面全面に葺石がある。⁽³⁵⁾前者は、短甲を含む埴輪と紡錘車形滑石製品をもち、後者は1辺20mをこし鏡出土の伝えがあるもので、前期小墳の中で有力なものである。全面葺石と鉢巻状など部分葺石の差は、全面葺石が省略されて部分葺石となったから前者が古く後者が新しいという見解は成立しない。鉢巻状葺石の竹田5号が4世紀代であり、下道山南古墳は5世紀中葉のものであるからである。5世紀代の沼6号墳例もあるから、全面葺石は前期小墳の中でより有力なものに、部分葺石はより小形のも

のに用いられたとの想定がより妥当であろう。

葺石石材については、竹田5号例では根石に河石が用いられ、沼6号も河石であり、下道山南では岩盤割石を多用し一部河石を使用するから、石材を容易に得られるものを用いたのであって時期差とし難い。

地山に一部盛土して墳丘を作る場合に、この部に葺石を用いることは、前期小墳の特徴の一つと言つてよいが、方墳に限る手法ではあるまい。

5. 棺配置と棺構造

竹田5号墳4、6号墳7号墳各1の箱形組合石棺が、9号墳には木棺粘土床2が見出された。このうち、規模の小さい6・7号墳ではほぼ中央に石棺が作られ、9号墳では墳丘上半を欠くが推定墳丘中央や、北寄りに北棺、南寄りに南棺が配置されていた。

5号墳では、墳頂平坦部南北主軸線にほぼ平行してその南北に中央北・中央南棺が並び、これにほぼ平行して、墳頂南端部に南棺が作られ、これらと主軸をほぼ直交させて墳頂平坦部東縁に東棺が作られた。墳頂平坦部中央に2棺、縁辺部に2棺が構築された。

この棺配置は2つの問題を含む、1つは中央2棺と墳頂端2棺の関係であり、2つは棺中央に空白を作り諸棺があるという中央棺を持たないこともつ意味である。

4石棺ともに共通するのは、箱式組合石棺であることの他に石材間のすき間・接合部と蓋石上を粘土で密封することである。

細部は別として、次の3点で4棺に差異がある。棺規模ではA級中央南・中央北棺、B級東棺、C級南棺の差がある。棺底に平石を敷くかどうかでは中央南・中央北・南棺にあり、東棺にない。粘土の被覆では中央北・中央南両棺では粘土の総量が多く蓋石上面の粘土も厚く、質も粘性の強いものを使い、東・南棺では粘土量も少なく粘性も劣る。棺材を別にして、総体として墳頂平坦部中央の2棺がや、すぐれ、墳頂縁から墳斜面にかかる位置の2棺がや、劣るといえる。

しかし長大な棺を用いること、3室構造の棺とか竪穴式石室などの質的な差でない。

棺配置において中央2棺はいずれも墳頂平坦部に位置しながら、墳中央からはずれている。このあり方は、首長墳において主丘中央に複数棺ある場合、月の輪古墳や金蔵山古墳のように中央棺とや、偏って平行する棺があるというあり方を示すことと、異った配置の仕方である。^(36.37)

このことは誤認や偶然の産物であろうか。美作地域の前期小墳での棺配置を検討してみよう。3棺例では、津山市門ノ山1号墳・津山市上妙谷古墳の各棺は「コ」の字状配置を示し、墳頂平坦部中央に棺はない。

2棺例には津山市沼6号・津山市下道山南・兼田丸山などがあるが、いずれも平行する両棺

の中間を古墳の主軸線が通り中央棺が存在しない。即ち、中央棺をもたないのが美作の前期小墳での普遍的なあり方といえる。

では、この現象をどうした社会的関係の反映を見るかが課題となる。首長墳の場合、部族首長権が強化されており、部族首長は部族を構成する成員から卓越するだけでなく、部族首長自身の親族からも卓越していた。これに対して、部族を構成する氏族の場合は、氏族の長^{オサ}がその成員や親族から卓越した存在となり得ていなかったことを示す。

竹田5号墳の作られた時期前後のこの地域の部族首長墳である赤峰古墳では、後円部中央に長大な割竹形木棺を作り青蓋作盤竜鏡など豊かな遺物が副葬され、前方部に貧弱な石棺の埋葬があることと、⁽³⁸⁾好対照をなしている。従って、竹田5号墳棺配置の示すものは、氏族において長権の未展開を示す。長権は連合体首長権・部族首長権がさきに強化され、氏族長権は遅れ弱体のものといえよう。

曲刃鎌をもつことで5世紀後半とした竹田9号では、墳頂中央近くの北棺が南に偏った南棺を構造・規模・副葬品の各面で圧倒することは、のちには氏族長権が強化されたことを示すといえよう。同時期の部族首長墳である土居妙見山又は冲茶臼山古墳に葬られた部族首長のもとにあり乍ら、竹田9号中央（北棺）に葬られた人物は氏族長権を強め、その証しとして彷彿内行花文鏡を所持していたのではなかろうか。

各 棺 比 較 表			竹田5号墳箱式組合石棺							
棺名	主軸	位置	棺内法長 cm	幅	深さ	棺底	主要石材	埋葬	副葬品	粘土被覆
中央北棺	東西	墳頂中央	193	43~40	25	平石	流紋岩質 凝灰岩	2	鎌1、刀子1 小刀1	広く厚い
中央南棺	東西	〃	193	44~41	35	平石	〃	1	ナシ	最も厚い
東棺	南北	墳頂端	185	38~37	30		河石	1	鉈1	若干
南棺	東西	〃	163	40~25	21	平石	玄武岩	2	刀子1	若干

6. 石 棺 石 材

竹田5号墳中央北棺・中央南棺の棺材に流紋岩質凝灰岩が用いられ、5号墳東棺と6号墳石棺には河石が使用され、5号墳南棺と7号石棺には玄武岩割石が使用されていることを事実報告の中で示した。そして、河石は古墳眼下の香々美川・山人川の河床で見られ容易に採集しうるものであり、玄武岩の石材は竹田丘陵北隣の男山・女山附近で容易に得られることも指摘した。

流紋岩質凝灰岩は、鏡野町域ではなく、津山市内ではあるが、吉井川南岸の限られた地域に

産する石材であり、本墳の位置から、別の政治的地域集団を挟んで、直線距離10kmの地に産する。このことは重要である。

それは、竹田5号墳墳頂平坦部の2棺の石材をなしており、同時に墳頂平坦部縁に位置する2棺より棺構造が類似しているとはいえる規模がや、大きい特徴をもつからである。さらに、美作の前期小墳のうちでや、有力なものの棺材にこの石材が用いられているからである。この石材は、津山市南横山の石山に露頭と石切場があり、国指定史跡津山城跡の石垣にこの石材が用いられ、通称石山石と呼ばれているものである。

この石材を石棺に使用されたものは、原報告に「流紋岩」とされているものを含めて数多く知られている。このうち、津山市八出覗山石棺のように、⁽³⁹⁾ 産地に近接するものを除いて検討しよう。

この石材を用いた石棺に、鏡野町伊勢領大塚（径35m 鏡出土）中央棺・津山市沼6号墳南棺⁽⁴⁰⁾ と沼3号墳・津山市押入飯綱西1号石棺⁽⁴¹⁾・津山市総社下道山南南棺と北棺例・津山市兼田丸山古墳東・西棺がある。⁽⁴²⁾ 津山市野村大塚(方墳)などもその可能性がある。これらは、いずれも津山盆地北側に立地し、産地とは吉井川をはさんで数kmないし10km離れたもので、中形古墳と前期小形墳のうち径10mをこえるもので、墳丘を失っていた沼3号墳・兼田丸山を除いて、葺石または鉢巻状葺石をもつものであり、少量とはいえる副葬品をもつ類である。この中に伊勢領大塚・兼田丸山のように鏡をもつものや、下道山南例のように滑石製紡錘車形石製品をもつものが含まれている。これらのこととは、被葬者の属する部族をこえて棺材の入手または棺製作という関係が存在したことを示し、前期小墳の性格の一侧面を物語り、また前期小墳での類型区分が必要なことを示している。

津山盆地で見られる石山石（流紋岩質凝灰岩）使用石棺の分布に相似た方が知られている。それは、兵庫県北部円山川下流域での「陰石」と呼ばれる石棺材の分布である。⁽⁴³⁾ 上陰・高屋では板状節理を示す石材が産出し、豊岡市・城崎郡城崎町・出石郡出石町の諸古墳に用いられている。この中には、銅鏡や針状鉄器を出土した半坂峠古墳など古式小墳が含まれており、石山石の分布に近い性質をもつことが知られる。

津山市山西正仙塚にある竹塚古墳（全長53m）の長持形石棺材は、滝山石によるものとされている。⁽⁴⁴⁾ しかし、滝山石もまた流紋岩質凝灰岩であり、対比資料から石山石が脱落している。従って山西竹塚古墳長持形石棺材も同じ津山盆地内の石山石を棺材に使用した可能性について否定し難いといえよう。なお原報告で「凝灰岩質」と棺材について記述された兼田丸山古墳と、飯綱西古墳を含む地域の首長墳が山西竹塚古墳である。

竹田5号墳に埋葬された人物のうち最有力者は石山石による石棺に、他の成員は付近で容易に得られる石材による石棺に埋葬され、土居赤嶺・竹田妙見山らの首長墳に埋葬された部族首長に統括される氏族の長または有力者は石山石を使用したと推定してよい。

7. 土器枕と石枕

石棺内に遺体を埋葬する際に頭位を固定させるための施設として土器枕と石枕がある。

竹田5号墳中央北棺東枕人骨には鼓形器台口縁部の一部を割って枕に転用したものが使用されていた。類例には、邑久町八木山方墳例と、⁽⁴⁵⁾ 津山市兼田丸山古墳例がある。⁽⁴⁶⁾ 兼田丸山古墳東石棺では壺形土器の下半部を破碎して残りを枕に転用していた。土器の特徴は酒津式の最末期か直後の時期であり、美作で土器転用枕が4世紀代に使用されていたことはたしかである。

石枕は挙大ないし稍大きい丸味のある石2個を1対としたものである。竹田5号中央北棺西枕・中央南棺・東棺・竹田6号墳・7号墳に使用されている。この葬法は美作でも石棺内埋葬での一般的なやり方であり、飯岡下17号・沼6号南棺・下道山南古墳南棺では対向位で2対の石があり、各々の人骨頭部がそこに置かれていた。津山市門ノ山1号墳B棺のように人骨は遺存しないが、2対の石枕の存在から2体埋葬を推定されたものもある。

竹田5号墳南棺では三個の石が東壁に置かれ、東頭人骨2体の頭位固定に用いられている。これは2個一対の石枕の変形である。

本村豪章は、土器転用枕の竹田5号中央北棺・兼田丸山東棺例とともに4世紀代であり、石枕の沼6号南棺・隠里1号例が5世紀代であることから、土器転用枕が石枕に先行する可能性を提起した。しかし、竹田5号中央北棺の西枕人物や中央南棺でも石枕が使用されているから、⁽⁴⁷⁾ はじめ土器転用枕と石枕が共存し、のちには石枕のみが用いられたとしてよい。

この傾向は、備前の八木山方墳や備中北部の新見市横見2号墓で枕に転用された器台が検出され、⁽⁴⁸⁾ 因幡・但馬でも相似した傾向が指摘されているので、美作に限らないことといえよう。

8. 副葬品と人骨

a. 副葬品 竹田5号墳での副葬品は、中央北棺から鎌1・削小刀1・刀子1、東棺から鉈1、南棺から刀子1のみで中央南棺では副葬品皆無であった。副葬品の特徴の第一は全体として極めて貧弱であること、第二は貧弱な中で成人女性と子が葬られている中央北棺が他の3棺より優位性を示すことである。

美作の前期小墳の中で、副葬品を持たないことが確実なのは、津山市門ノ山1号・柵原町飯岡17号・津山市八出覗山・竹田6号・竹田7号各古墳である。いずれも辺又は径10m以下の小墳であり、墳丘を認め難いものもある。これらをA類としておこう。

副葬品4種以下数点程度の副葬品しか見られないものに美作町池南1号(剣1・平根鉄鎌2・⁽⁴⁹⁾ 鉄斧1・直刀鎌1)・沼6号(南棺・北棺各鉄剣1)・津山市隠里1号(滑石勾玉3・刀子1)

・竹田 5 号墳らがそうで 1 辺 17m 以下の方墳や円墳であり、B 類とする。

副葬品の中に宝器を含む類で津山市兼田丸山古墳（変形四獸鏡 1 ・ 刀 1 ）・下道山南古墳（2 号棺紡錘形石製品）・や、時期の下る竹田 9 号墳（仿製內行花文鏡 1 ・ 管玉 2 ・ 鉄斧 1 ・ 鉄鎌 1 ・ 剣 1 ）らであり、副葬品の種類・量共に少ないが、下賜品を含む点に特徴がある。但し仿製鏡も兼田丸山 81mm ・ 竹田 9 号 74mm と小形である。C 類とする。

美作の前期小墳には以上の 3 類型がある。

山間部の美作は、全長 100m に達する首長墳のない地域であり、前期小墳の副葬品もまた、吉備中枢部さらに大和などの前期小墳に比して貧弱である。美作の首長墳と美作の前期小墳を比較すると、副葬品の種類・量ともに格段の差を示す。竹田 5 号墳と同時期のこの地域の部族首長墳である赤嶺古墳は青蓋作盤竜鏡以下の豊富な遺物があり、竹田妙見山古墳も径 20cm の內行花文鏡・ガラス小玉等の副葬品をもつこととの差は甚大である。

しかし、美作の前期小墳の中に下賜品である鏡をもつことは、重要である。即ち、擬制的同祖同族関係の末端に連なる権威の証しとして小鏡の配布を受けたのである。

竹田 5 号墳各棺の中で、成人女性を埋葬した北棺の副葬品が優位を示すことは何を意味するであろうか。少なくとも、香々美川・山人川流域の部族を構成する一氏族において、女性が最も多い副葬品を持ち得るような社会的地位にあったといえよう。棺配置について考察したように、氏族での長權は強固でなく成員に卓越した存在になり得ていない段階での、氏族の社会的地位の一端を物語るといわねばならない。

b. 人骨 竹田 5 号墳では 4 棺に 6 体が埋葬されていた。中央北棺・南棺では同一棺複数埋葬であったが、南棺例は石材接合部から侵入した木の根・ねずみの巣によって原位置をそぞろに腐食が甚しいため考察の対象となしがたい。そこで中央北棺で同棺複数埋葬について検討しよう。第一の課題は、箱式組合石棺の狭い空間に複数の人体を同時に埋葬したか否か、異時とすればどの程度の期間差があるかである。

竹田 5 号墳中央北棺例は、頭位を逆にした対向位埋葬であるが、東枕で棺北側に下半身を偏せて仰臥伸展葬した遺体下肢骨の上に、西枕で棺南側に偏せた仰臥伸展葬遺体の肩部骨が重なり、西枕遺体下肢骨の上に東枕遺体の胸骨が重なっていた。

のことから頭位を土器枕と石枕に置き、伸展葬にし、お互の足を大切な肩・胸の下に入れて埋葬を行ったこと、即ち同時埋葬を想定したのである。

両遺体ともに人骨が乱れていないこと、両遺体の身長よりもほぼ頭長分だけ棺内法が長いことも同時埋葬の推定を補強する要素である。竹田 5 号中央北棺の場合は同時埋葬であったが、美作の他の前期小墳の場合は、どうであろうか。

沼 6 号南棺例では、西枕熟年性別不明人骨下肢骨の上に東枕成人男性人骨の肩部がごく一部重なり、人骨は完存した。東枕人骨下肢骨は西枕人骨と重ならず北寄りに置かれていた。先葬の

西枕遺体埋葬後若干の時間が経過したことを示すが、人骨が乱れる程の差ではないことを示している。⁽³³⁾

下道山南古墳2号棺例では、頭位を逆にして2体が埋葬されていたが両遺体人骨は近接しながら重なり合っていない。⁽³⁵⁾ 1号人骨30~40才男性は正常な仰臥伸展位であり、2号人骨30才前後女性は横臥伸展位であり、2体の埋葬は同時または、どちらか一方が追葬されたとしても、その時期はさきに葬られた遺体の軟部が腐食して白骨化する前であったと池田次郎先生が記している。⁽⁵⁰⁾

飯岡下17号墳石棺の場合、頭位を逆にした両遺体ともに骨の遺存が良好で、下道山例に近いといえよう。美作では同棺複数埋葬例は多いが、人骨の原位置攪乱後のものが多く考察資料としては不充分である。

4例の示す所は、同時埋葬又は、先葬遺体の軟骨腐食以前という短い期間での同棺複数埋葬を示すことになる。このことは同棺埋葬の複数の遺体について、特定時期における人と人の関係を論じうる資料となりうることを示している。

竹田5号中央北棺に埋葬された人物は、壮年女性と12~13才の小児であった。即ち成人女性と未成年という組合せである。

成人と未成人（6~12才）が同棺埋葬された例を、辻村純代は東中国地方箱式棺例として4例をあげている。⁽⁵¹⁾ 本例のほかに、久米町三成4号墳⁽⁵²⁾ 2号棺・赤坂町西軽部3号墳3号棺・鳥取県国府町糸谷3号墳1号棺例である。これらは、いずれも成人女性と未成人という組合せである。邑久町我城山2号墳は小豎穴式石室をもつ前期小墳であるが成人女性と小児である。⁽⁵³⁾ 未成人が成人と同棺埋葬の場合、男性成人と未成人例は認められず女性成人と未成人という組合せのみが認められることが重要である。

即ち、子は母と同棺埋葬されることが普遍的な社会通念として存在したことを示している。このことは、子は母に属する社会—母系的紐帶の強い社会であったことを示すのではなかろうか。⁽⁵⁴⁾

9. 前期小形古墳の性格と築造の契機

竹田5号墳調査によって提起された若干の問題について、美作の前期小墳全体の中で検討を加えた。その大要をまとめた。

1. 前期小墳は墳丘規模が小であるだけでなく盛土部が少なく、鉢巻状葺石に代表されるように、外表施設も簡略化されたものである。
2. 棺構造は、組合箱式石棺・木棺直葬・内法長2m程度の小豎穴式石室・木棺粘土固定などがあるが、長大な割竹形木棺を用い粘土櫛・豎穴式石室をもつものは見られず、棺規模も小さい。

3. 棺配置において、中央棺を持たず、同一墳の諸棺で棺構造の質的差異がなく、若干の規模差をもつのみである。
4. 副葬品は首長墳に比して、種類・量共に極めて貧弱であり、副葬品皆無のもの・下賜品若干を含むものなど一様ではないが基本的特徴は異なる。
5. 被葬者のうち、男性が女性に比べて特別に厚く葬られることはなく格差を持たない。未成人は母と共に葬られることを示した。
6. 石棺材・土器枕と石枕・同棺複数埋葬の期間差については検討したから重複をさける。

弥生墓・初期群集墳との差異 一墳多埋葬の点で弥生墓とも共通するが、前期首長墳も多埋葬であること、前期小墳にも鏡など下賜品を含むこと、首長墳の墳斜面・墳端埋葬に前期小墳と同様の棺構造をもつものがあることによって、⁽⁵⁵⁾ 弥生墓との共通性の強調は一面的な捉え方であることを示している。⁽⁵⁶⁾ 前期小墳は氏族を単位としつつも部族首長を頭とする部族を構成する氏族の長及び成員のための古墳と想定しうる。

初期群集墳は、須恵器出現以降・横穴式石室をもつ後期群小墳出現以前という特徴をもつが、時期差だけでなく、次の点で前期小墳と異なる。第1は、数基又は数十基の群集全体が限られた期間の所産である特徴をもつ。⁽⁵⁷⁾ 津山市長畠山群では1期後半・六ツ塚群では2期初頭の須恵器を伴うように、同時期又は2世代程度の特定時期の群集であり、前期小墳の竹田古墳群や殿山古墳群のように、(殿山古墳群では弥生末期の殿山21号墳から始まり、殿山11号・10号・9号・8号の順に、前期小形古墳が世代毎に作られている)数世代に亘るあり方と異なっている。第二は、群中に墳丘規模の大きいものを含み、その中心的な棺の構造・規模、副葬品の種類と量は、群中の他の小墳や他の棺に比べて格差をもつ初期群集墳のあり方は前期小墳のあり方と異なる。これらのこととは、氏族内部に階層分化が進んだ段階で、限られた期間内に集中して作られる初期群集墳ともその性格を異にするといえよう。

前期小墳の性格と築造の契機 竹田5号・兼田丸山のような確実に4世紀代から始まる前期小墳の基本的性格は次のようにいえる。

1. 前期首長墳に併行して作られた、墳丘・埋葬施設・遺物ともに貧弱な古墳であり、部族首長のもとにあって、部族を構成する単位氏族の長および成員のための古墳である。
2. 氏族内部では、氏族の長権が未発達で男・女の格差も顕著に現われない段階である。

前期古墳の時期は、部族首長の卓越、ついで首長親族の部族内での優位のもとに、それらの統括のもとにある氏族では長権の展開が遅れて進行したことを見ている。

3. 氏族の長及びこれに準じた成員による前期小墳の築造は、部族首長の容認のもとに首長墳にならって築造したものであるが、部族首長自体が大和連合中枢の最高首長の祖靈につながる擬制的同祖同族関係の設定の中で古墳を作り得たのであり、こうした重層的な関係設定の中で小墳は成立し得たのであろう。⁽⁵⁸⁾

4. 美作での前期小墳で見た基本的性格とあり方は、大筋として汎日本列島的なものといえようが、山間部地域である美作と異なって、近畿中枢部や吉備中枢部では有力氏族がその内部で一層長権を強めたあり方が広汎な展開を見せることは美作での三類型以外の前期小墳の存在によって容易に想定しうることである。

注

- (1) 近藤義郎「地域集団としての月の輪地域の成立と發展」『月の輪古墳』1960年
- (2) 平井勝「殿山遺跡・殿山古墳群」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』47 1982年
- (3) 近藤義郎・中島寿雄「門の山第1号墳発掘調査報告」『佐良山古墳群の研究』 1952年
- (4) 今井堯・渡辺健治・神原英朗・河本清「美作津山市沼6号墳調査報告」『古代吉備』 6 1969年
- (5) 栗野克巳・岡本寛久「下道山遺跡・下道山南古墳」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』17 1977年
- (6) 註1)書第5章内部主体
- (7) 佐々木謙・大村雅夫『馬山古墳群』1962年
- (8) 註1)書114頁
- (9) 渡辺健治・今井堯・土居徹調査 本報告未刊
- (10) 近藤義郎・神原英朗・岡本明郎「四塚13号墳調査報告」『蒜山原…その考古学的調査』 1953年
- (11) 今井堯ほか「六ツ塚古墳群調査略報」『津山市文化財調査略報』 3 1962年
- (12) 本格的論考は別稿にゆずる。
- (13) 池田次郎「下道山南古墳出土の人骨について」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』17 1977年
- (14) 池田次郎「竹田5号墳出土人骨について」本報告書第8章
沼6号墳については島五郎氏の鑑定による。
- (15) 池田次郎・山内純代「広島県の古墳出土人骨について」『広島大学文学部帝釈峠遺跡群発掘調査室年報』 V
1982年
- (16) 重歳政雄『飯岡下合葬墳について』1956年
近藤義郎「岡山県勝田郡飯岡下合葬墳」『日本考古学年報』 6 1953年
- (17) 木村幹夫「古墳時代」『上道町史』1973年
- (18) 清野謙次『日本原人の研究』1924年
- (19) 間壁忠彦「岡山県下の人骨を出土した小古墳六例」『倉敷考古館研究集報』 4号 1968年
- (20) 近藤義郎「岡山県邑久郡我城山古墳発掘調査報告」『瀬戸内海研究』 3 1952年
- (21) 今井堯「古墳時代前期における女性の地位」『歴史評論』383号 1982年
- (22) 近藤義郎『備前国赤磐郡西山村所在の二・三の古墳について』1954年
- (23) 原典に当れず。岡山県教育委員会『岡山県遺跡地図』第5分冊 1978年
- (24) 神原英朗『岩井山古墳群』1976年
- (25) 本村豪章「美作津山市兼田丸山古墳出土遺物の研究」『MUSEUM』 285号 1974年
- (26) 植月壯介・今井堯調査 概報のみ
- (27) 渡辺健治「美作隱里箱式棺調査報告」『古代吉備』 2集 1958年
- (28) 今井堯・池上憲明「備中国高松町觀音山12号墳」『私たちの考古学』16号 1958年

- (29) 校正中に次の力作に接した。
- 辻村純代「東中国地方における箱式石棺の同棺複数埋葬」『季刊人類学』14巻2号 1982年
- (30) 川中健二「殿山古墳群出土人骨について」注2 前掲書 1982年
- (31) 土居徹・河本清「美作の方墳」『古代吉備』7集 1971年
- (32) 近藤義郎・中島寿雄「門の山第1号墳発掘調査報告」「佐良山古墳群の研究」1952年
- (33) 今井堯・神原英朗・渡辺健治・河本清「津山市沼6号墳調査報告」「古代吉備」6集 1969年
- (34) 今井堯「原始から古代へ」「美作町誌編纂中間報告」1970年
- (35) 栗野克巳・岡本寛久「下道山遺跡・下道山南古墳」「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告」17 1977年
- (36) 近藤義郎「内部主体」「月の輪古墳」1960年
- (37) 西谷真治・鎌木義昌「金藏山古墳」1959年
- (38) 近藤義郎「赤峪古墳の発掘」「考古学研究」27号 1960年
- (39) 漆哲夫「八出覗山遺跡発掘調査報告」1977年
- (40) 今井堯・近藤義郎・村上幸雄「美作国鏡野町伊勢領大塚小塚について」「鏡野町綜合調査報告」1958年
- (41) 橋本惣司・柳瀬昭彦「押入飯綱神社古墳群」「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告書」4集 1974年
- (42) 本村豪章「美作津山市兼田丸山古墳出土遺物の研究」「MUSEUM」285号 1974年
- (43) 檜本誠一・瀬戸谷皓「日本の古代遺跡2 兵庫北部」1982年
- (44) 間壁忠彦・間壁葭子「石棺石材の同定と岡山県の石棺をめぐる問題」「倉敷考古館研究集報」9 1974年
- (45) 近藤義郎氏の教示による。
- (46) 下澤公明・友成誠司「横見古墳群」「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告書」15 1977年
- (47) 瀬戸谷皓「再び土器転用枕について」「よみがえる古代の但馬」1981年
- (48) 今井堯「美作における鉄製農工具の一資料」「古代吉備」2集 1958年
- (49) 渡辺健治「美作隱里箱式石棺調査報告」「古代吉備」2集 1958年
- (50) 池田次郎「下道山南古墳出土の人骨について」「下道山遺跡」1978年
- (51) 辻村純代「東中国地方における箱式石棺の同棺複数埋葬」「季刊人類学」14巻2号 1982年 なお他に12—20才若年男性と熟年女性例3をあげている。
- (52) 河本清「久米三成4号墳」「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告」30 1979年
- (53) 中島寿雄・近藤義郎「岡山県邑久郡笠加村所在我城山古墳発掘調査報告」「瀬戸内海研究」3 1952年
- (54) 今井堯「古墳時代前期における女性の地位」「歴史評論」1982年3月号
- (55) 近藤義郎「墳丘併葬」「前方後円墳の時代」1983年
- (56) 今井堯「墳丘斜面・墳端部・墳外埋葬について」「文化財を守るために」21 1981年
- (57) 今井堯・近藤義郎「群集墳の盛行」「古代の日本」4中国・四国 1970年
- (58) 平井勝「殿山遺跡・殿山古墳群」「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告」47 1982年
- (59) 近藤義郎「前方後円墳の時代」1983年

付 四隅突出型弥生墳丘墓二題

近藤義郎

1

本文での検討の結果が示すように、竹田8号墓が隅突出型すなわち四隅突出型弥生墳丘墓の一隅を残すものであることは、明らかである。もともと四隅突出型弥生墳丘墓は、山陰地方の弥生時代後期を特色づける墳墓型式とみられてきたが、最近になって中国背梁山脈の南側において、その明確な例が知られるようになってきた。庄原市田尻山1号、三次市矢谷、同じく三次市宗祐池西第1号がそれである。いずれも、備後北部に位置し、江の川沿いなどいくつかのルートで山陰わけても出雲に通じる地域であるため、山陰との関連の深さを単に示すものとして扱われがちであった。⁽¹⁾しかしここに述べようとする竹田8号弥生墳丘墓は、美作中枢部にほど近い、というよりその一部を構成する岡山県苫田郡鏡野町の一角に位置している。したがつてこの墳丘墓発見のもつ意義は、美作の歴史にとっても、きわめて大きいといわなければならない。

竹田8号弥生墳丘墓は、全体についての正確な規模形状は不明であるが、その一辺は14m、高さ約1.5mあり、平面形は方または長方形、残存する突出部はきわめて小さく、1mをややこえるにすぎない。また、島根県瑞穂町順庵原1号弥生墳丘墓の「周溝西南端列石」にいくぶん似た配石部分もみられる。僅か半分にも足りない墳丘残存部分に、14の土壙墓と小形の土器棺葬3、4がみられた。後者に使用された土器は、弥生時代後期初頭に属するもので、一部は鬼川市I式に併行するものと考えられる。多数の埋葬があるため、この時期は、本墳丘墓築造の時期を示すか、あるいは継続使用の一時点を示すかは明らかでないが、いずれにせよ、吉備の地域において特殊器台形土器・特殊壺形土器が出現する以前の築造であることにはまちがいない。

それに対し備後庄原市田尻山1号弥生墳丘墓は鬼川市IないしII式に相当する土器を出土し、上の竹田8号弥生墳丘墓とほぼ同時期ないし直後と推定される。墳丘は辺9.6×10.9mで低小、「各々辺は僅かながら弧状となり隅部が張り出す長方形を呈し」ている。墳丘の裾は「10~20cm大の板石状の角礫の広口面を外に向けて縦位あるいは横位に使用してほぼ間断なく配列させて石列帯」をなす。そのほか斜面に貼石が部分的に残存している。裾の石列の石が10~20cmの小形の石であるのに対し、斜面の貼石が20~70cmと大きいのは貼石と石列との間隔の広狭は別として順庵原1号墳のいわゆる「棒状列石」と斜面の貼石との関係に似ている。四隅の張り出しは、顯著でなく、よく保存されている東隅でみるときわめて微弱である。しかし東突出部上

面に三枚の石を、その平らたい部分を上にして配置している点は、鳥取県倉吉市阿弥大寺弥生墳丘墓群の三基や順庵原1号墳丘墓の類似した状態を想わせるものがある。

宗祐池西第1号
(3)
墳丘墓は、「東西約10m、南北約5mの小形の」長方形四隅突出型墳丘墓で、いま北側と東側に貼石を残している。四隅の突出部は微弱であり、先の田尻山1号墳丘墓にみた小礫からなる石列はみられない。突出部のうち、南東と北西部のものは、その上に三、四の平石状のものがみえ、田尻山との共通性を示している。貼石の大きさは長さにして、約20～約60cmである。墳丘はきわめて低平で、

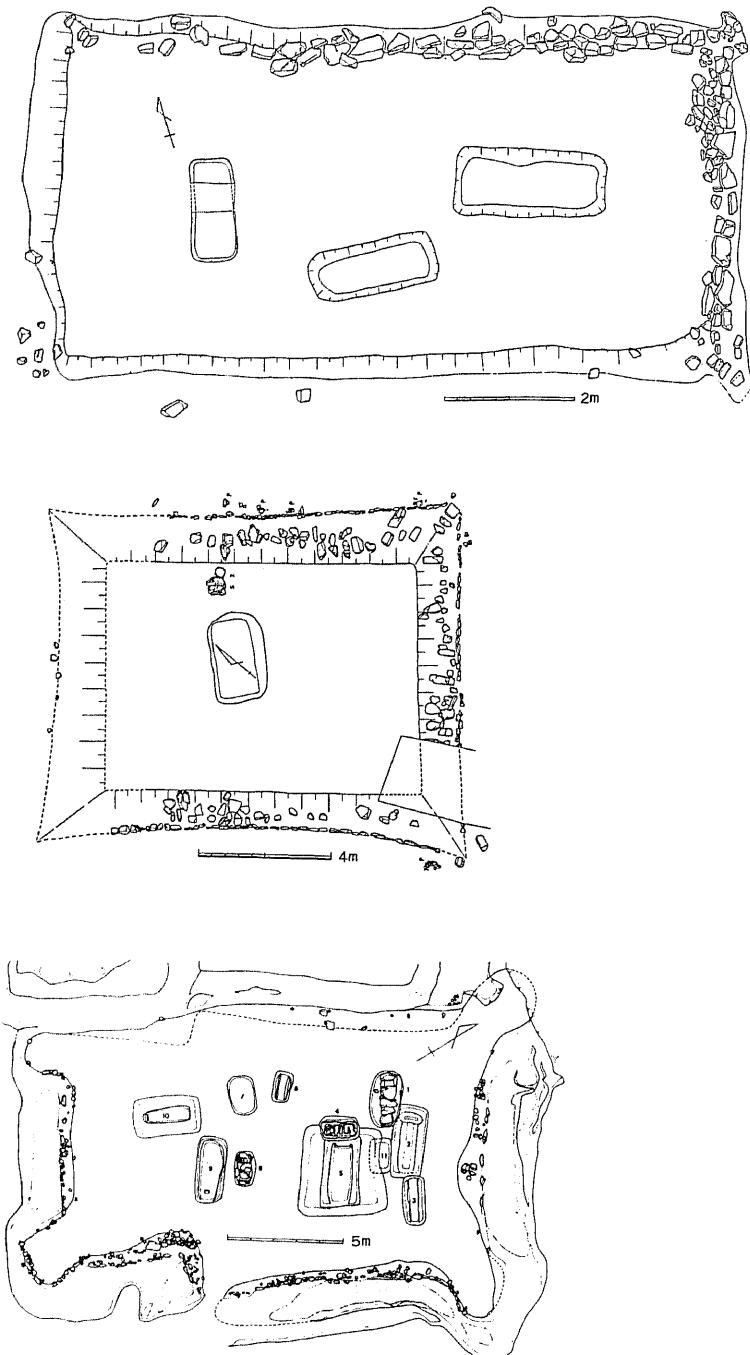


Fig. 37 備後発見の四隅突出型弥生墳丘墓

(上)宗祐池西1号墳丘墓(「宗祐池西遺跡現地説明会資料」1980年から)

(中)田尻山1号墳丘墓(向田裕始「田尻山古墳群」1978年から)

(下)矢谷墳丘墓(金井龜喜・小都隆編『松ヶ迫遺跡群発掘調査報告』1981年から)

土括墓三が発見されている。

周溝から、壺形および高坏形土器が発見されており、いずれも塩町式土器（三次地方弥生時代中期後葉）が出土している。

三次市矢谷墳丘墓は後にふれるようにやや後出であるため、ここでは除外するとして、上記三者に共通すところとして、①墳丘はいずれも低平で、②四隅が短小、③墳丘裾に溝状石列をもたない。の三点があげられる。これらの諸点は、仲仙寺墳丘墓群など四隅が発達し裾部に溝状石列構が形成されたものにくらべると、定型化以前、つまり、四隅突出墓の原初的形態とみることができ、その点、伴出土器の古さと矛盾しない。

これに対し、これまで山陰で四隅突出型弥生墳丘墓のうちでも古式と考えられているものに、
倉吉市阿弥大寺1・2・3号弥生墳丘墓、順庵原1号弥生墳丘墓がある。そのうち阿弥大寺1号墳丘墓の第3土壙墓に伴う土器は、九重遺跡3号土壙墓一括出土土器や米子市青木Ⅲ式、岡山でいうと鬼川市Ⅱ式に併行する（2、3号は直続してつくられているらしい）。また順庵原1号墳丘墓は、土器実測図が発表されていないが、報告者によると、「鍵尾Ⅰ式や的場式に相当するもの」と考えられているし、写真でみるとそのように思われる。したがって、「土器類については、まだ未整理のものが多く、ここで詳細にのべることができ難い」にしても、先の阿弥大寺1号よりもやや後出である可能性が強い。このほか松江市友田「貼石方形墓」といわれる四隅突出型墳丘墓がある。遺存する北辺で「約11mをはかり、周溝を設け、墳裾に貼石を施し、北西部の隅がやや突出する」という。但し、付近出土土器について「弥生時代後期後

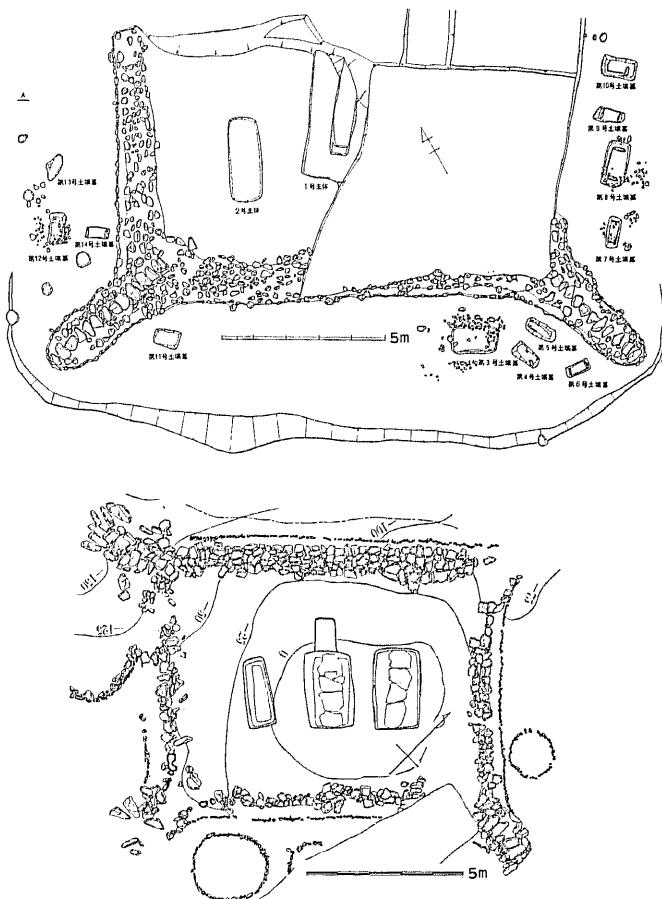


Fig. 38 (上)阿弥大寺1号弥生墳丘墓（真田広幸・森下哲哉『上米積遺跡発掘調査報告』Ⅱ 1980年から)
(下)順庵原1号弥生墳丘墓（門脇俊彦「順庵原一号墳について」1971年から)

半頃」「後期の後葉」「弥生時代の終末期」など一定していないが、同報告書の挿図134図の4の壺形土器は順庵原1号墳丘墓のものに似る。

こうみてくると、備後および美作の上記三基の四隅突出型弥生墳丘墓はいずれも、現在山陰で最古式と考えられる四隅突出型墳丘墓よりも古いことになる。単に墳丘をもつ、あるいは丘陵上を整形したものであれば、より遡って山陰にも備後にも存在する。たとえば、山陰では「中期中葉頃から後期前半頃にかけて連続継起的に築造された」と推定される松江市友田墳丘墓群⁽⁷⁾、また備後では中期中～後葉に形成されたと推定される世羅郡甲山町近重山墳墓⁽⁸⁾がある。しかし、明確な四隅突出型墳丘墓となると、現状においては、上記のように山陰ではなく、その南側の地に認められるのはどういうことであろうか。

2

この問題にどうかかわるかはいま解決困難であるが、四隅突出型墳丘墓をほうふつとさせる1例を播磨に、また多少とも可能性のある1例を美作津山市に指摘しよう。播磨の例は加西郡

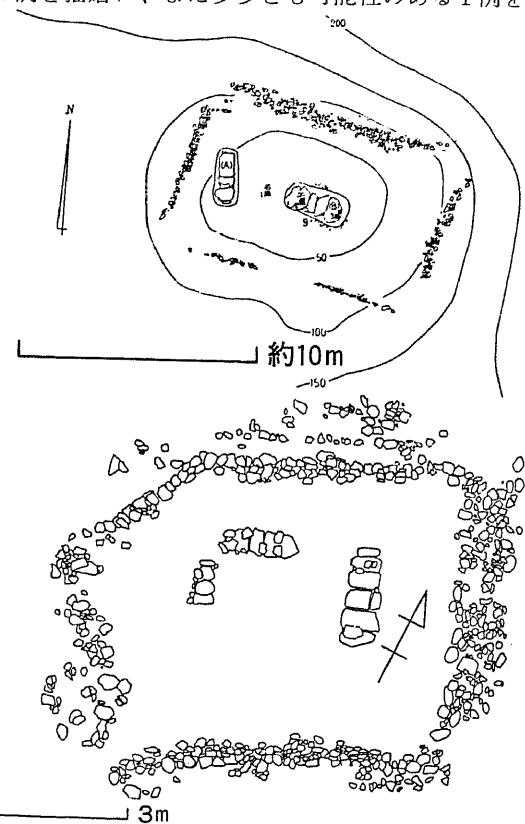


Fig. 39 (上)播磨周編寺山墳墓（赤松啓介「加西郡加西町周編寺山発掘概報」から）
(下)美作門の山1号墳墓（近藤義郎・中島寿雄「門の山第1号墳発掘調査報告」1952年から）

⁽⁹⁾ 加西町「周遍寺山第一号古墳」で、1957年、赤松啓介氏を指導者として発掘された。山頂に並ぶ3基のうちの東方の一基で、東北9.5m、南北6mほどの長方形をなす「石垣」をもつ。記述にはふれられていないが、図面をみると、それぞれの辺が反りをもち、各隅が突出することはまちがいない。それは先の庄原市田尻山1号四隅突出型墳丘墓の形状に似る。隅部はいずれも「石垣」を欠いているので、詳細は不明であるが、突出部はさほど長大とは思えない。墳丘は高さ1m前後である。内部主体は2つ発見され、墳長軸に平行して中心に位置を占めるものは、内法長1.7m、同幅34cm、同深さ24cmの組合せ箱式石棺で、棺底は下から粘土・朱・粘土・朱・バラスと重っていたという。遺体は成人男子2体、副葬品は刀子1本と管玉1個のみである。他の一棺

は長軸を南北にとる内法長1.58m、同幅30cm、同深さ20cmほどの組合せ箱式石棺で、若い女性人骨1体がみられたが、副葬品はない。また墳丘には、「何の装飾もなかったようで、埴輪その他の遺物を検出しなかった」という。年代について赤松氏は古墳時代「後期初頭」と推定されているが、実は年代を具体的に示すものはない。

また美作の1例は、1951年、筆者等によって発掘された津山市佐良山「門の山1号墳」で、⁽¹⁰⁾ 当時、「野球のベースを想像させる五角形」の古墳として報告されたものである。最大長約11m、短辺約8m、高1m未満で、人頭大ないしその二倍程の大きさの、河原石を主とした葺石が70cmから1.3mの「巾をもって、墳斜面に帯状にめぐらされていた。」内部主体は大小の組合せ箱式石棺3で、いずれにも副葬品は皆無であったが、墳中央の墳表近く、A石室の蓋石直下、A石室付近封土内、BおよびC石室内、西北隅の葺石上などから、土器小片が発見された。多くは小片で形態も推定できないが、1片（西北隅葺石上出土）は中央に焼成後とおもわれる穿孔をもつ径約6cm未満の平底片で、当時「むしろ弥生式土器に、普通見出される類に近い」と考えたものである。また他の1片（B石室付近出土）は長約6cmほどの破片で、当時気付かれなかつたが3cmの間に5本の凹線をもつ器台形と思われるもので、これまた中期弥生式土器片とみて差支えない。問題は、葺石であつて、その五つの隅のうち、1つに突出の傾向がみられることである。先の周編寺山のようには辺が湾曲していないので、確かなことは判らないが、実測図及び写真によってあらためて判断すると南西隅において突出の可能性が高い。それに対して北西隅は突出しないことがほぼ確かである。北東隅および北西隅も突出の可能性は少ない。したがつて、この「門の山1号墳」の南西隅に突出をみとめるしたら、一隅突出の五角形という前代未聞の形態となる。ありえないことではないが、やはり類例をまちたいので、ここではこれ以上ふれない。

さて、兵庫県加西町といえば、山陰はおろか、備後、美作からもかけはなれた播磨東部の地である。したがつてこれを四隅突出型弥生墳丘墓とみとめると、問題はますます複雑になろう。管玉や刀子から年代を確定することは現状ではほとんど絶望的であるし、四隅突出型の可能性はきわめて高いにせよなお、突出部分の「石垣」が全く残存していないので、やはり、これも、問題を将来に残したほうがよいかもしない。ただ、これが、その形態が示唆するように、四隅突出型墳丘墓の原初型式のひとつとすれば、山陰においてそれが盛行する時期にはこの地では、美作と同じように衰退あるいは消失していたと考えるほかないし、また単に隅を外方に突出させて出入路をつくるという在り方が、方形周溝墓の陸橋のように、多分に多元的に成立したと考えれば、この周編寺山をここでいう四隅突出型墳丘墓と関連させてかならずしも考える必要はなく、たまたま周編寺山で出現した隅突出の形態がこの地で持続しなかつたと考えればよいことになろう。

このような次第で現状では何といつても、四隅突出型弥生墳丘墓の源流を考える場合、備後

と美作が何よりも注意されてよい。

先のような状況から考えると、四隅突出型弥生墳丘墓の成立は、まず備後・美作に、ついで山陰方面に及んだということになるが、分布の実態は発見の現状であり、常に不安定であることを考慮に入れると、備後・美作などをふくめた中国山地以北が成立の地であったと考えておいたほうがよい。このような比定さえも、かなり重要な問題をもたらすことになる。山陰弥生墓制の特色とされる四隅突出型墳丘墓の成立地に、吉備の北部がふくまれるという重大な問題である。しかも四隅突出型の盛行期つまり鍵尾式に併行する時期には、美作では発見皆無、備後では、三次市矢谷墳丘墓1基がやや異様な形態をもって存在することが知られているのみである。

さて宗祐池西第1号、竹田8号などが示す四隅突出型墳丘墓の成立期には、吉備に特有となってくる特殊器台形・特殊壺形土器はまだ出現していない。そのため「吉備的」なものを考古資料の中で捉えることは困難である。ただこの時期には、備中、備前、備後南部、美作などと、備後北部、出雲、伯耆、石見などの間に、土器の上で、若干の相違を示す。これをもって直ちに前者が「吉備」の範囲を示すかとなると、何ともいえないし、土器の型式圏が即同族ないし擬制的同族関係、あるいは政治的関係を示すかどうかは速断の限りでない。

それに対して、次の時期、四隅突出型の盛行期になると、備中南部を中心に特殊器台形・壺形土器が成立し、備前、美作、備後にも波及するようになる。この時期にも、土器の地域色は備中南部・備前・備後南部 / 美作 / 備後北部・備中北部などにみられるが、そうした小差をこえて、特殊器台形・壺形土器はひろがっているので、広範な部族の連合は、そうした土器の示す地域差をこえたものであることは明らかである。また四隅突出型墳丘墓の盛行地域の内に、出雲・石見・伯耆西部 / 伯耆東部 / 因幡などの土器形式の微細な地域色が指摘されることも、上と同様のことを示す。

このような諸点から考えると、はじめ弥生時代後期初頭に備後やおそらく山陰の一部とともに四隅突出型墳丘墓を成立させあるいは受容した美作、少なくともその西部の集団は、後期中葉に成立または成立を開始した特殊器台形・壺形土器による埋葬祭祀の共通性が示す吉備的諸関係の中に参入し、同族的連合関係においては、南の地、おそらく備中南部に加わったとみえる。美作における特殊器台形・壺形土器の出土遺跡の数は、7遺跡にのぼるが、その多くが墳丘を伴わない集団墓地の一角におかれていることは、備中南部を中心とする連合に加わりながらも、その占める位置の低かったことを暗示している。

それに対して備後は、特殊器台の盛行期に、矢谷四隅突出型墳丘墓が築造されている。⁽¹¹⁾ しかもそれに特殊器台形・壺形土器が伴出する。しかし、この墳丘墓の形狀は、この時期に山陰の四隅突出型弥生墳丘墓ではひろくみられる墳端の石列からなる溝状遺構がみとめられず、また方形の主丘にもう一つの方形を付設するという先に「異様」と表現した平面形をもっている点

で、山陰の四隅突出型の「変形」ともいえるものである。このことから考えると、備後の少くとも三次付近では、墳形を山陰と「共有」し、同時に吉備特有の特殊器台形・壺形土器をもつという、陰陽に対して特異なかかわり方をしていたと考えることができる。

さて現状において、築造年代のもっとも遡る四隅突出型弥生墳丘墓は、すでにふれた三次市宗祐池西第1号墳丘墓、ついで鏡野町竹田8号墳丘墓、庄原市田尻山1号墳丘墓、さらに倉吉市阿弥大寺1号墳丘墓、瑞穂町順庵原1号墳丘墓、また多少問題はあるが松江市友田「貼石方形墓」ということになろう。それを突出部の構造の変遷でみると、（1）隅の突出の微小なもの〔宗祐池西第1号、竹田8号、田尻山1号〕から、（2）突出部が細長くつきでるもの〔阿弥大寺1号、順庵原1号〕へ、ついで（3）突出部がしゃもじ形に拡大するもの〔仲仙寺⁽¹²⁾9号、宮山⁽¹³⁾IV号〕となる。最後者については、突出部が拡大していく二、三の過程を指摘できる（41図参照）。

また、盛行期の四隅突出型墳丘墓にみられる溝状石列についてみると、（1）の宗祐池西第1号と竹田8号では斜面貼石以外の墳裾石列はみとめられない。田尻山1号になって斜面貼石の外辺に小形の角礫からなる石列があらわれ、（2）の段階で斜面貼石から数10cmほど離れて円礫の石列がめぐるようになる。しかしこの段階でも突出部端において石列と貼り石ないし突端への置き石との間隔はいちぢるしく狭くなり、ほとんど接するほどである。このことは、突出部端が他の部分と区別して意識されていたことを示し、それが墳頂への接近の路であるとする推定を確かなものとする一つの証拠である。ついで（3）の段階では、突出部端をふくめ石列と貼石との間に敷石がおかれ、それが段差をもつ二列となるものも少なくない。そのうち、敷石が一列のもの（仲仙寺9号、宮山IV号など）、二、三列のもの（安養寺3号）などがあるが、変遷差とは思われない。貼石の配置の仕方については、脱落ないし崩壊しているものがしばしばであるため、その変遷についてはここではふれない。

墳丘の規模については、（1）（2）は大差なく次表の通りであるが、（3）になって急速に増大するものが現われ、また不均等が拡大する。

以上のことから、四隅突出型の変遷は、隔絶の形式的整備の進行過程である。このことは、墳頂への接近の路としての突出部に対する墳裾石列の関係においてもっともよく観察できる。

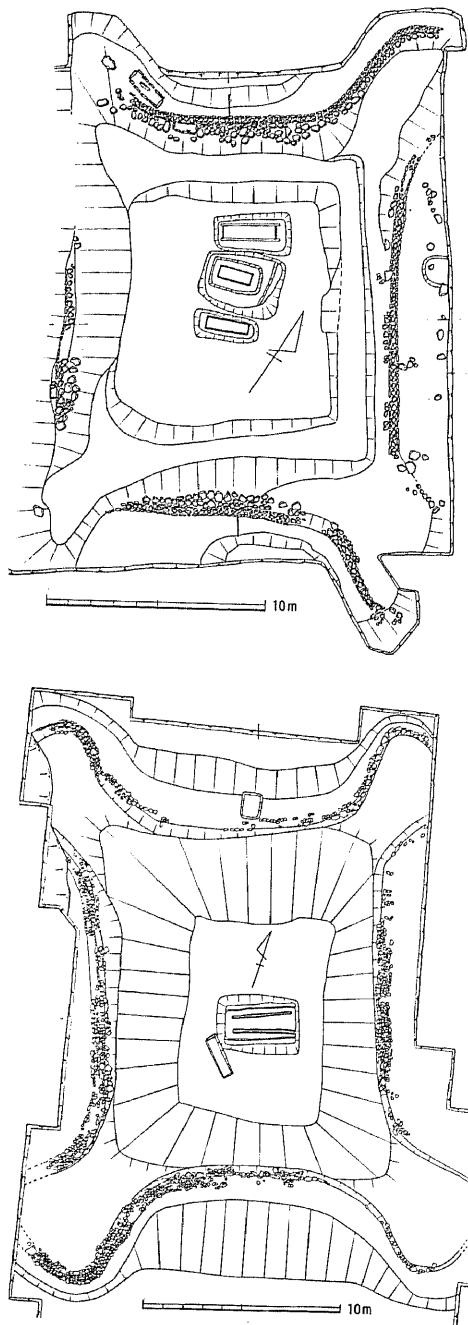


Fig. 40 (上) 仲仙寺9号四隅突出型
弥生墳丘墓

(下) 宮山IV号四隅突出型
弥生墳丘墓

(単位m)	
(1) 宗祐池西1号	10.0×5.0
田尻山1号	10.9×9.6
竹田8号	14.0×?
(2) 阿弥大寺1号	13.6×?
阿弥大寺2号	6.4×?
阿弥大寺3号	6.2×?
順庵原1号	10.75×8.25
友田「貼石方形墓」	10.5×?
(3) 宮山IV号	18×15
仲仙寺9号	18×15
仲仙寺10号	18×18
安養寺1号 ⁽¹⁴⁾	20×16
安養寺3号 ⁽¹⁵⁾	23~
西谷2号	15×?
西谷3号	37×27
西谷4号	32×26
西谷6号	17×?
西谷9号	38×30

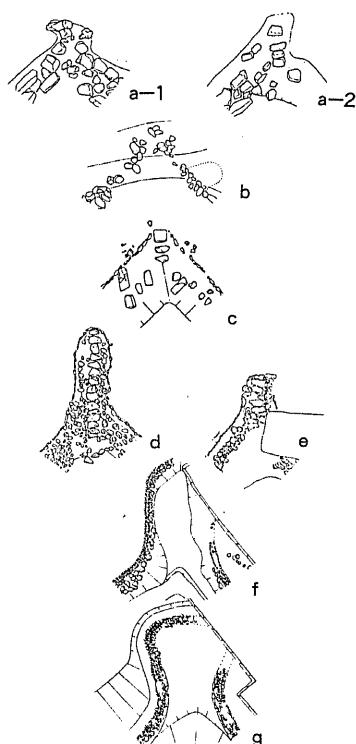


Fig. 41. 四隅突出型弥生墳丘墓の突出部の変遷

- a . 宗祐池西1号 b . 竹田8号
- c . 田尻山1号 d . 阿弥大寺1号
- e . 順庵原1号 f . 仲仙寺9号
- g . 宮山IV号 (各報告書から)

注

- (1) そうした中には、加藤光臣氏は矢谷墳丘墓の「まとめ」に当り、「在地的墓制の伝統を踏襲するとともに、山陰地域との密接な関連性も示唆するものである」と述べ、また宗祐池西1号墳丘墓に関し、「三次盆地においてはすでに弥生中期末～後期前半には四隅突出型の初現形態ともいべき方形墓が出現……同時に弥生後期を通じて山陰地域の墓制とも密接な関連性が維持された」とされ、「在地の伝統」を強調する卓見を披瀝している。
- (2) 向田裕始「田尻山古墳群」『中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』(1) 1978年
- (3) 「宗祐池西遺跡現地説明会資料」1980年
- (4) 真田広幸・森下哲哉『上米積遺跡発掘調査報告Ⅱ』1980年
- (5) 門脇俊彦「順庵原一号墳について」『島根県文化財調査報告』第7集 1971年
- (6) 岡崎雄二郎・中尾秀信・佐々木稔「友田遺跡」『松江圏都市計画事業乃木地区土地区画整理事業区域内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』1983年
- (7) 注(6)と同じ。
- (8) 潮見浩ほか「藤が迫遺跡群」『広島県文化財調査報告』第9集 1971年
- (9) 赤松啓介「加西郡加西町周編寺山古墳発掘概報」1958年頃（発行年月日なし）
- (10) 近藤義郎・中島寿雄「門の山第1号墳発掘調査報告」『佐良山古墳群の研究』1952年
- (11) 金井亀喜・小都隆編『松ヶ迫遺跡群発掘調査報告』1981年
- (12) 近藤正『仲仙寺古墳群』1972年
- (13) 近藤正・前島己基ほか『宮山古墳群』1974年
- (14) 勝部昭「安来・安養寺古墳群」『菅田考古』1976年
- (15) 出雲考古学研究会『西谷墳墓群』1980年



1. 発掘前の竹田墳墓群(香々美川東岸から)



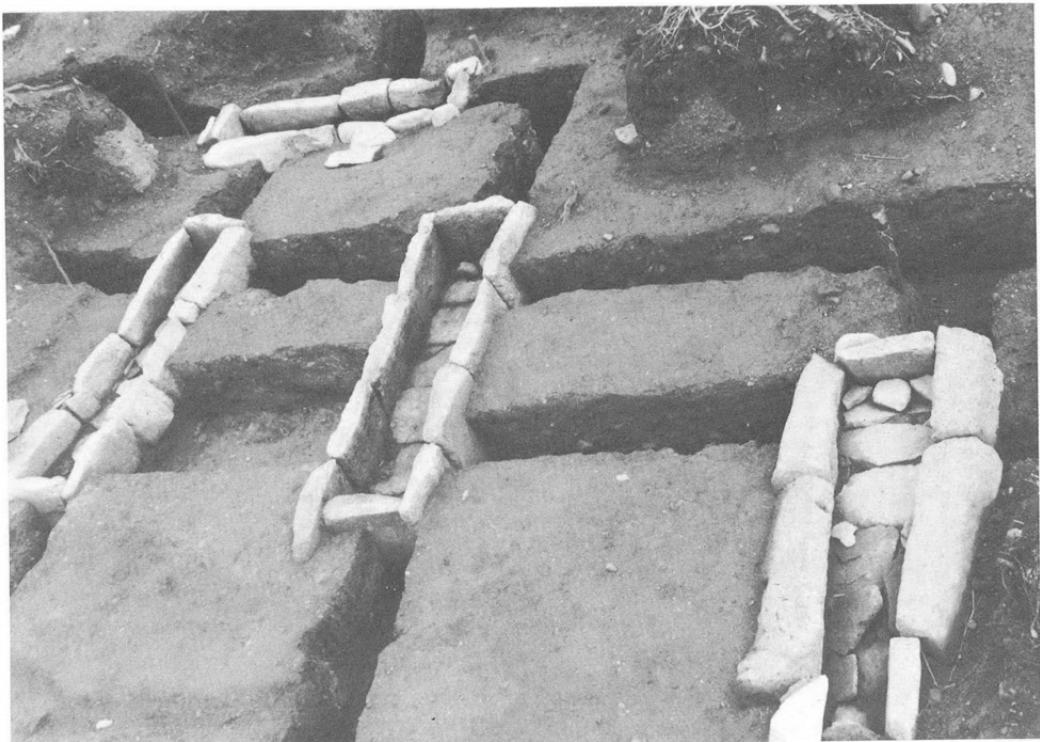
2. 発掘調査中の竹田墳墓群（8号墳丘墓から竹田丘陵西支脈を望む）



1. 調査前の5号墳（北東から）



2. 5号墳北斜面葺石（西から）



1. 5号墳各棺配置（西から）



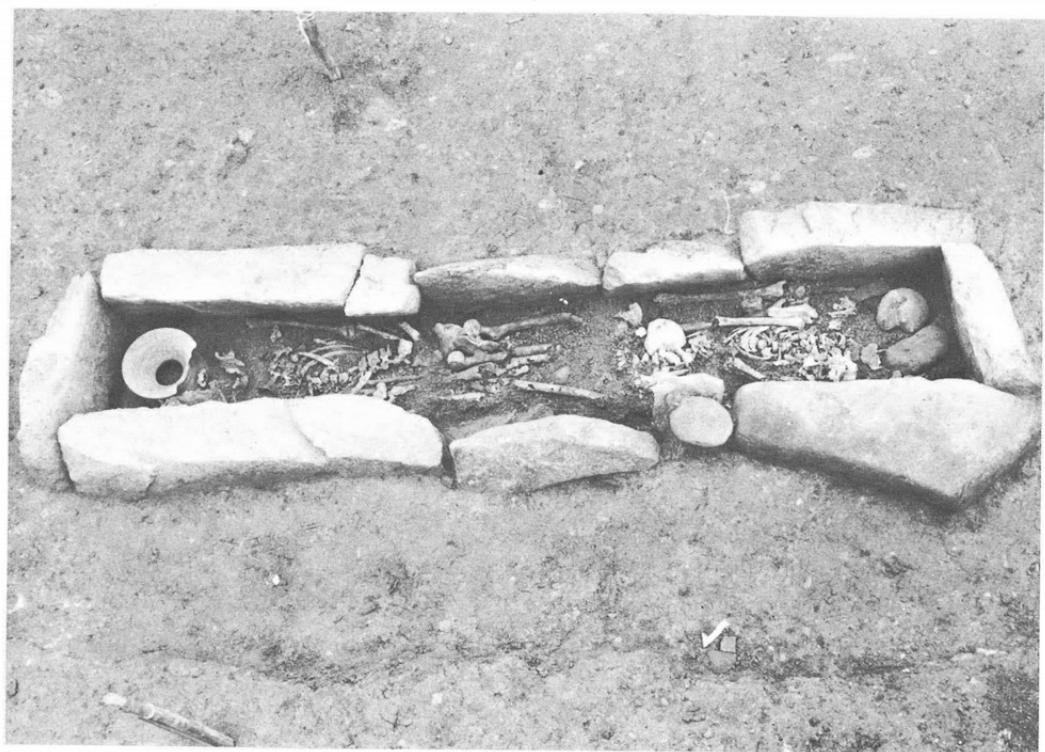
2. 5号墳土層断面（中央北棺、中央南棺の間を西から）



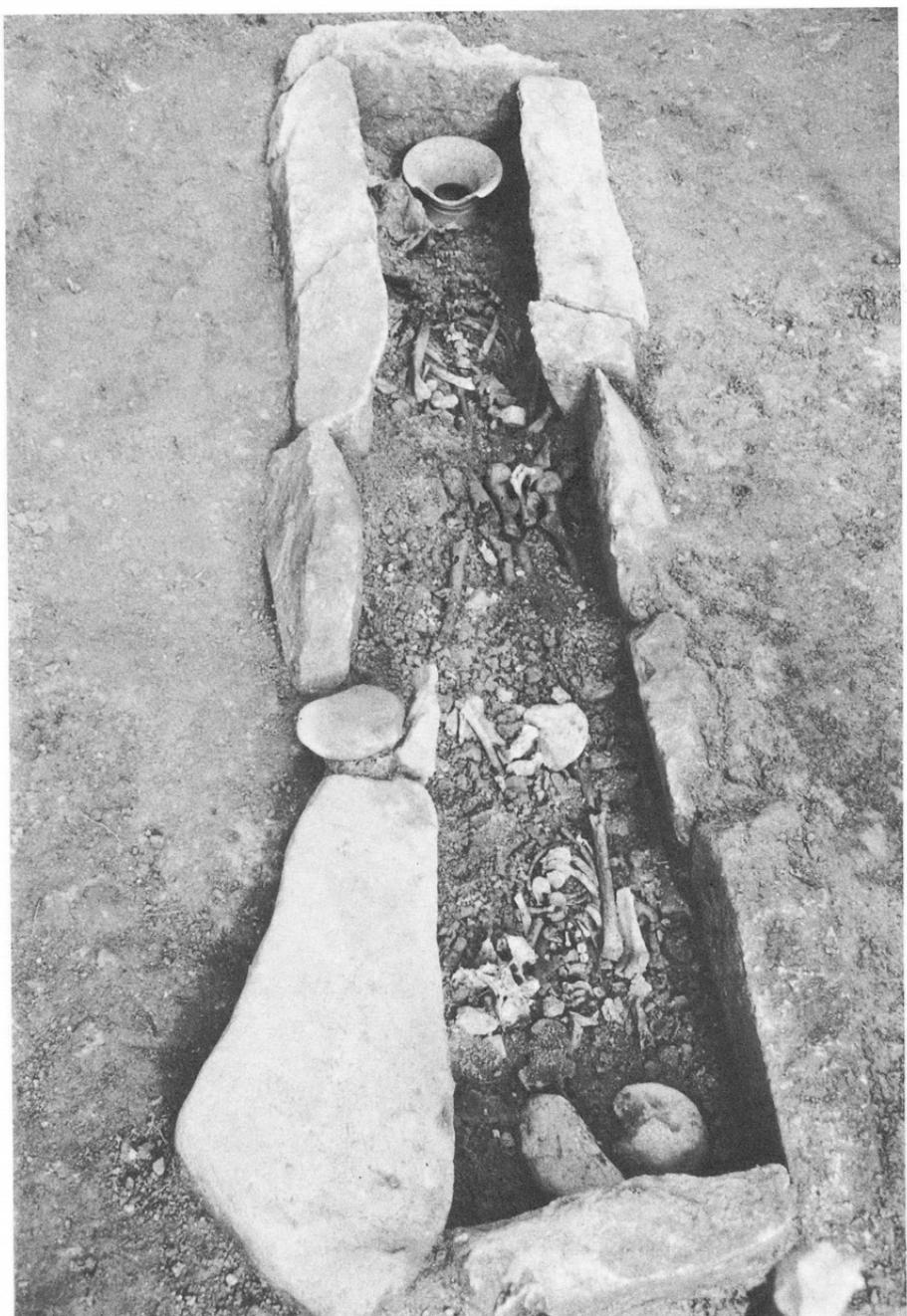
1. 5号墳中央北棺蓋石上面（西から）



2. 5号墳中央北棺底部（西から）



3. 5号墳中央北棺遺物出土状況（北から）



5号墳中央北棺内部（西から）



1. 5号墳中央北棺内器台（枕）から
落下した頭骨



2. 5号墳中央北棺東半部、人骨
鉄器出土状況



5号墳中央北棺西半部、人骨鐵器出土状況



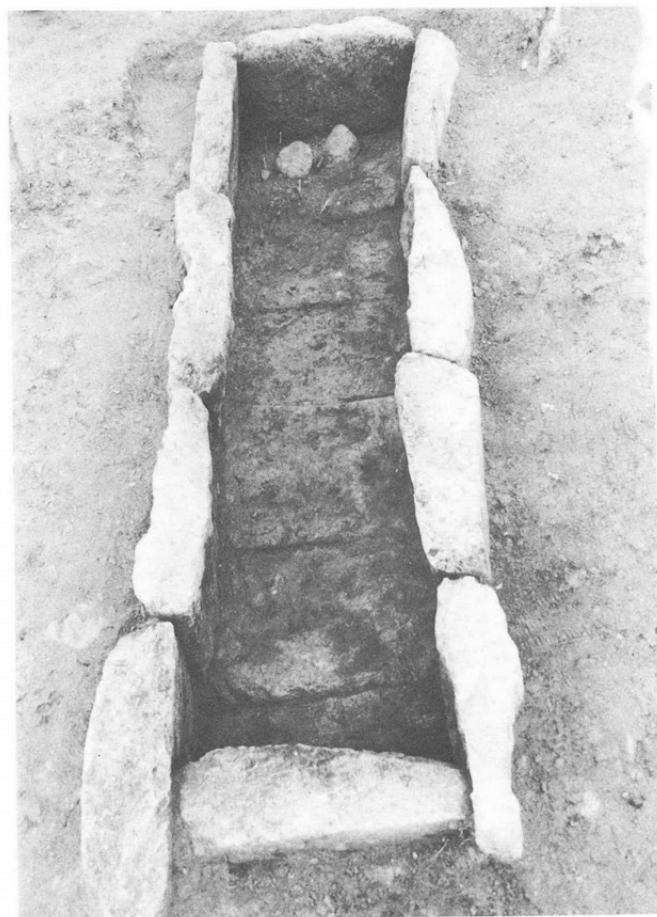
1. 5号墳中央北棺出土鼓形器台



2. 5号墳中央北棺出土鉄鎌·刀子·小刀子



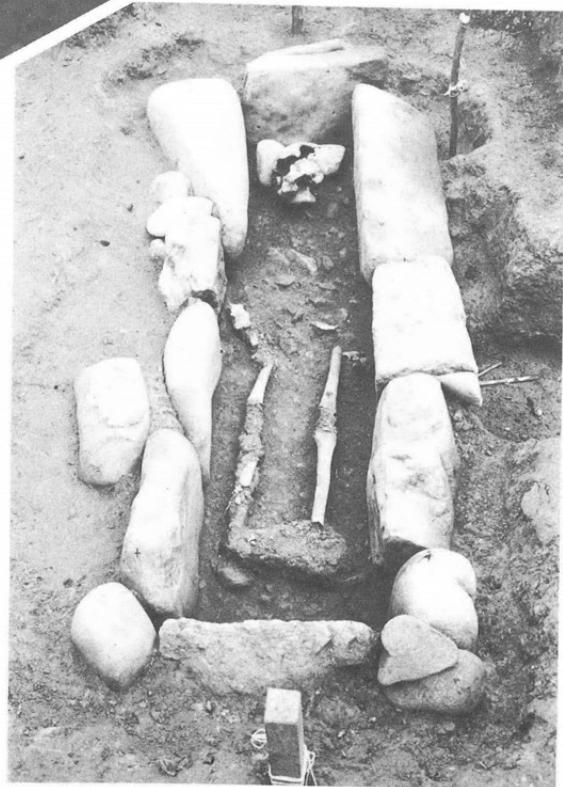
1. 5号墳中央南棺蓋石上面（南から）



2. 5号墳中央南棺内部（西から）



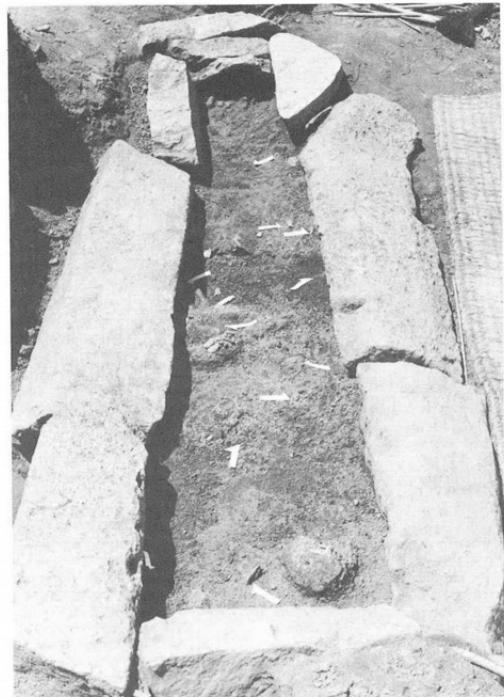
1. 5号墳東棺蓋石上面
(南から、一部は粘土による被覆のまま)



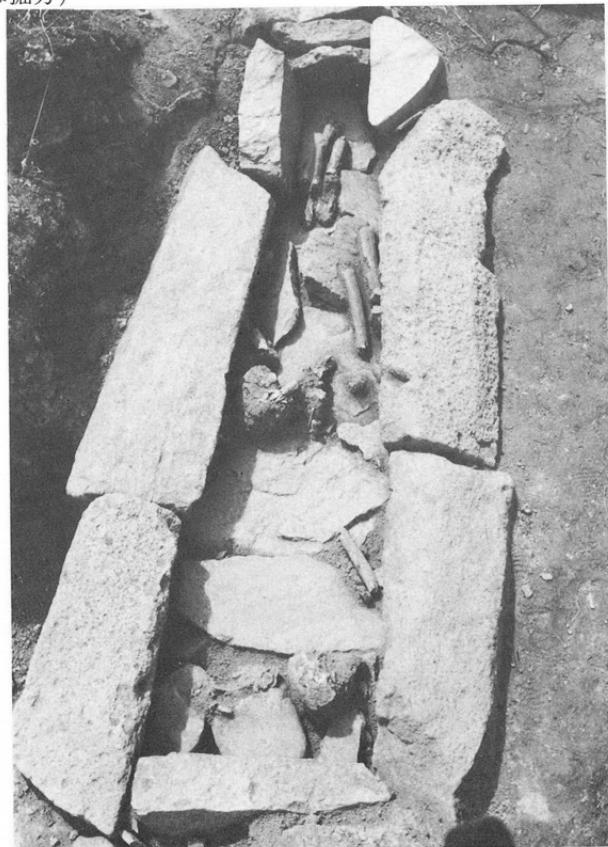
2. 5号墳東棺内部
(南から)



1. 5号墳南棺蓋石上面
(東から、粘土端は掘方)



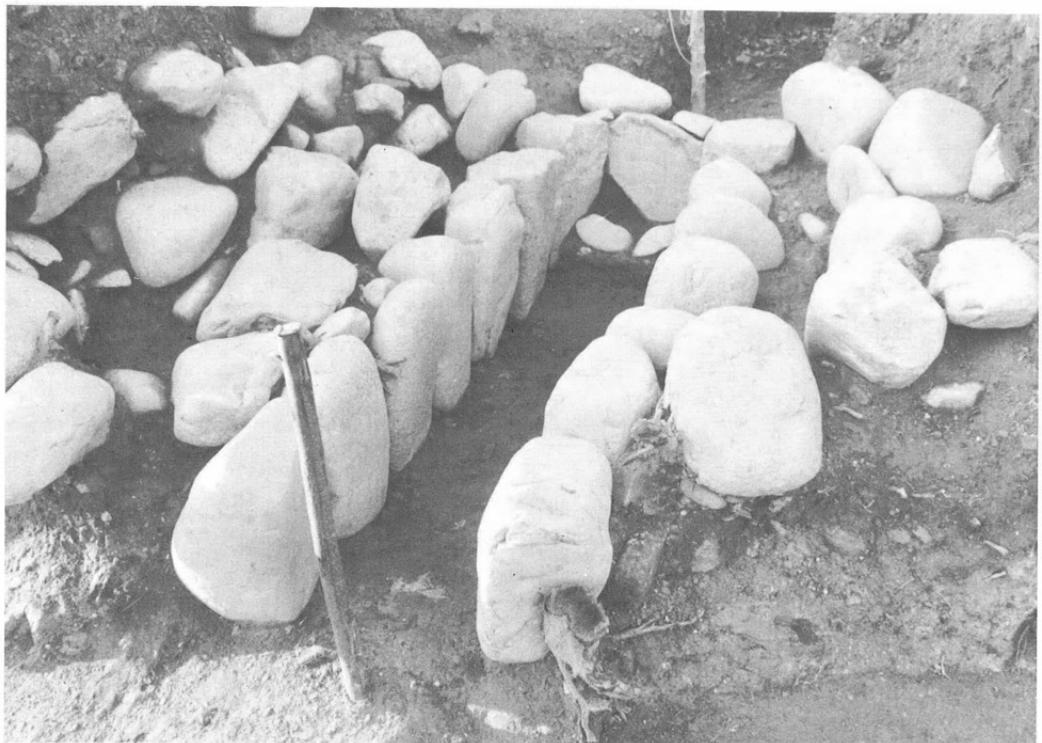
2. 5号墳南棺内 発掘直前(東から)



3. 5号墳南棺内人骨出土状況(東から)



1. 調査前の6号墳（南から）



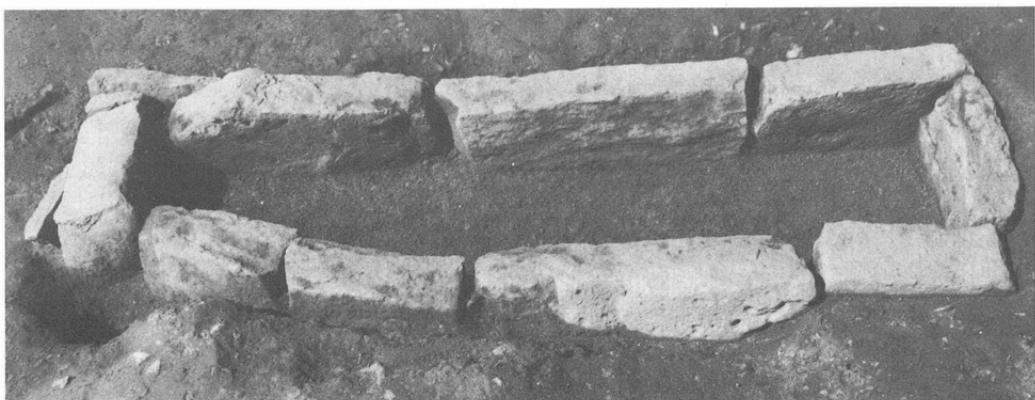
2. 6号墳石棺（南から）



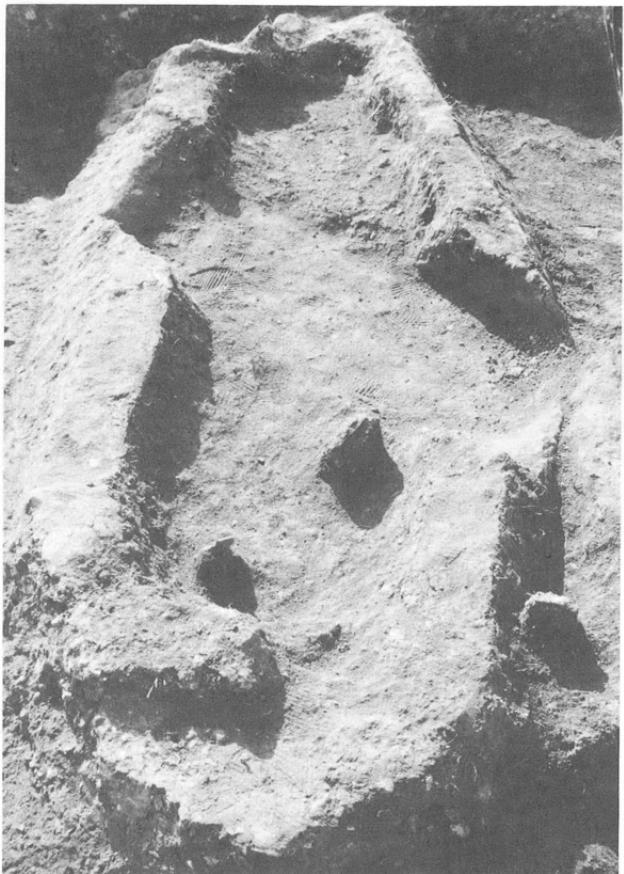
1. 調査前の7号墳全景（南から）



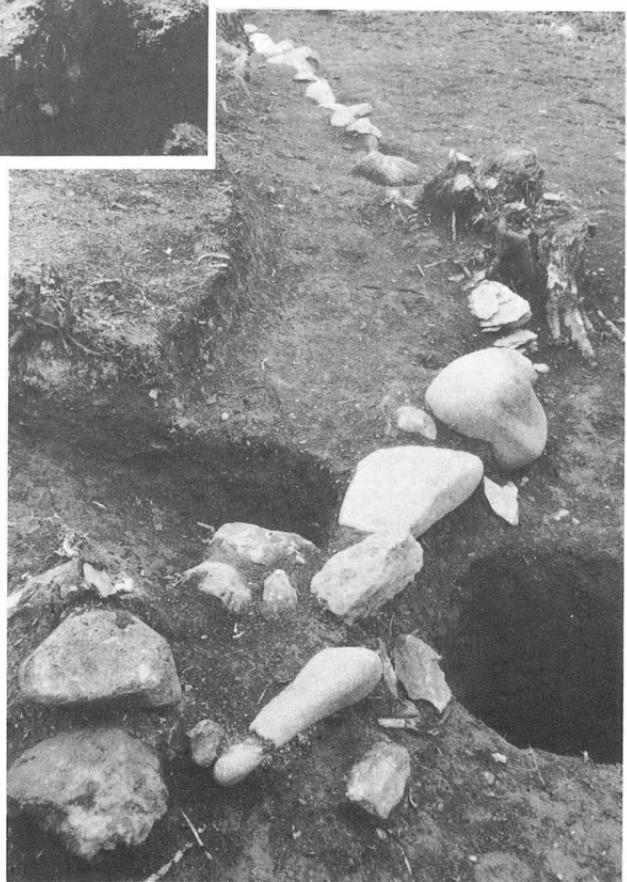
2. 7号墳石棺蓋石上面（東から）



3. 7号墳石棺内部（東から）



1. 9号墳中央粘土櫛
遺物出土状況（東から）



2. 9号墳南部葺石
(南西から)



1. 9号墳内行花文鏡出土状況



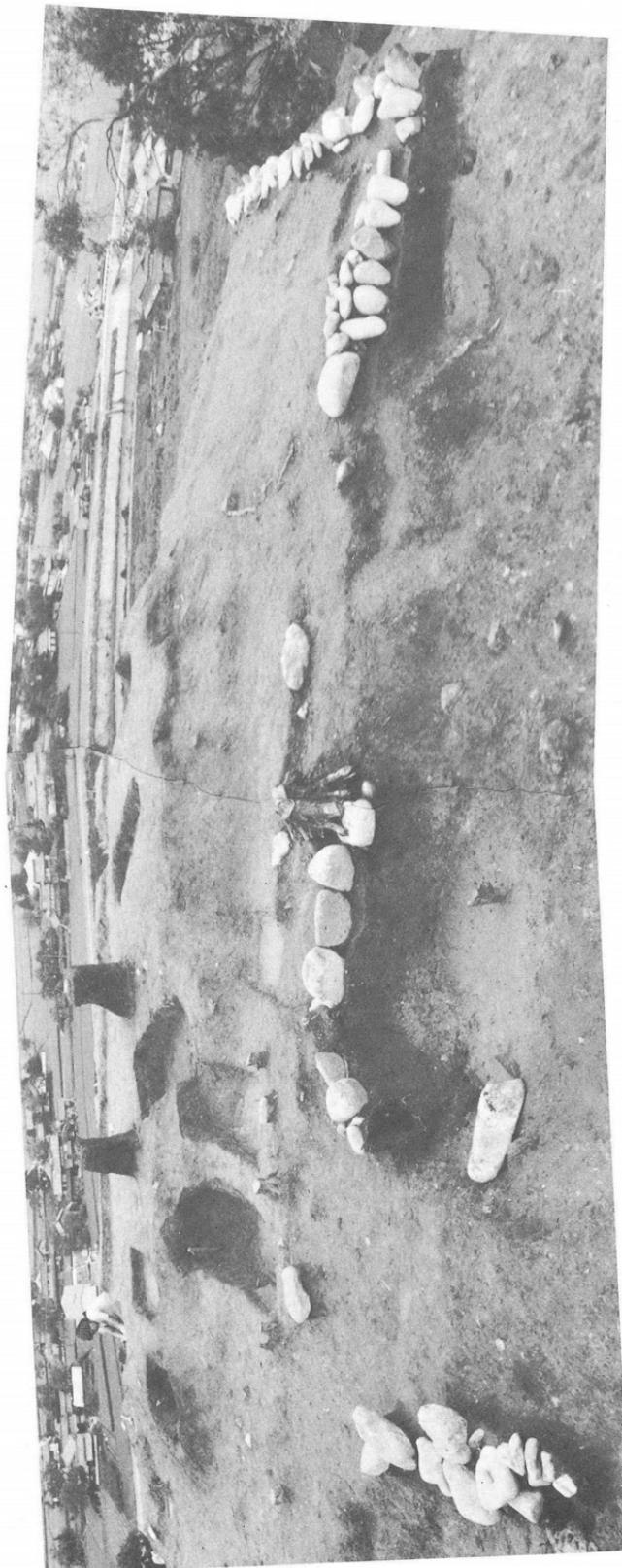
2. 9号墳出土 内行花文鏡・鉄器・管玉及び9号墳下住居址出土鉈



1. 発掘前の8号墳丘墓（北西から）



2. 8号墳丘墓西部中央列石（東から）



8号墳丘墓全景（西から）



1. 8号墳丘墓南西隅列石（南西から）



2. 8号墳丘墓南西部土器棺出土状況（北東から）



1. 8号墳丘墓崖面北土器棺と土壙墓（南から）



2. 8号墳丘墓北西部土器棺出土状況（西から）



8号墳丘墓崖面土壙墓群（北西から）



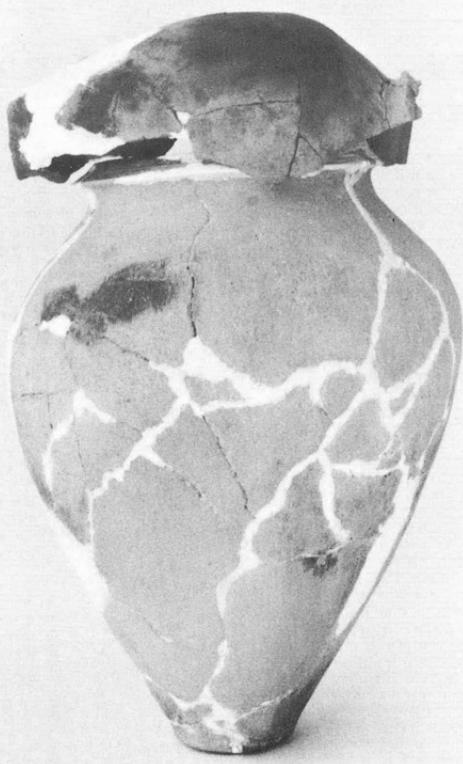
1. 8号墳丘墓北西部土壙墓群（西から）



2. 8号墳丘墓南西部土壙墓群（西から）



1. 8号墳丘墓北西部出土土器棺



2. 8号墳丘墓南西部出土土器棺



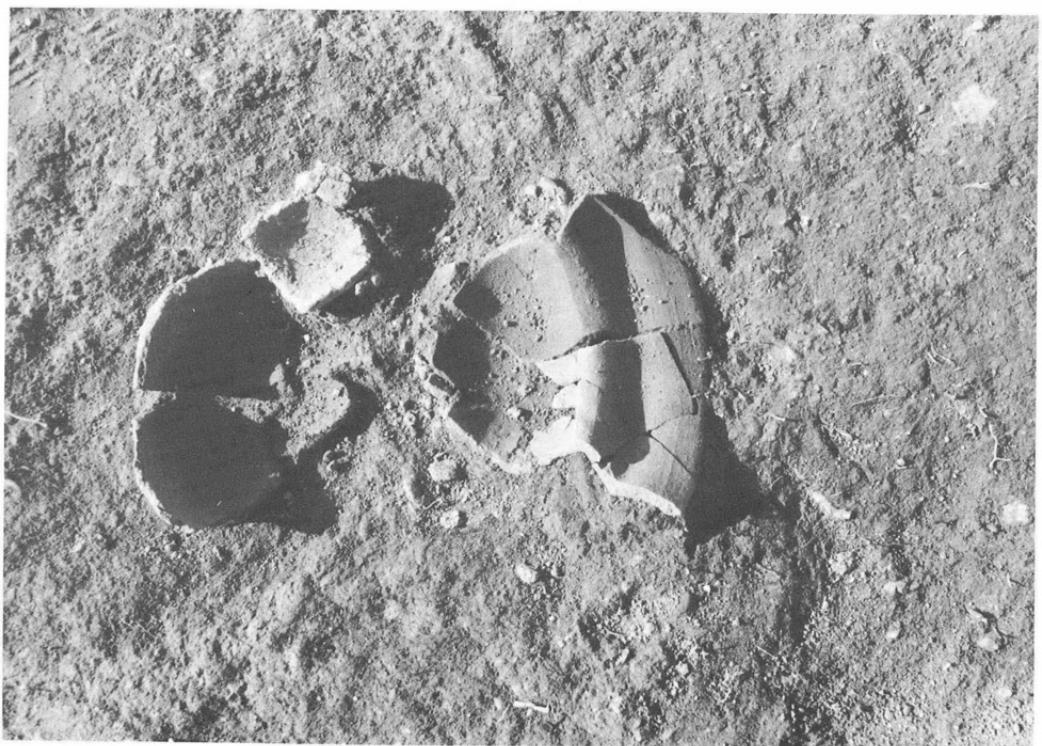
1. 9号墳下住居址全景（東から）



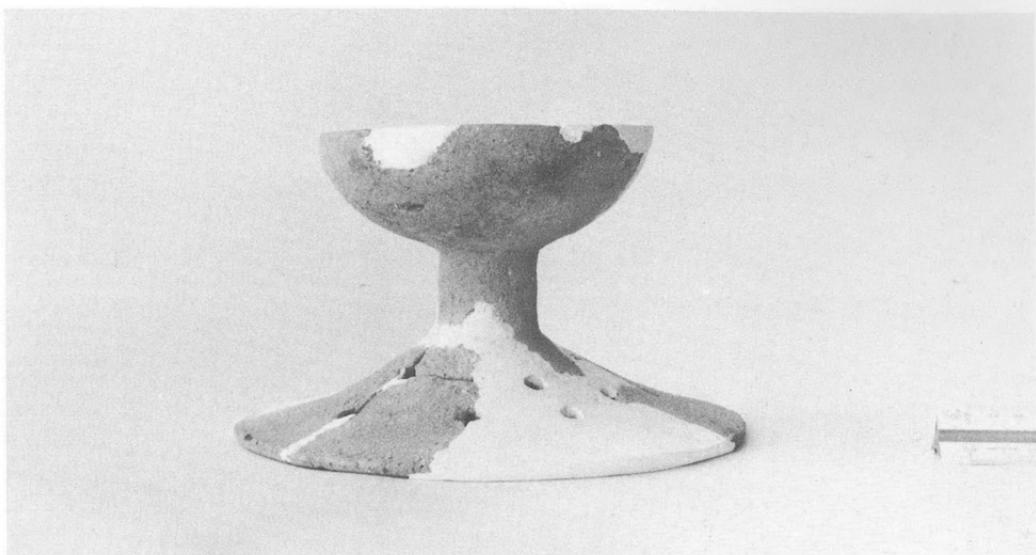
2. 9号墳下住居址北東部（南から）



1. 9号墳下住居址 つぼ・高环出土状況



2. 9号墳下住居址 小形丸底土器出土状況



1. 9号墳下住居址出土高環



2. 9号墳下住居址出土つぼ

竹田墳墓群
竹田遺跡発掘調査報告第1集

1984年6月30日

発行 鏡野町教育委員会◎
岡山県苦田郡鏡野町竹田660

印刷 作州日報印刷
岡山県津山市皿901—6

